新山村振興農林漁業対策事業に伴う

折原上堤東遺跡発掘調査報告書

1994年3月

八雲村教育委員会

新山村振興農林漁業対策事業に伴う

折原上堤東遺跡発掘調査報告書

1994年3月

八雲村教育委員会

序

平成５年度から８年度にわたる本村産業課による事業として，「新山村振興農林漁業対策事業」が実施されることになり，その事業の一環である「山村広場（多目的広場）事業」が，平成５・６年度分事業として，着工されることになりました。

八雲村教育委員会は，産業課の依頼によって，山村広場造成工事に伴う「折原上提東遺跡発掘調査」を致しました。

同地は，遺跡地図にも周知の集落跡として掲載されており，また八雲村において住居跡の発掘調査は初めてであり，蓮岡法暲先生の指示を頂きながら約１年間を費やして慎重に実施いたしました。

本調査は，八雲村教育委員会の川上昭一調査員を中心として，多数の村民の方々の熱心なご協力を頂きました。

本調査の過程で，竪穴住居跡10棟，掘立柱建物14棟，その他（土壙墓１，土坑23，加工段１，多数のピット）が発見され，貴重な研究資料を得ることができ，この報告書を作成いたしました。

本調査によって，当時の状況が漸次明らかになって参ることは，まことに喜ばしいことではありますが，貴重な文化遺産が消えていくことに関しましては，誠に心寂しいものを覚えます。

本調査を実施するに当たりまして，蓮岡先生の御指導はもとより島根県教育委員会文化課から賜りました御指導御助言，また，直接発掘に協力頂きました多数の村民の方々に衷心より敬意と感謝の意を表します。

平成６年３月

八雲村教育委員会教育長

佐　原　通　司

例　　言

1. 本書は，八雲村産業課の委託をうけて，八雲村教育委員会が実施した新山村振興農林漁業対策事業多目的広場造成工事に伴う折原上堤東遺跡の発掘調査の報告である。
2. 調査は平成４年度が範囲確認調査，５年度がそれに基づいて本調査を実施した。遺跡の所在地は次の通りである。

   島根県八束郡八雲村大字西岩坂 1109 番地１　外 20 筆
3. 調査組織は以下の通りである。

   事　務　局　　伊野憲次（教育次長），三島伸行（社会教育主事）

   調　査　員　　蓮岡法暲（布勢小学校校長），川上昭一（社会教育係主事）

   調査指導者　　足立克己（島根県教育庁文化課文化財保護主事），角田徳幸（同主事）

   作　業　員　　安達菊美，安部貞子，石倉　功，石倉千美，石倉恒雄，石倉睦子，石原政子，岩田節子，江角康子，小林勇雄，近藤仁一，須山恵美子，武田裕子，田中和美，西越イワヨ，引野恒代，藤原秀子，槙本静江，山根　隆

   遺物整理　　江角康子，武田裕子，田中和美，深津光子
4. 発掘調査，報告書の作成に当っては，島根県教育庁文化課の各位に有益なご助言をいただいた。記して感謝の意を表します。

   勝瀬利栄，中村陵子，西尾克己，丹羽野裕，広江耕史，間野大丞，柳浦俊一
5. 本書で使用した遺構略号は次の通りである。

   ＳＩ－竪穴住居，ＳＢ－掘立柱建物，ＳＤ－溝，ＳＫ－土壙（坑），Ｐ－ピット，ＳＸ－性格不明
6. 本書で使用した方位は磁北を示す。
7. 本書で使用したグリッドの呼称は，各グリッドの東側の杭番号で呼ぶこととした。
8. 本書に掲載した「遺跡位置図」は建設省国土地理院発行のものを使用し，「調査区配置図」は八雲村産業課作成の工事図面を浄書して使用した。
9. 本遺跡出土遺物及び実測図，写真は八雲村教育委員会で保管している。
10. 本書の執筆，編集は，蓮岡調査員と島根県教育庁文化課の指導を受け川上が行った。

目　　次

Ⅰ　位置と環境 …… 1

Ⅱ　調査に至る経緯 …… 3

Ⅲ　調査の経過 …… 3

Ⅳ　遺跡の概要 …… 4

　第Ⅰ調査区 …… 7

　第Ⅱ調査区 …… 46

Ⅴ　小　　結 …… 77

I　位置と環境

八雲村は松江市の南郊に位置し，中海に注ぐ意宇川の上，中流域に当たり，それに流れ込む数本の小河川と山林，谷水田により地形が造られている。

遺跡は本村の北側，意宇川と小河川が形成した平野部を取り囲む地域に集中している。折原上堤東遺跡も，この平野に面した丘陵端部の南側緩斜面にある。

周辺の遺跡としては，古墳時代の遺跡がほとんどを占めるが，少し離れた東北にある空山山頂に，前期旧石器時代と考えられている空山遺跡が存在する。握斧・握槌と推定される石器が，洪積層の崖面から検出され，また玉髓や瑪瑙の半製品が道路の掘削面より採取されている。同遺跡からは縄文時代に属する石鏃や石匙が発見されており，縄文時代中期頃まで生活の舞台となっていた事が認められている。しかし，本村では弥生時代後期までの遺跡，遺物はほとんど知られていない。

古墳時代前期の遺跡としては，３基の方墳からなる小屋谷古墳群（49）が存在する。内部主体は箱式石棺，壺棺及び組合式木棺であり，副葬品としては３号墳の組合式木棺内から四蛇鏡１面が出土している。

中期以降では増福寺古墳群（26）・土井古墳群（30）などの古墳群が，平野東の低丘陵上に分布している。増福寺古墳群は一辺６～14.5ｍの方墳26基によって構成されている。調査されたうち20号墳の西裾平坦面からは，古式の子持壺が出土し，古墳の時期を知る上で注目される。土井古墳群は，増福寺古墳群の東に営まれている古墳群で，一辺８ｍ前後の方墳が35基以上によって構成されている。

古墳時代後期に入ると，出雲地方東部に多い石棺式石室をもつ雨乞山古墳（33）が平野北東にそびえる雨乞山南麓に造られた。墳丘は周囲を削られているが，一辺10.0ｍ，高さ2.5ｍを測る方墳と考えられる。意宇川下流域の古墳の影響を受けたこの古墳は，八雲村最大規模の石室を有し，この地域の有力な豪族の存在が窺われる。一方，家族墓的な性格をもつ横穴墓については四歩市横穴群（24）が，土井古墳群の南側の丘陵山腹に分布する。四歩市横穴群は，確認できる横穴だけで24穴を数え，平面プランはおおむね方形で，天井は丸天井形をなしている。

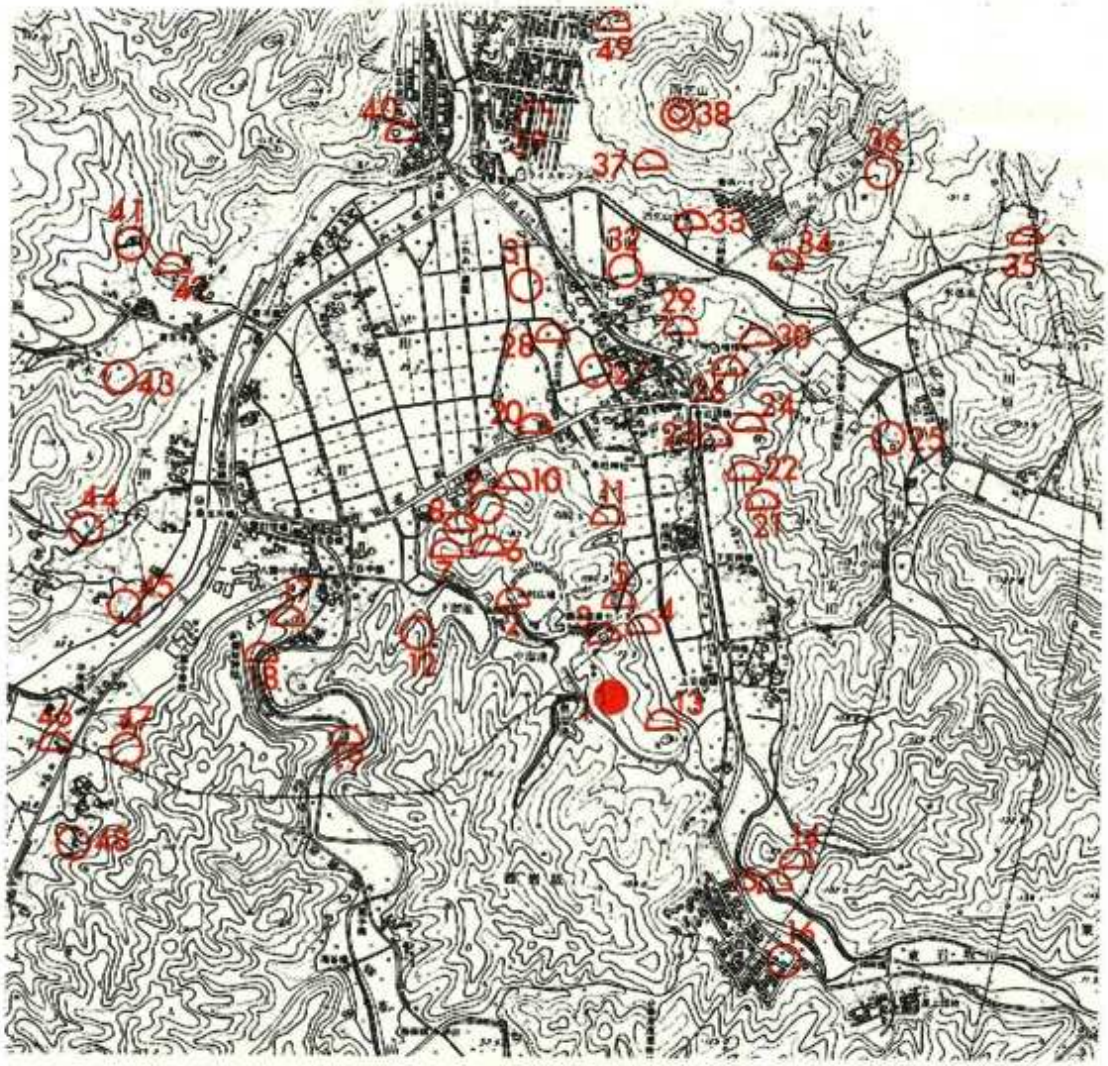
奈良時代における当遺跡周辺は，『出雲国風土記』の意宇郡大草郷に属し，出雲国庁や意宇郡家が置かれた地域であった。

参考文献　『御崎谷遺跡・小屋谷古墳群発掘調査報告書』　八雲村教育委員会　1981年

『土井13号墳発掘調査報告書』　八雲村教育委員会　1979年

『増福寺古墳群発掘調査報告書』　八雲村教育委員会　1981年

『八雲村の遺跡』　八雲村教育委員会　1978年



第１図　折原上堤東遺跡の位置と周辺の遺跡（1：20,000）

1. 折原上堤東遺跡　2. 北折原遺跡　3. 安田横穴群　4. 安田古墳群
5. 外輪谷横穴群　6. 禅定寺古墳群　7. 折原横穴群　8. 禅定寺横穴群
9. 禅定寺遺跡　10. 中山古墳群　11. 谷の奥古墳群　12. 折原下堤遺跡
13. 松の前古墳　14. 細田古墳群　15. 細田横穴群　16. 鈩谷遺跡
17. 大日堂横穴群　18. 岩坂神社横穴群　19. 岩屋口横穴群　20. 中山五輪塔群
21. 高丸古墳群　22. 高丸横穴群　23. 四歩市横穴群　24. 四歩市古墳群
25. 浜井場遺跡　26. 増福寺古墳群　27. 紙屋遺跡　28. 池の尻古墳
29. 増福寺裏山古墳　30. 土井古墳群　31. 山崎遺跡　32. 戸波遺跡
33. 雨乞山古墳　34. 原の前横穴群　35. 善三郎谷横穴群　36. 穴田遺跡
37. 雨乞山古墳群　38. 雨乞山遺跡　39. 東岩坂要害山跡　40. 勝負谷古墳群
41. 椎木谷遺跡　42. 青木横穴群　43. 青木谷遺跡　44. 古城遺跡
45. 上元田遺跡　46. 雲場古墳　47. 桧廻遺跡　48. 掛合遺跡
49. 小屋谷古墳群

II　調査に至る経緯

八雲村は人口急増地域であるが，交通条件・就労場・レクリエーション施設等，定住環境整備の立ち遅れなどにより，若者層に限って見ると，その構成比は年々減少傾向にある。また，自家用車の普及や屋内就業の増加，生活・就労状況の変化は，運動機会の減少をもたらしている。

これに対処するために，八雲村では多目的広場を造成し，山村地域の活性化を図ることとした。

この事業に先立ち，平成４年７月22日，八雲村産業課から八雲村教育委員会に造成予定地内の遺跡所在の有無照会の依頼がなされた。造成予定地内には周知の埋蔵文化財包蔵地である折原上堤東遺跡が存在しており，遺跡保護のための協議がなされたが，計画変更は困難であるとの結論に達し，事前の発掘調査を行うこととなった。しかし，本村には調査員がいなかったため，蓮岡法暲氏に調査担当者となって頂き，島根県教育庁文化課の指導の基に，発掘調査に入ることとなった。

III　調査の経過

平成４年度の調査は，平成５年１月25日から３月28日の２ケ月間にわたって遺跡の範囲確認調査と隣接する丘陵地の試掘調査を実施した。その結果，折原上堤東遺跡に隣接した丘陵部にも遺跡が存在することが明らかになったので，新たに明らかになった丘陵を折原上堤東遺跡調査Ⅰ区，周知の方を調査Ⅱ区として発掘調査を実施することとした。

平成５年度は，平成４年度の調査結果をもとに調査区を設定し，本調査を実施した。

第Ⅰ調査区は，４月１日より表土掘削を開始し，５月13日から遺構の精査を行った。第Ⅰ調査区からは竪穴住居跡・掘立柱建物・加工段・土坑・ピットを検出し，８月６日に全体写真の撮影を行い調査を終了した。

第Ⅱ調査区は，８月11日より表土掘削を開始し，10月１日から遺構の精査を行った。第Ⅱ調査区では竪穴住居跡・掘立柱建物・土坑・土壙墓・ピットを検出し，11月23日に全体写真の撮影を行い調査を終了し，この後，12月５日に現地説明会を開催した。

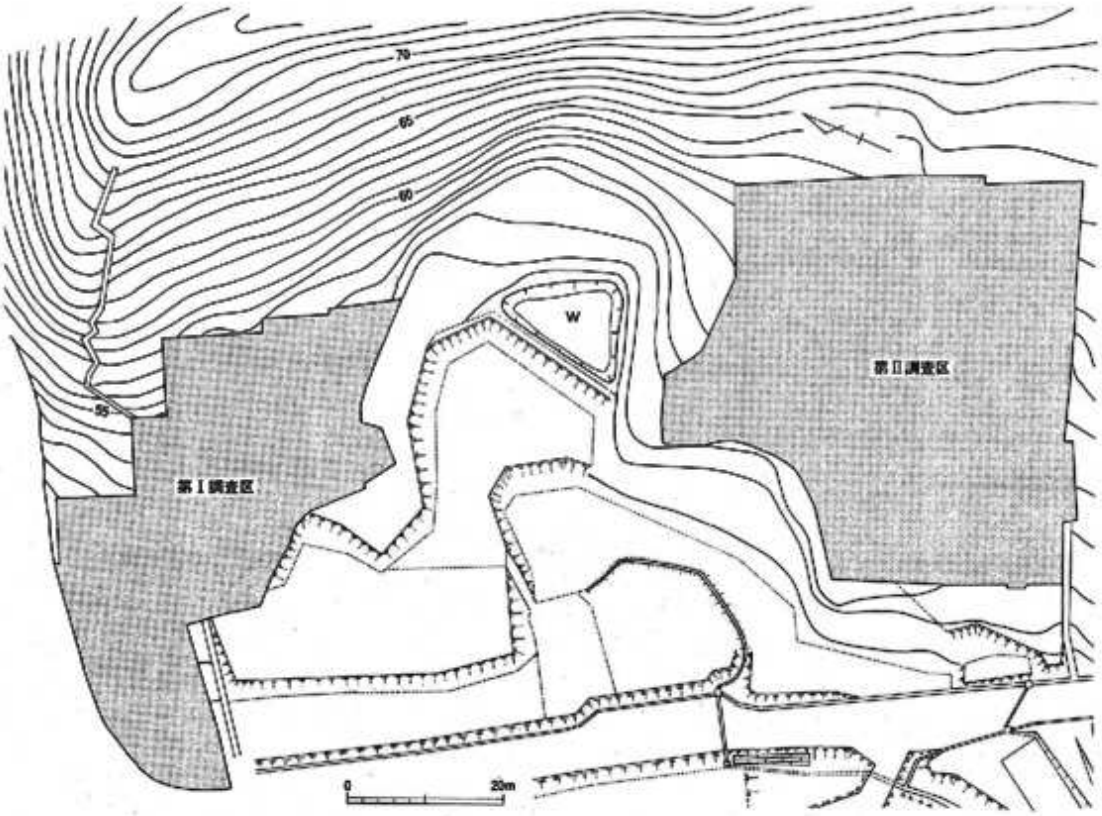
なお，調査は10×10ｍのグリッドを調査区域に設定し，各グリッド単位に行い，遺物の取り上げについては，グリッドの層位ごとに採取した。また，重要と思われる遺物については，一点一点出土地点を実測して取り上げを行った。

Ⅳ　遺　跡　の　概　要

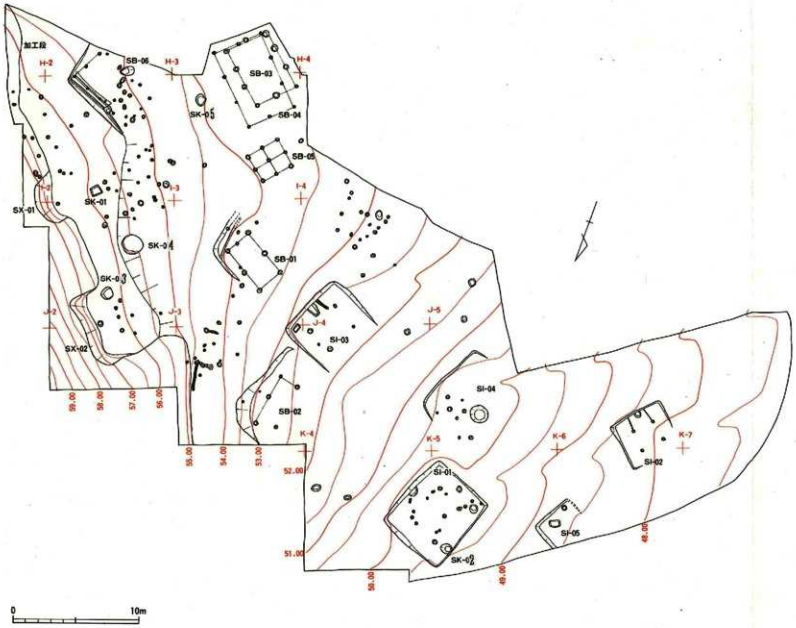
今回の調査では，第Ⅰ調査区において竪穴住居跡５棟（ＳＩ－01～05），掘立柱建物６棟（ＳＢ－01～06），加工段１段，土坑５基（ＳＫ－01～05），多数のピットを検出した。住居跡は標高48.00～55.50ｍの範囲に分布している。第Ⅰ調査区の北西は掘削を受けかなり急峻な崖となっているが，掘削当時多数の土器片が出土したといわれており，遺跡は更に北西に続いていたものと考えられる。

第Ⅱ調査区においては，竪穴住居跡５棟（ＳＩ－06～10），掘立柱建物８棟（ＳＢ－07～14），土坑（壙）19基（ＳＫ－06～24），溝状遺構４本（ＳＤ－01～04），多数のピットを検出した。住居跡は標高54.50～60.00ｍの範囲に分布している。第Ⅱ調査区の南東は，調査区域外となるため調査は行っていないが，緩やかな斜面が更に続いており，遺跡も南東に広がっていると考えられる。

第Ⅰ調査区・第Ⅱ調査区は共に，後世において畑・果樹園として利用されており，耕作土からもかなりの遺物を採取することができた。耕作土を取り除くとすぐ下が地山であり，後世に撹乱された場所も一部見られた。



第２図　調査区配置図



第３図　第１調査区遺構位置図

第Ⅰ調査区

SI－01（第5図）

第Ⅰ調査区の北西部，西向きの緩斜面で検出された方形の竪穴住居跡であり，四辺はほぼ東西南北に合わせる。

壁は良く残っており，東西5.4 m，南北6.3 m，南側の壁高45cm，北側の壁高16cmを測り，垂直に近く立ち上がる。

住居跡の床面からは，ピット20個，周溝，炉を検出している。主柱穴となりうるものはP_1～P_4であり，その間隔は東西3.1 m，南北2.7 mで，ピット上縁の径は30～45cm，深さ62cmを測る。東壁の法面には，上縁径17～23cm，深さ30cmを測るピット（P_7，P_8）があり，その中央東壁の下には，周溝を分断する形で，上縁径70cm，深さ40cmを測る比較的規模の大きいピット（P_5）が掘られていた。床面中央やや北側には炉が設けられており，35×55cm，30×50cmの2つが重なり「8」の字形に焼け，赤変していた。炉と切り合う形で上縁径32cm，深さ15cmを測るピット（P_6）があり，埋土には炭化物を含んだ灰黒色土が入っていた。壁下床面の四方には，幅7～15cm，深さ1～7cmを測る周溝が巡るが，東，西，北壁下では半分程度しか残っていない。

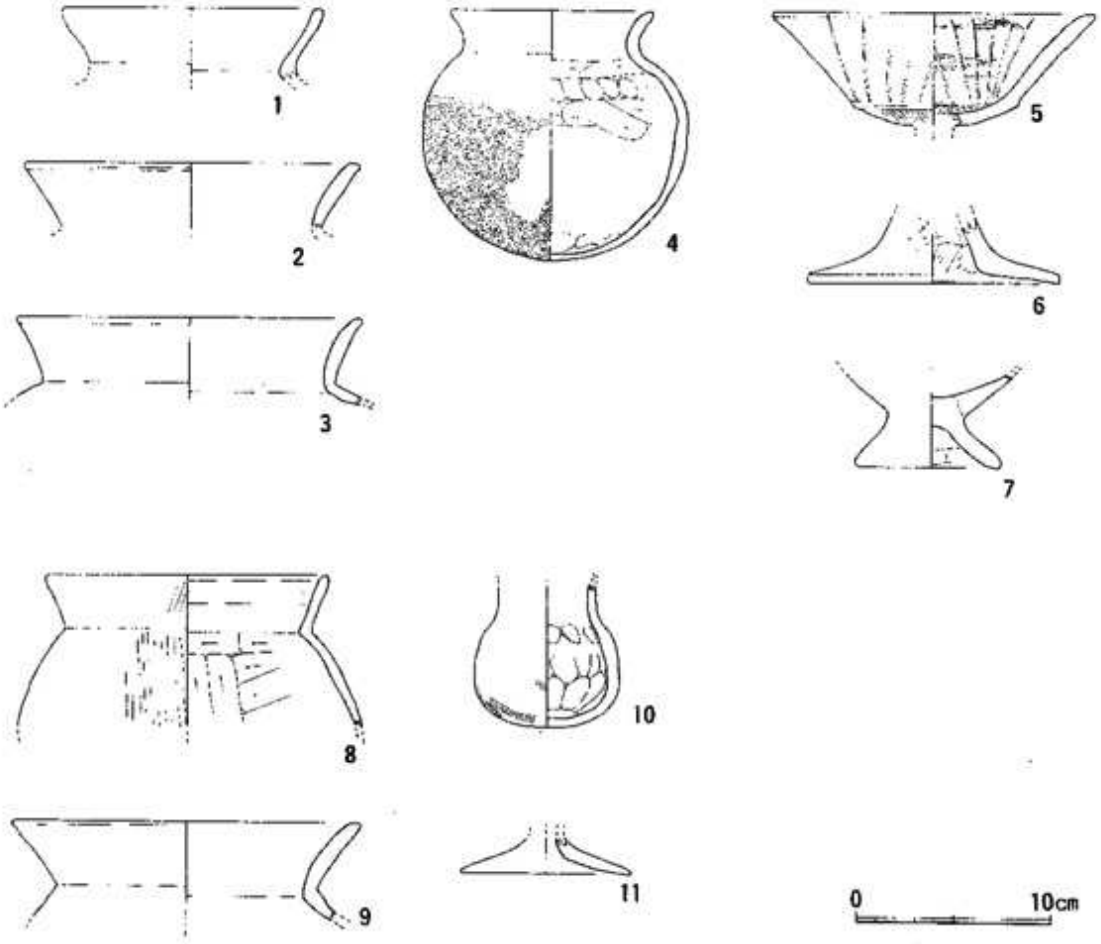
出土遺物としては，住居床面から土師器の甕，壷，高坏が出土している（第4図1～7）。また，覆土の濁赤褐色土層からは，土師器の甕，小型丸底壷，高坏の脚部が出土している（8～11）。

SI－01 出土遺物（第4図）

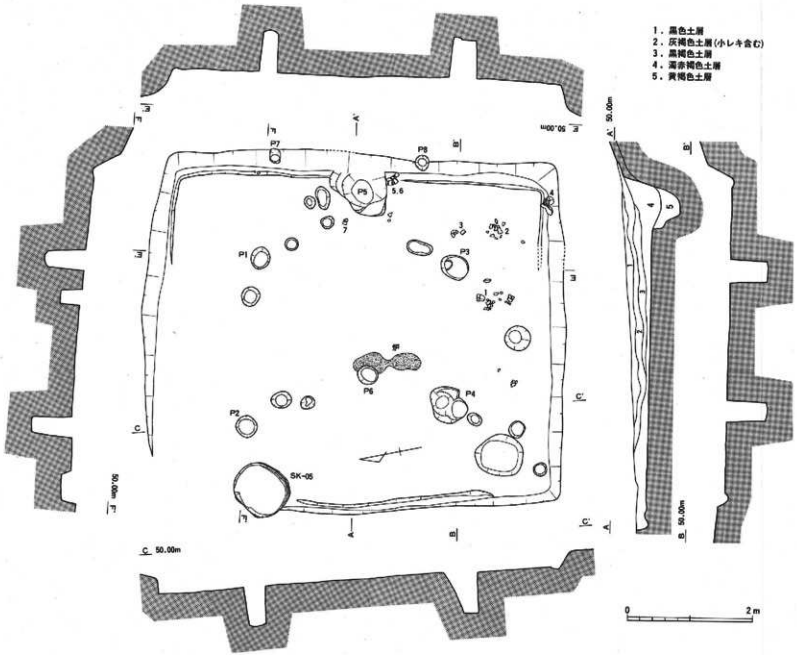
甕形土器（第4図1～4，8，9）　（1）は，やや内湾して立ち上がる口縁部をもち，外面に僅かに稜線をもつ。復元口径は13.5cmを測る。調整は，外面は風化がひどく不明であるが，内面はヨコナデを施す。（8）は，「く」の字形に屈曲する口頸部と，外傾する口縁を有する。調整は口縁内面が横ナデ，外面は風化のため詳細は不明だが，縦方向のハケメ，体部内面がヘラケズリ，外面に荒い縦方向のハケメを施す。復元口径は14.5cmを測る。（2，3，9）は，「く」の字状に屈曲する口頸部から外傾気味に立ち上がり，口縁端部に平坦面を持つものである。（2）は復元口径17.2cm，（3）は17.8cm，（9）は18.5cmを測り，調整は口縁内外面とも横ナデである。

壷形土器（4，10）　（4）は，外反する口縁を持った壷である。良く張った球形の体部と丸底を有し，法量は口径10.5cm，器高13.0cmを測る。調整は，口縁部内外面が横ナデ，底部外面がハケメ，体部外面にはススが付着しているため詳細は不明であり，内面にヘラケズリが施され，底部内面と頸部内面に指頭圧痕が残る。（10）は小型の丸底壷である。調整は，体部外面は不正方向のハケメ，内面に指頭圧痕を残す。

高坏（5～7，11）　（5）と（6）は胎土及び焼成より同一個体と考えられる。大きく外傾する口縁と良く開く脚端部を持つもので，口縁外面には段が認められる。法量は口径16.6cm，脚径12.9cmを測る。調整は，口縁内面が横ハケメ後放射状の暗紋，坏底部内面がハケメのちミガキ，口縁外面が放射状の暗紋，坏底部外面がハケメ，脚部外面がナデ，内面はヘラケズリを施す。（7）は坏部に「ハ」の字に広がる低い脚部を持つ高坏であり，脚径は7.5cmを測るが，調整は風化がひどく不明である。（11）は脚端部の破片であり，脚径8.8cmを測るが，調整は風化がひどく不明である。



第4図　SI－01出土遺物実測図


1．黒色土層
2．灰褐色土層(小レキ含む)
3．黒褐色土層
4．黒赤褐色土層
5．黄褐色土層
P1
P2
P3
P4
P5
P6
P7
P8
SK-05
50.00m
0
2m

第5図　SI－01実測図

SI－02（第6図）

第Ⅰ調査区の西側，南西向きの緩斜面で検出された1辺4.1 m，深さ最大61cmを測る方形の竪穴住居跡である。住居東側の壁は良く残っているが，西壁は斜面下となるためほとんど残っていない。残存する壁下には，幅5～10cm，深さ1～7 cmを測る周溝が巡り，北東の壁下の周溝からほぼ直角に，P_1，P_2へ向けて幅7～10cm，深さ4.6 cmを測る2本の溝が伸びる。

主柱穴は4個検出され，その間隔は1.75 mで，ピット上縁の径は23～26cm，深さ50～62cmを測る。南東の壁下中央には周溝を分断するように46×57cm，深さ54.4cmを測る比較的規模の大きい半円形のピット（P_5）がある。床面中央には炉が設けられ，27×37cm，26×63cmの範囲で焼け，赤変していた。床面の上全体に炭化物と焼土が混ざった層が1～6 cm堆積し，炭化物には柱材と思われるものがあり，焼失住居の可能性が考えられる。

出土遺物としてはP_5の埋土中から土師器の壺（第8図47），住居床面から土師器の甕口縁部（46）と滑石製の臼玉（第7図1～45）が出土した。

SI－02 出土遺物（第7，8図）

臼玉（第7図1～45）　住居南西隅の床面から連なって出土した。直径4.50～5.90mm，厚さ1.70～3.20 mm，孔径1.28～1.56 mmを測るもので，完形品のものは45個を数える。

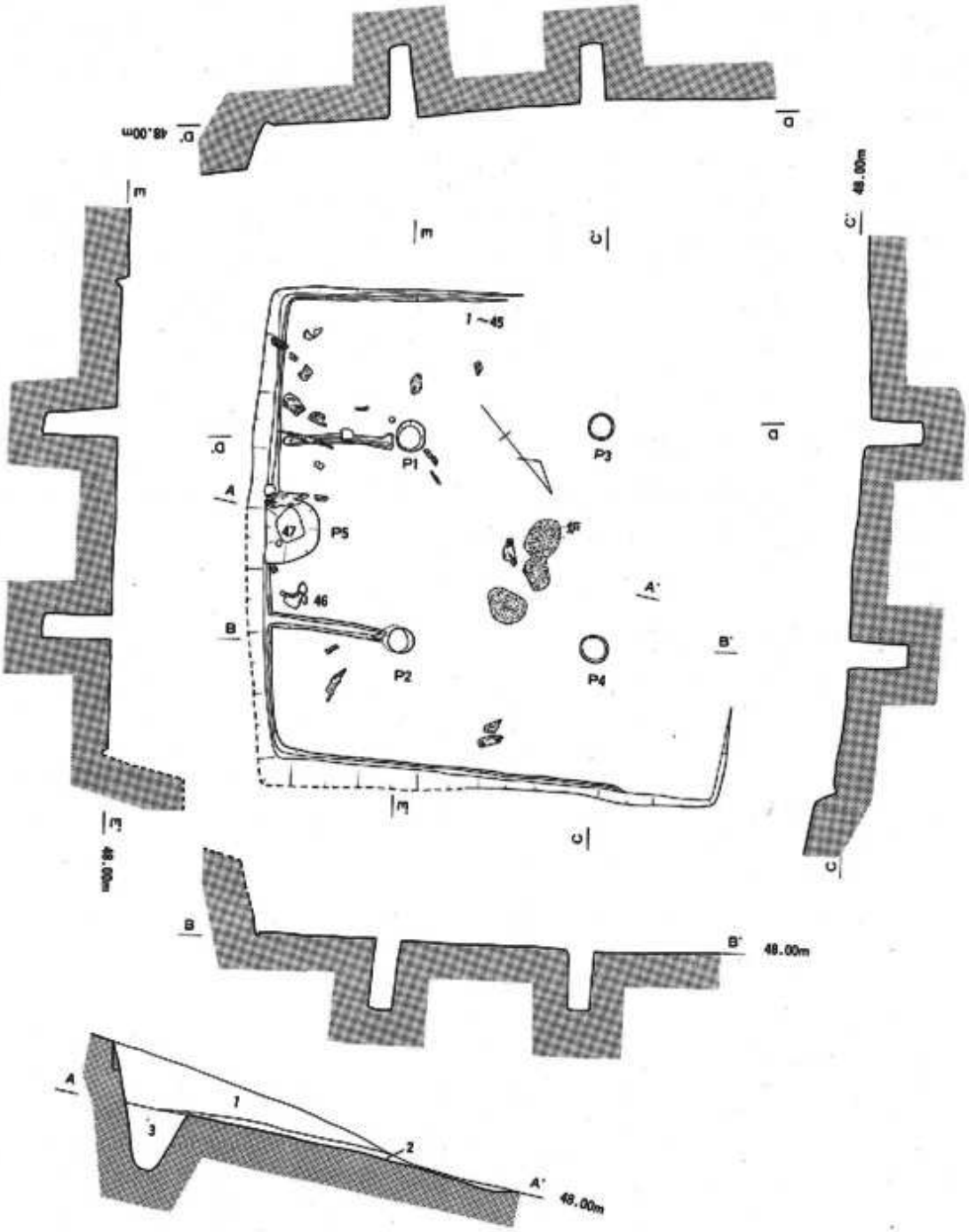
甕形土器（第8図46）　「く」の字状に屈曲する口頸部をもち，胴部が張り出すものであり，口径は復元で18.0cmを測る。調整は，風化がひどく不明であるが，体部内面にヘラケズリを観察することができる。

壺形土器（第8図47）　口縁部は失われているが，丸底の壺と考えられる。調整は外面は風化が激しいが，不整方向のハケメを観察することができ，内面にはタテハケメを施す。

SI－03（第9図）

第Ⅰ調査区の中央部，西向きの緩斜面で検出された一辺5.8 m，深さ最大57.5cmを測る方形の竪穴住居跡である。四辺をほぼ東西南北に合わせるが，西側の壁は斜面下となるため残っていない。

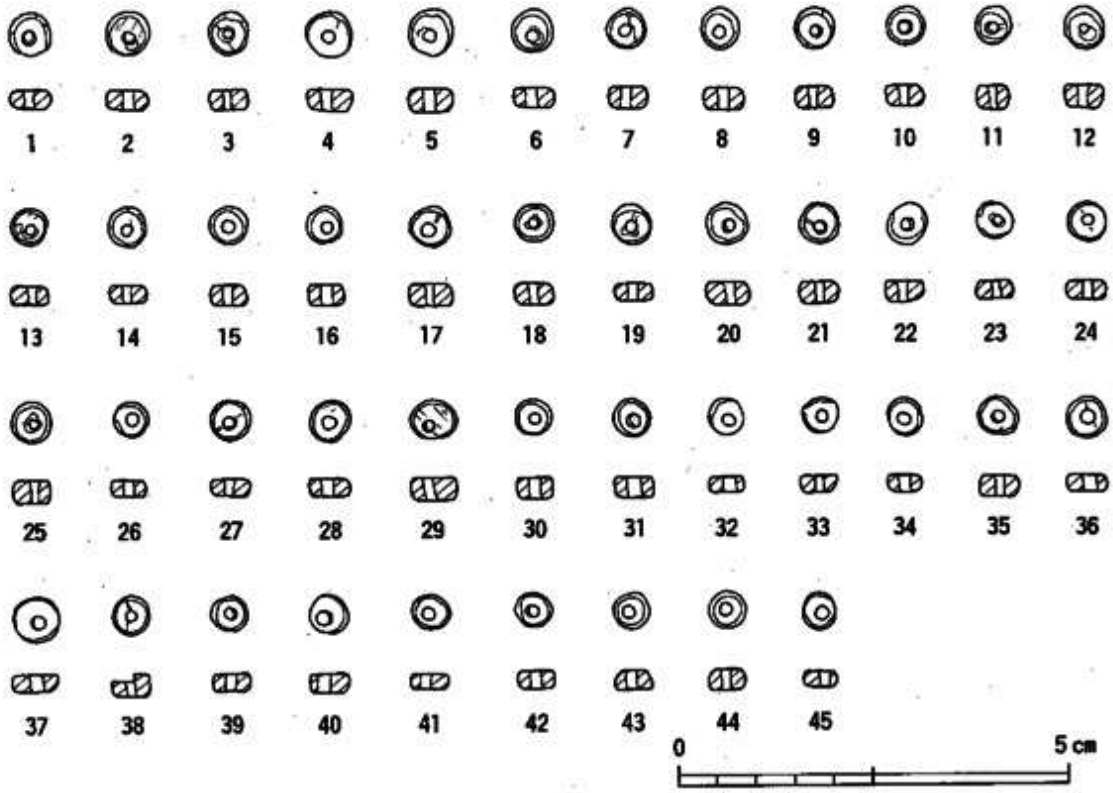
住居床面からはピット9個（P_1～P_9），周溝，炉を検出した。主柱穴となりうるものはP_1～P_4であり，その間隔は2.2～2.6 mで，ピット上縁の径は21～55cm，深さ51.6～57.2cmを測る。東壁の下中央には66×97cm，深さ40cmを測る比較的規模の大きい楕円形のピット（P_5）がある。現存する東壁下と，南，北壁下の半分に幅5～17cm，深さ1～7.7 cmを測る周溝が巡り，東壁下の周溝からP_3，P_4に向け2本の溝が伸びる。P_4に向け伸びる溝は幅18cm，深さ11.3 cmを測るが，P_3



1．淡茶褐色土層
2．淡茶褐色土層（焼土・炭化物多く含む）
3．淡褐色土層

0　2m

第6図　SI－02 実測図



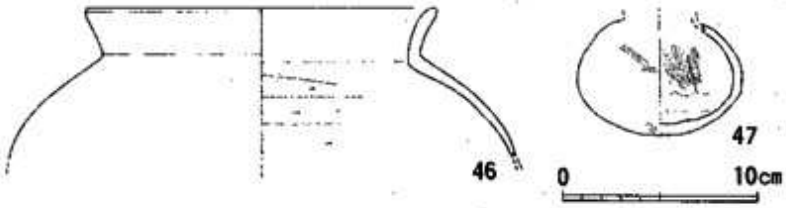
第7図　SI－02出土遺物実測図

第1表　日玉計測表（単位cm）

番号	直径	厚み	口径
1	5.45	2.38	1.56
2	5.52	2.46	1.51
3	5.13	2.70	1.42
4	5.88	2.55	1.28
5	5.34	3.10	1.41
6	5.08	2.48	1.44
7	5.12	2.64	1.46
8	4.94	2.73	1.44
9	4.95	2.72	1.52
10	4.76	2.58	1.44
11	4.80	3.20	1.56
12	5.14	3.02	1.39
13	4.76	2.54	1.44
14	5.00	3.10	1.42
15	5.01	2.76	1.44

番号	直径	厚み	口径
16	4.60	2.52	1.40
17	5.10	2.94	1.44
18	4.92	2.85	1.44
19	5.01	2.04	1.44
20	5.14	3.04	1.44
21	5.26	2.92	1.32
22	5.52	2.79	1.40
23	4.70	2.40	1.44
24	5.03	2.55	1.44
25	5.28	1.70	1.44
26	4.50	2.22	1.54
27	5.25	2.34	1.42
28	5.34	2.39	1.40
29	5.76	2.90	1.44
30	4.62	2.72	1.36

番号	直径	厚み	口径
31	4.68	2.56	1.53
32	4.68	2.02	1.44
33	4.52	2.46	1.40
34	4.68	2.26	1.40
35	4.77	2.69	1.30
36	5.25	2.37	1.40
37	5.90	2.26	1.40
38	4.85	2.94	1.44
39	4.56	2.36	1.52
40	5.04	2.58	1.44
41	4.50	2.22	1.44
42	4.70	2.27	1.48
43	4.76	2.62	1.44
44	4.76	2.76	1.44
45	4.70	2.08	1.44



第8図　SI－02 出土遺物実測図

に向け伸びる溝はごく浅いものであり，はっきり図化できるものではなかった。床面中央やや南よりには炉が設けられ，35×55cm，32×55cmの範囲が焼け，赤変していた。

出土遺物としてはP_5の埋土中から土師器の高坏（第10図5），住居床面から土師器の壺（2），甕（1，3），高坏（4）が出土した。また，住居の床面から上8～20cmの所に，5～25cmの厚さで黒褐色の土が堆積していた。この層からは，土師器の壺甕類（第11，12，13図6～34），高坏（第13，14図35～56），坏（第14図57～59），滑石製有孔円板（第15図66～69），須恵器の破片（第14図60～65）が出土した。このことから住居廃絶後，少し時期がたった段階で，祭祀の場として利用されていたと考えられる。

SI－03 床面出土遺物（第10図）

甕形土器（第10図1，3）　（1）は「く」の字状に屈曲する口頸部をもち胴部が張り出すものであり，口径16.4cmを測る。調整は，体部外面が不整方向のハケメ，口縁部がヨコナデ，体部内面にヘラケズリを施す。（3）は鈍い稜を有する複合口縁の甕である。複合口縁部は短く外傾し，端部に平坦面を有する。口径は16.8cmを測り，調整は，口縁部がヨコナデ，体部内面にヘラケズリを施す。

壺形土器（2）　口径9.2cm・器高15.7cmを測るもので，僅かに複合口縁の名残を残す口縁と，よく張った球形の体部，丸底を有する。調整は，口縁内外面がヨコナデ，肩部外面に縦方向後，横方向のハケメ，内面はヘラケズリを施し，底部と肩部内面に指頭圧痕が残る。また，内面全体に炭化物が付着している。

高坏（4，5）　（4）は高坏の坏部である。大きく外傾する口縁を持ち，坏部外面に段が認められるもので，復元口径22.6cmを測る。調整は，外面はヨコナデ後ミガキ，内面にはハケメが施されている。（5）は口縁・脚部が良く開き，坏部外面に段を持つものである。法量は，口径20.0cm，底径10.0cm，器高12.9cmを測る。調整は，口縁部外面がヨコナデ，内面は放射状の暗紋，坏底部外面はミガキ，脚部外面はヘラミガキ，内面にはヘラケズリを施す。

黒褐色土層出土遺物（第11～15図）

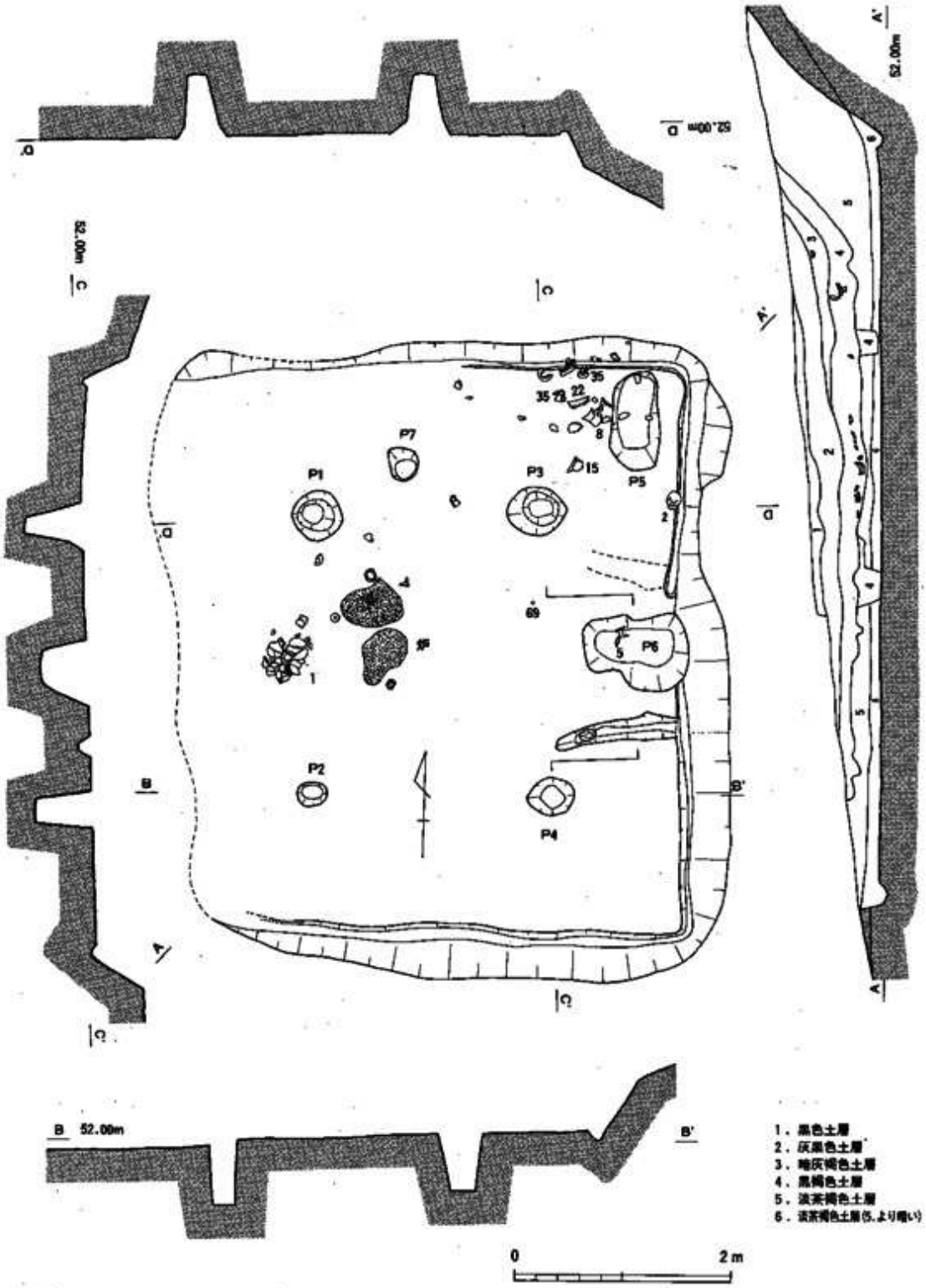
壺・甕形土器（第11図）　6～12は退化した複合口縁を持つ甕である。複合口縁部は短く外傾し，突出部はだれて下ぶくらみするものも見られる。（第12図）13，17，20，22～29は「く」の字状に屈曲する口頸部を持ち，胴部が張り出している。（第12図）19，21は口縁部が強く反り，器肉が厚いものである。（第13図）30，31は口縁部が肉厚で，端部内面に段を持つものであり，32も口縁端部が磨滅しているものの，同形態の甕と思われる。（第12図）14，15，18はよく張った肩部と直立気味に立ち上がる単純口縁を持つ壺である。（第12図）16は口頸部はゆるく外反し，胴部があまり張り出さない甕である。（第13図）33，34は口頸部がゆるく外反して伸び，端部近くで更に強く反るものである。

高坏（第13，14図）　35は坏底部と口縁部との境が屈曲し，外面に稜を持つものである。（第13図）36，37は坏底部が椀形を呈し，外面に段を持たないものである。（第13，14図）45，48はいずれも口縁端部を欠いているが，坏底部から丸みを持って立ち上がり，外面に段を持たないものである。（第14図）46，47は大きく外傾する口縁部をもつものであるが，段の有無は不明である。（第14図）51は丸みを持った坏底部と「ハ」の字に開く低い脚を持つ。作りはやや小さく雑な仕上げとなっている。（第13図）38～44は坏部の破片である。いずれも外傾しながら口縁に至るもので，坏部外面に段を持つもの（41～44）と不明なもの（38～40）がある。（第14図）49，50，52～56は脚部の破片である。いずれもやや開き気味の脚筒部から，脚端部にかけて更に大きく開くものである。

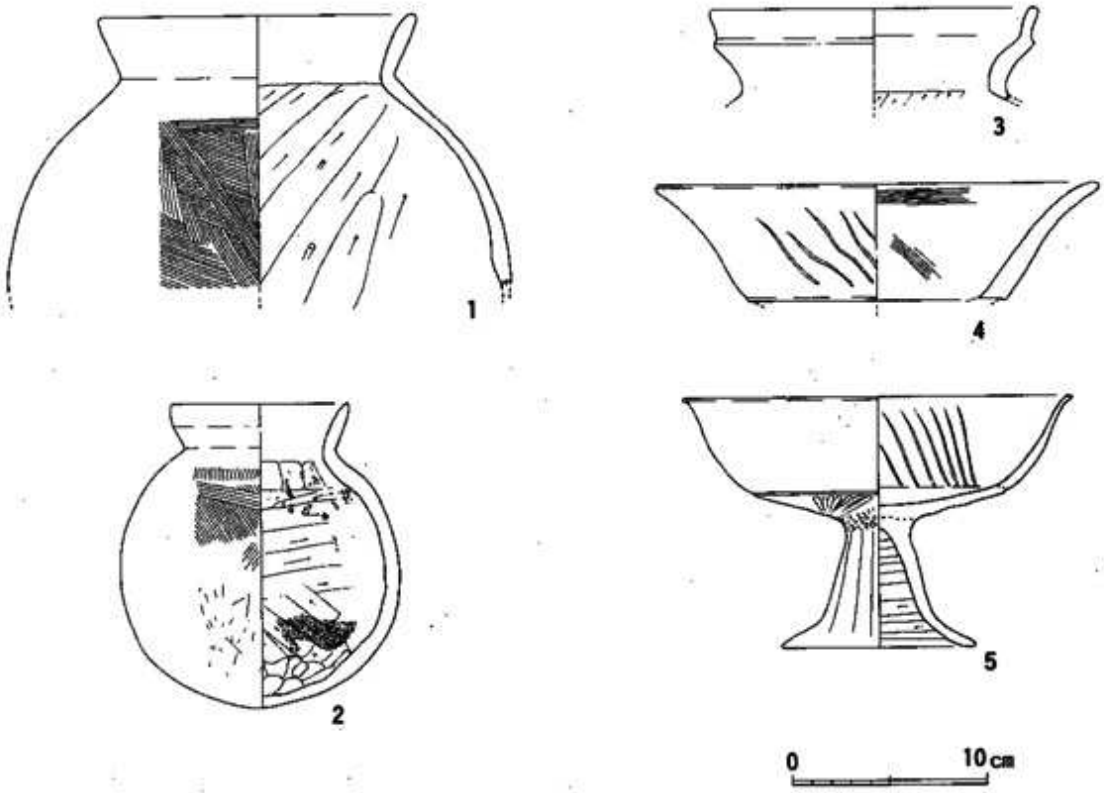
坏（第14図）　57，58は半球形の坏であるが，調整は風化がひどく不明である。（第14図）59は上げ底の底部から外傾気味に立ち上がり，端部が内側に返り，段を持つものである。

須恵器（第14図）　60は鉢状口縁の破片である。口縁端部は面を持ち鋭く，古式の須恵器と思われる。（第14図）61～65は壺体部の破片である。外面がタタキ，内面が押当具痕が僅かに残り，ナデ調整で消去しているのがわかる。

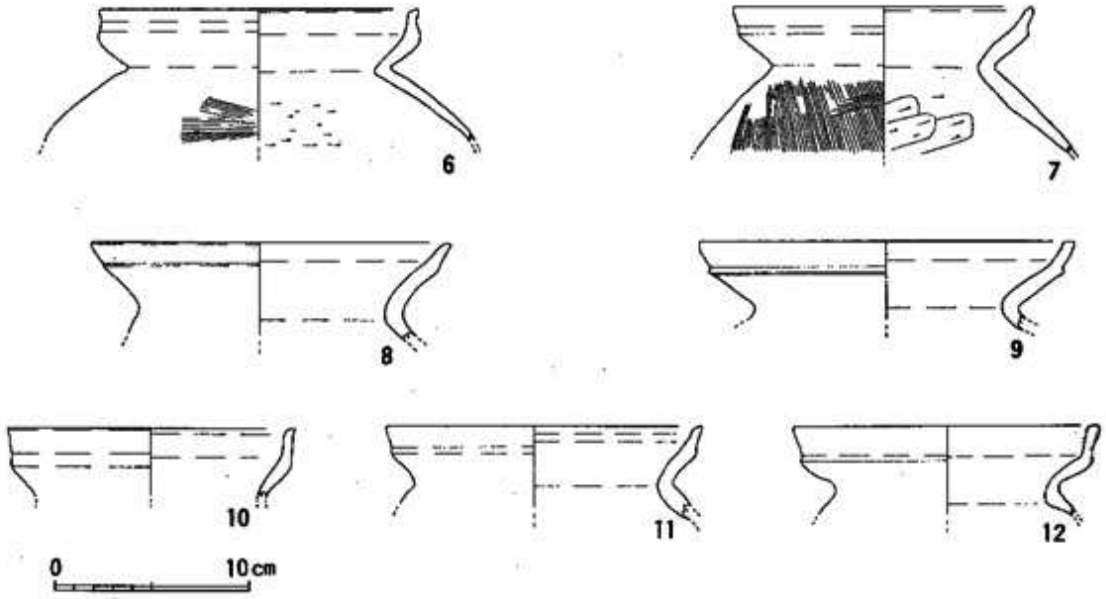
有孔円板（第15図66～69）　（66）は完形ではないが，おおよそ隅丸方形を呈し，中央両脇に孔を穿っている。法量は，幅2.51×3.21㎝，厚さ0.38㎝、孔径0.23，0.36㎝を測る。表面，側面共に平らではないが，滑らかに仕上げられている。（67）は完形品で，平面は7角形を呈し，中央両脇に孔を穿っている。法量は最大幅2.51㎝，厚さ0.27㎝，孔径0.09㎝を測る。表面，側面共に平らに調整され，擦痕があり，表面の一部には自然面の残る部分が見られる。（68）は完形品で，平面はほぼ円形を呈し，中央両脇に孔を穿っている。法量は，最大径3.50㎝，厚さ0.36㎝，孔径0.13，0.15㎝を測る。表面は平らで，擦痕が残り，側面にも擦痕が見られる。（69）は完形ではないがおおよそ5角形を呈し，中央両脇に孔を穿っている。法量は最大幅2.65㎝，厚さ0.25㎝，孔径0.08㎝を測る。表面は平らで，擦痕があり，一部自然面が残る部分もある。また，側面にも擦痕が見られる。


P1
P2
P3
P4
P5
P6
P7
A
A'
B
B'
C
C'
D
D'
52.00m
1. 黒色土層
2. 灰黒色土層
3. 暗灰褐色土層
4. 黒褐色土層
5. 淡茶褐色土層
6. 淡茶褐色土層(5.より暗い)
0
2m

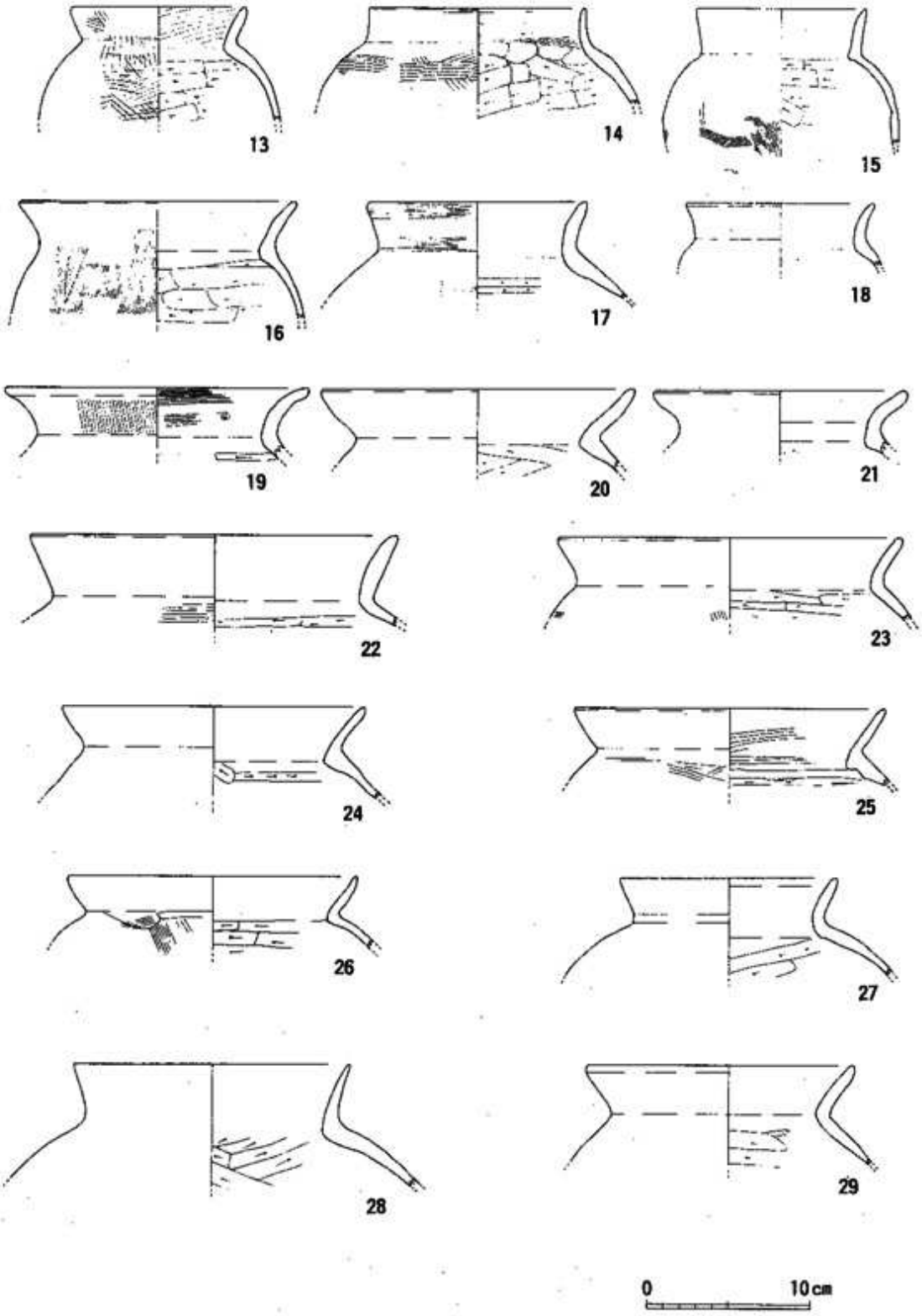
第9図　SI－03実測図



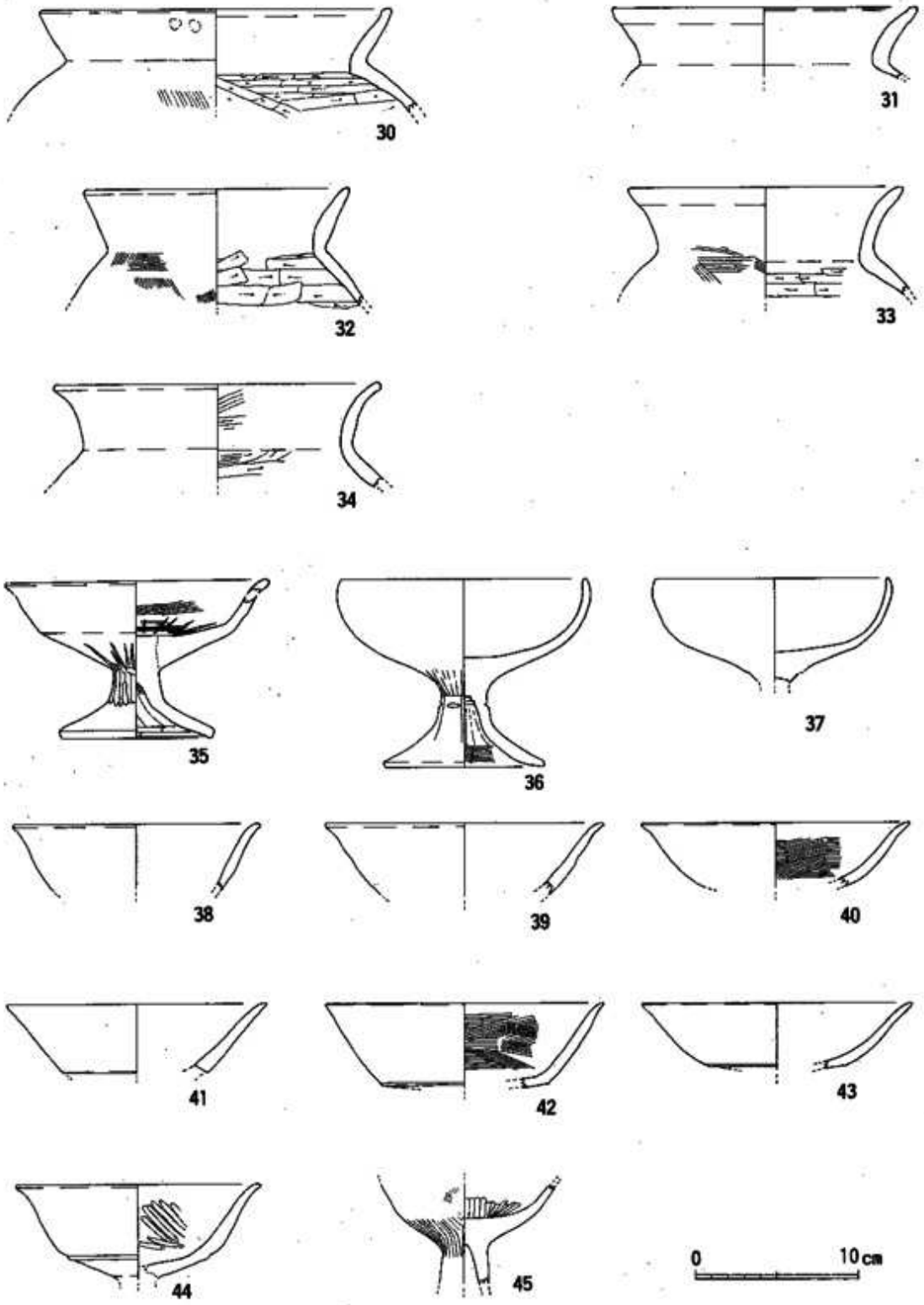
第10図　SI－03 床面出土遺物実測図



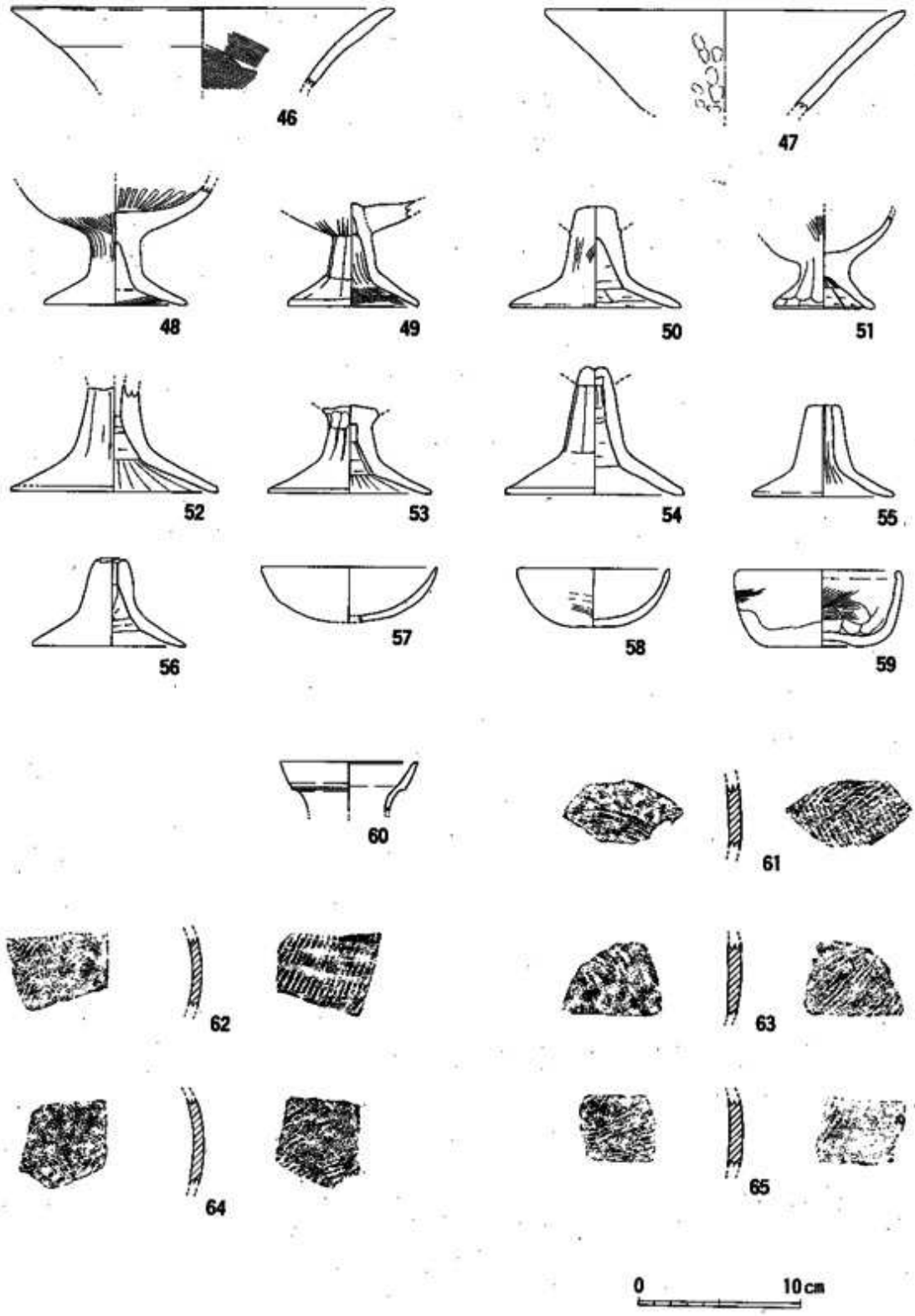
第11図　SI－03 黒褐色土層出土遺物実測図



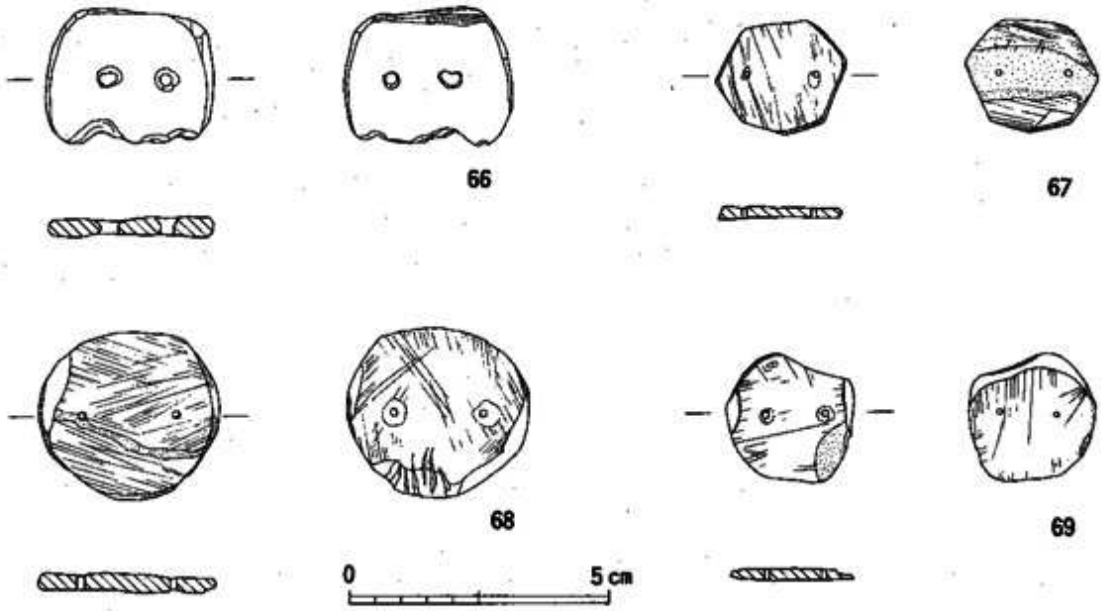
第12図　SI－03 黒褐色土層出土遺物実測図



第13図　SI－03 黒褐色土層出土遺物実測図



第14図　SI－03 黒褐色土層出土遺物実測図



第15図　ＳＩ－03 黒褐色土層出土遺物実測図

ＳＩ－04（第16図）

ＳＩ－01 の南東側，西向きの緩斜面で検出された竪穴住居跡であり，平面形は方形を呈すると思われる。

壁は東側と，南，北側の一部が残っていた。規模は一辺 6.4 m，壁高最大14.9cmを測るが，西側は斜面下となるため床面，壁ともに残っていなかった。現存する北壁と，南東コーナーの壁下には，幅12～15cm，深さ 1.9 cmを測る周溝が検出された。

住居床面からピットが９個検出されたが，どのピットをもって上屋を構築したかは不明である。また，床面南側には炉が設けられ，43×55cmの範囲が焼け，赤変していた。

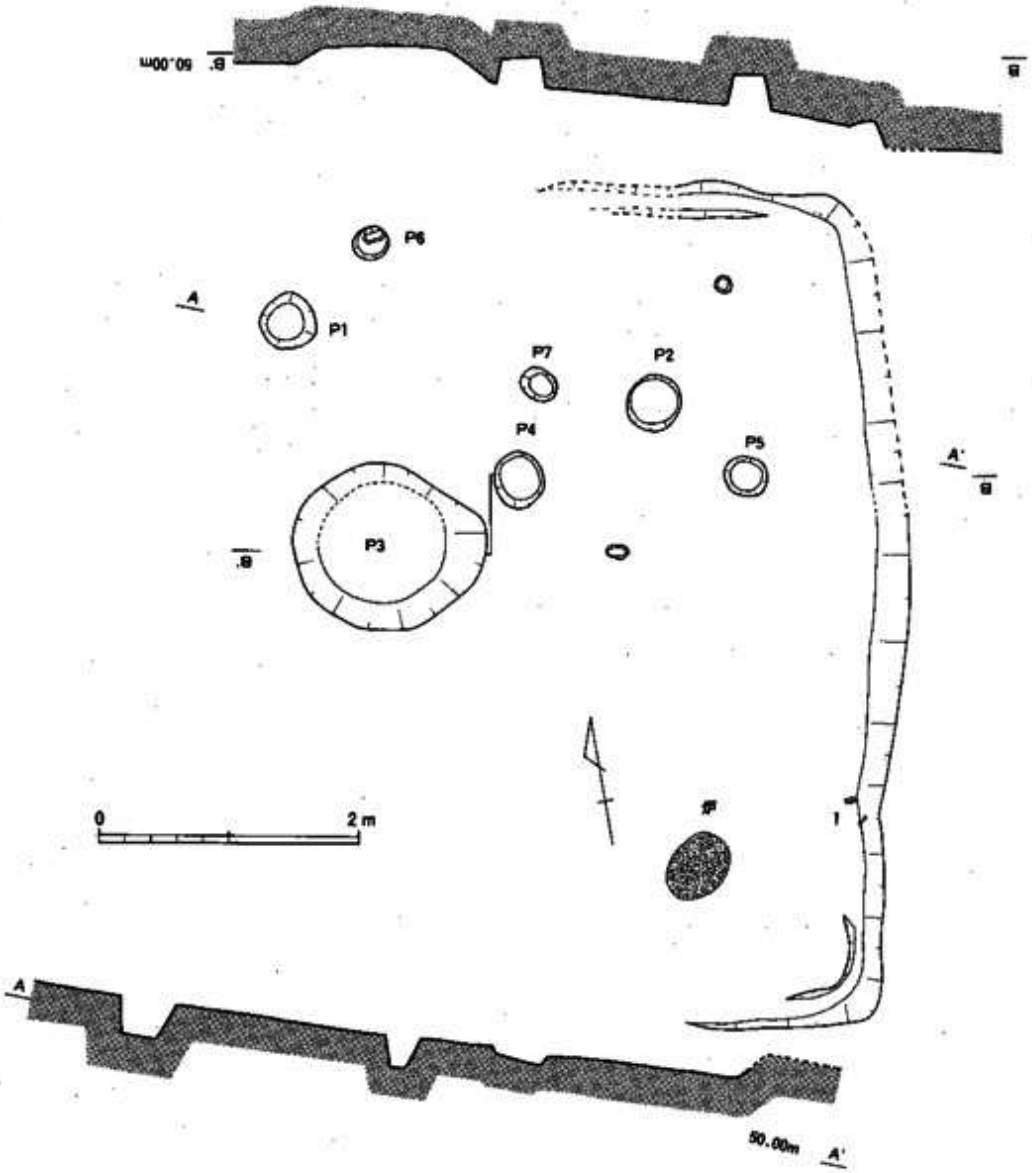
出土遺物としては，東壁下の床面から土師器の甕の口縁部（第17図１）が出土している。

ＳＩ－04 出土遺物（第17図）

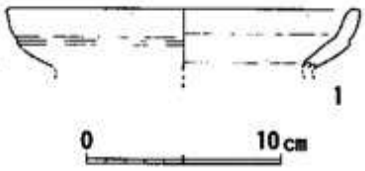
甕形土器（１）　外傾する口縁の外側に鈍い稜をもつ複合口縁の名残をとどめる甕であり，口径は復元で18.2 cmを測る。調整は内外面共に横ナデである。

ＳＩ－05（第18図）

第Ｉ調査区の西側，南西向きの緩斜面で検出された一辺3.45 mを測る方形の竪穴住居跡である。壁は北東側が良く残っており，壁高最大20.7 cmを測るが，住居北西は後世の掘削により床面，壁ともに消滅していた。



第16図　S I－04 実測図



第17図　S I－04
出土遺物実測図

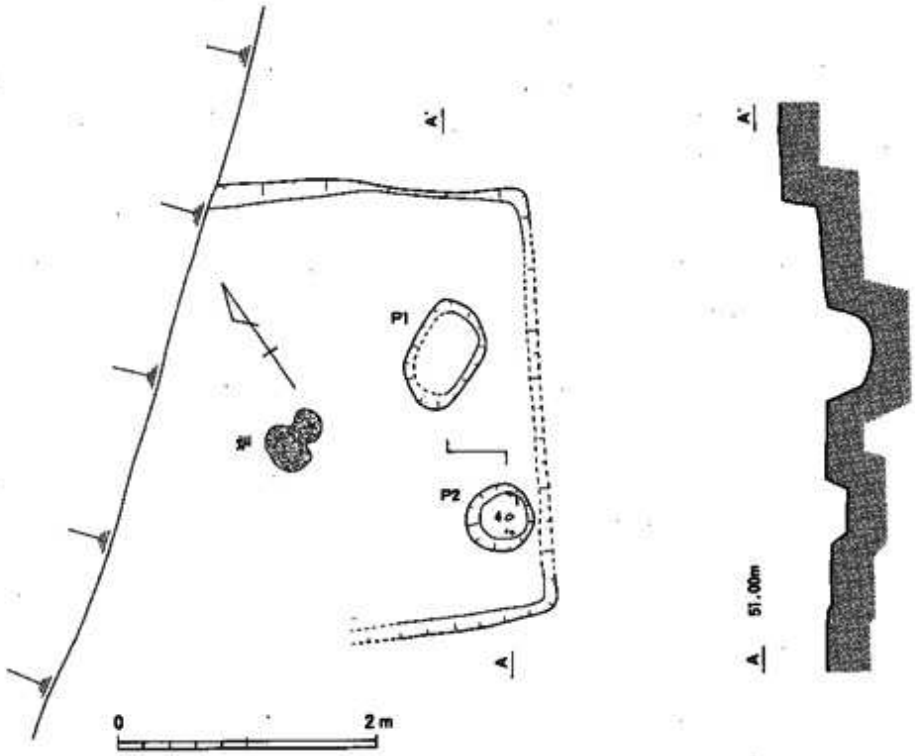
ピットは2個検出され，その間隔は92cmを測る。規模は（P_1）が上縁径55×80cm，深さ41.8cm，（P_2）が上縁径53cm，深さ16.7cmを測る。床面ほぼ中央には炉が設けられており，40×50cmの範囲で焼け，赤変していた。

出土遺物としては，床面やや上より土師器の高坏（第19図3），P_2の埋土中より土師器の甕口縁部（1），高坏（2，4）が出土している。

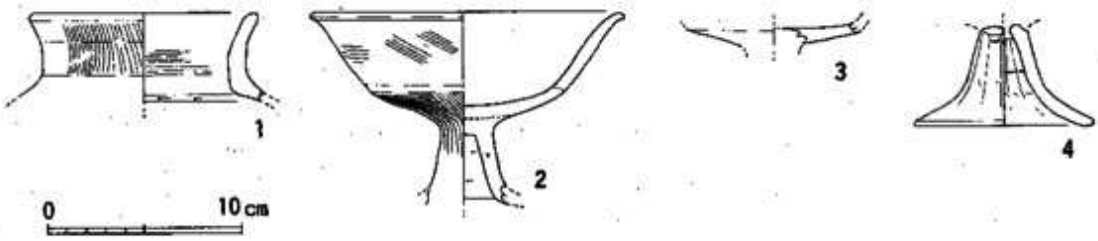
ＳＩ－05 出土遺物（第19図）

甕形土器（１）　器肉が厚く，強く反る口縁を持つもので，復元口径11.8㎝を測る。調整は口縁内面が横方向のハケメ，外面が縦方向のハケメ，体部内面に横方向のヘラケズリを施す。

高坏（２～４）　（２）は坏部が外傾し口縁に至るもので，坏部外面に段を有する。調整は，内面は風化がひどく不明であるが，口縁外面と脚部から坏底部外面にかけてハケメを施し，口径は16.0㎝を測る。（３）は，坏底部の破片であるが，風化がひどく調整は不明である。（４）はやや開き気味の脚筒部から脚端部にかけ更に大きく開くもので，底径９.２㎝を測る。調整は外面がヘラミガキ後ナデであり，脚内部にシボリ痕を残す。



第18図　ＳＩ－05 実測図



第19図　ＳＩ－05 出土遺物実測図

SB－01（第20図）

ＳＩ－03の東側，西向きの緩斜面で検出された長辺4.1ｍ，短辺2.2ｍを測る，２×１間の掘立柱建物跡である。

斜面上となる東側を切り出し，平坦面を設けている。切り出された壁部分の高さは31.9～35cmを測り，その下には幅20cm，深さ２～5.2cmを測る溝が存在するが，北側部分は後世の掘削によって消滅している。

平坦面からは12個のピットが検出された。主柱穴となりうるものは，P_1～P_6であり，ピット上縁の径は37～45cm，深さ９～36.8cmを測る。

出土遺物としては，平坦面から土師器の甕口縁部（第21図１），高坏の坏部（２）が出土した。

SB－01 出土遺物（第21図）

甕形土器（１）　外傾する口縁の外側に鈍い稜を残した複合口縁の名残をとどめる甕であり，復元口径19.8cmを測る。調整は口縁内外面に横ナデを施す。

高坏（２）　坏部は外傾し口縁に至るもので，坏部外面に段を有する。調整は，口縁部外面が横ナデ，坏底部外面がハケメを施すが，坏部内面は風化がひどく不明である。復元口径は13.5cmを測る。

SB－02（第22図）

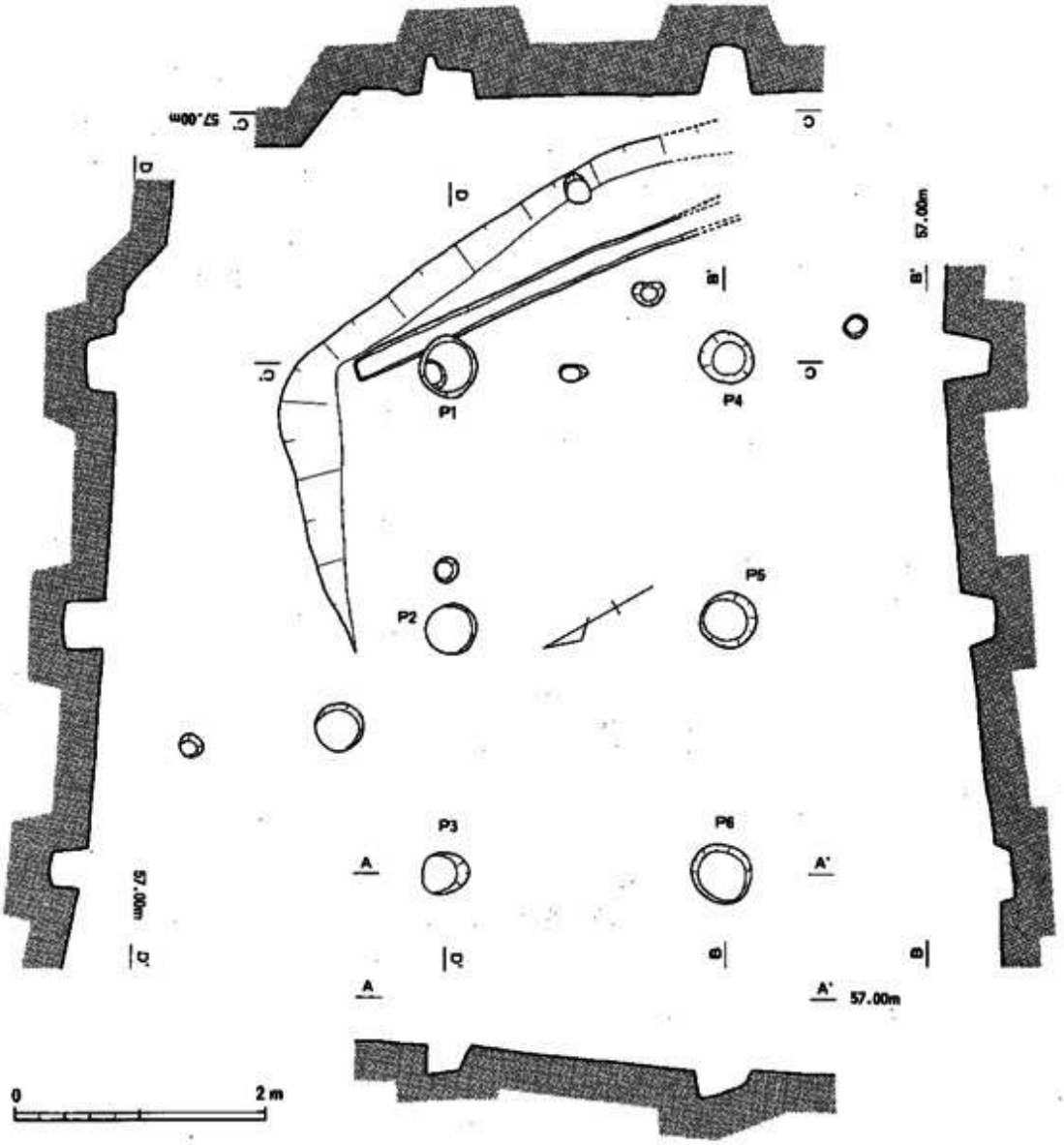
第Ｉ調査区の北側，西向きの緩斜面で検出された掘立柱建物跡であるが，西側は斜面下となるためピットは検出されなかった。

斜面上となる東側を切り出し，平坦面を設けている。切り出された壁部分の高さは29.7cmを測り，平坦面からは７個のピットが検出された。主柱穴となりうるものはP_1～P_4であり，ピット上縁の径は25～43cm，深さ13.9～45.8cmを測る。

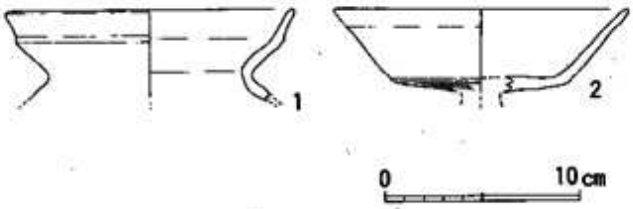
出土遺物としては，平坦面より，土師器の壺甕類（第22図１，２），甑（３），高坏の脚部（４）が出土している。

SB－02 出土遺物（第23図）

壺・甕形土器（１，２）　（１）は外傾する口縁と，端部外面に鈍い稜を持つもので，復元口径13.4cmを測る。調整は，口縁部外面が縦方向のハケメのち横ナデ，内面が横ナデ，体部外面が不整方向のハケメ，内面がヘラケズリである。（２）は緩く外反する口縁となで肩を持った壺であり，復元口径13.5cmを測る。調整は，口縁内外面が横ナデ，体部外面が縦方向のハケメ，内面にヘラケズリを施す。



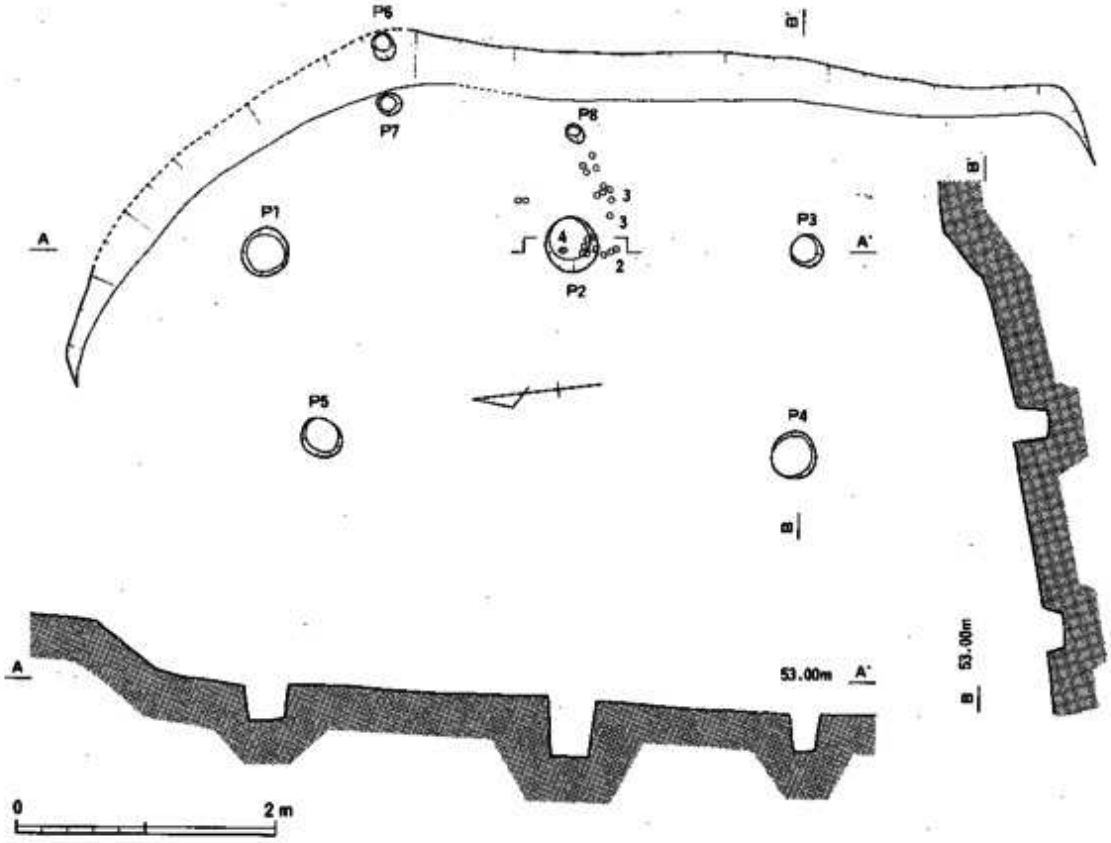
第20図　SB－01 実測図



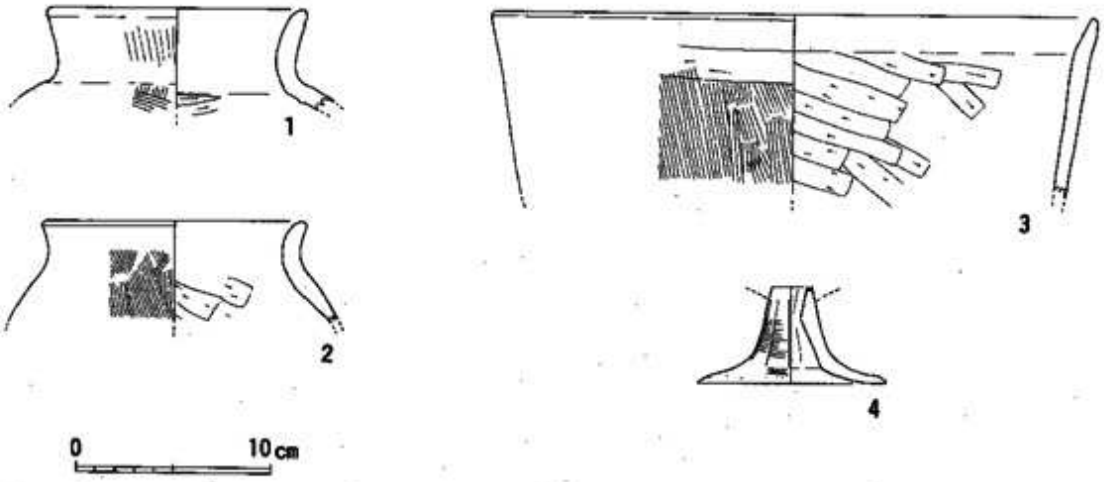
第21図　SB－01 出土遺物実測図

甕形土器（3）　口縁部に向かって緩やかに開き，口縁端部に平坦面を持つもので，復元口径31.2cmを測る。調整は口縁部内外面が横ナデ，体部外面が縦方向のハケメ，内面にヘラケズリを施す。

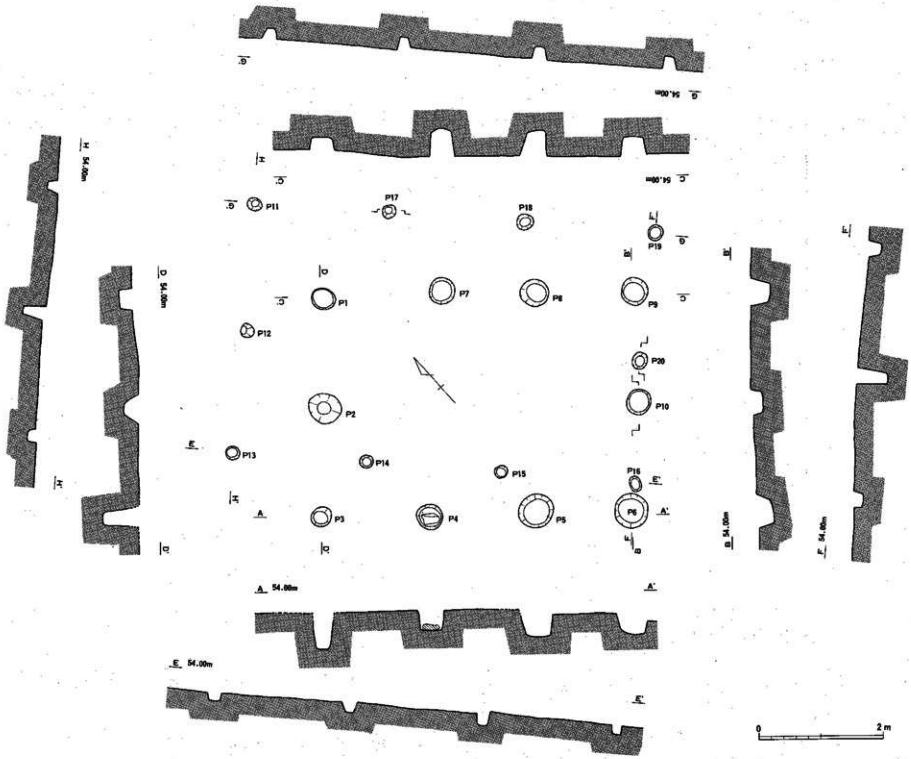
高坏（4）　やや開き気味の脚筒部から脚端部にかけて更に大きく開くもので，底径9.8cmを測る。調整は，風化のためはっきりしないが，外面にハケメ状の痕を観察することができ，筒部内面にヘラケズリを施す。



第22図　SB－02 実測図



第23図　SB－02 出土遺物実測図



第24図　SB－03，SB－04 実測図

SB－03（第24図）

第Ⅰ調査区の南東部，南西向きの緩斜面で検出された長辺５ｍ，短辺3.5ｍを測る３×２間の掘立柱建物跡である。

ＳＢ－03に伴うピットはP_1～P_{10}であり，ピット上縁の径32～55cm，深さ12～47.5cmを測る。

出土遺物としては，P_4から礎板の役割を果たすと思われる扁平な川原石を検出した。

SB－04（第24図）

第Ⅰ調査区の南東部，南西向きの緩斜面で検出された長辺6.4ｍ，短辺４ｍを測る３×２間の掘立柱建物跡である。

ＳＢ－04に伴うピットはP_{11}～P_{20}であり，ピット上縁の径20～23cm，深さ11～48.3cmを測る。なお，ＳＢ－03とＳＢ－04は主軸方向が同じで，床面にあたる大部分が重なりあっているが，両者の新旧関係は不明である。

SB－05（第25図）

ＳＢ－04の北西部，南西向きの緩斜面で検出された２×２間の掘立柱建物跡である。ピットは９個（P_1～P_9）検出され，ピット上縁の径27～40cm，深さ10.5～70cmを測る。前述のＳＢ－03，04と方向性を同じくする総柱の建物跡であり，倉庫として利用されていたものと思われる。

SB－06（第26図）

第Ⅰ調査区の南東部，南西向きの緩斜面で検出された長辺4.13ｍ，短辺2.67ｍを測る３×２間の掘立柱建物跡であり，緩斜面の北側と東側を削り出し平坦面を設けている。削りだされた壁部分の高さは10～38cmを測るが，南側の平坦面は後世の掘削により消滅している。北壁下には幅15～25cm，深さ4.8～9.2cmを測る溝が巡り，これと並行するように，幅30cm，深さ9.7～19.5cmを測る少し短い溝が存在する。ピットの検出状況などから，この平坦面では数回建て替えが行われていたと考えられる。

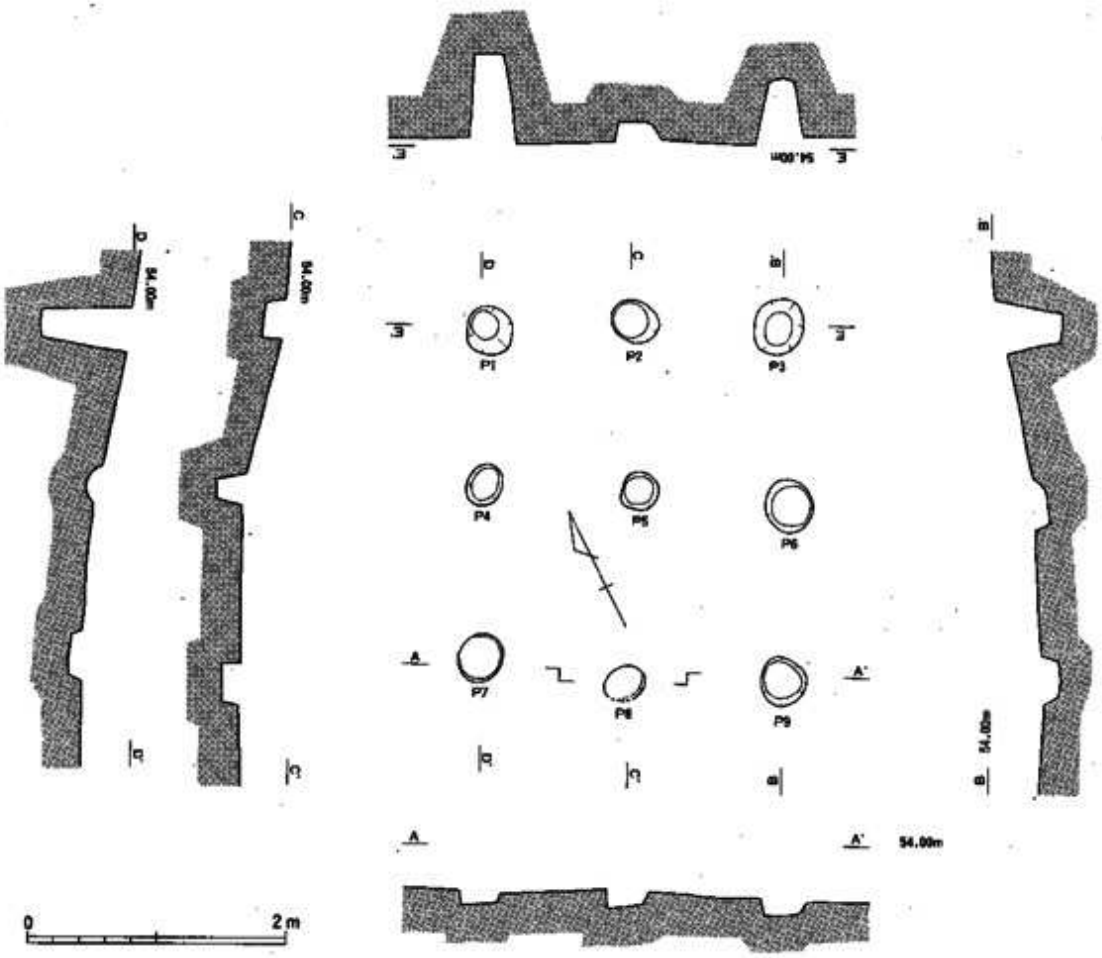
出土遺物としては土師器の壺甕類（第27図１～６），高坏（７，８），土製支脚（９），石匙（第28図10，11），重さ48.1ｇを測る鉄塊（12）が平坦面より出土した。なお，この鉄塊は鉄分が多く，磁石に付着するものである。

SB－06 出土遺物（第27，28図）

壺・甕類（第27図1～6）　（1～3）は「く」の字に屈曲する口縁とよく張った体部を持つ甕であり，（1，2）は口縁端部に平坦面を有する。調整は，口縁内外面が横ナデ，体部外面がハケメ，内面にヘラケズリを施す。復元口径は（1）が18.0cm，（2）が21.6cm，（3）が15.5cmを測る。

（4，5）は外傾する口縁の外側に稜を残した複合口縁の名残を残す甕である。調整は口縁部内外面が横ナデである。復元口径は（4）が14.2cm，（5）が12.8cmを測る。（6）は緩く外反する単純な口縁を持った壺であり，復元口径15.6cmを測る。調整は風化がひどいが，体部内面にヘラケズリを観察することができる。

高坏（7，8）　（7）は坏底部から筒部にかけての破片である。調整は坏底部内面がミガキ，坏部と脚部の接合部にハケメを施す。（8）はやや開き気味の脚筒部から脚端部にかけて更に大き

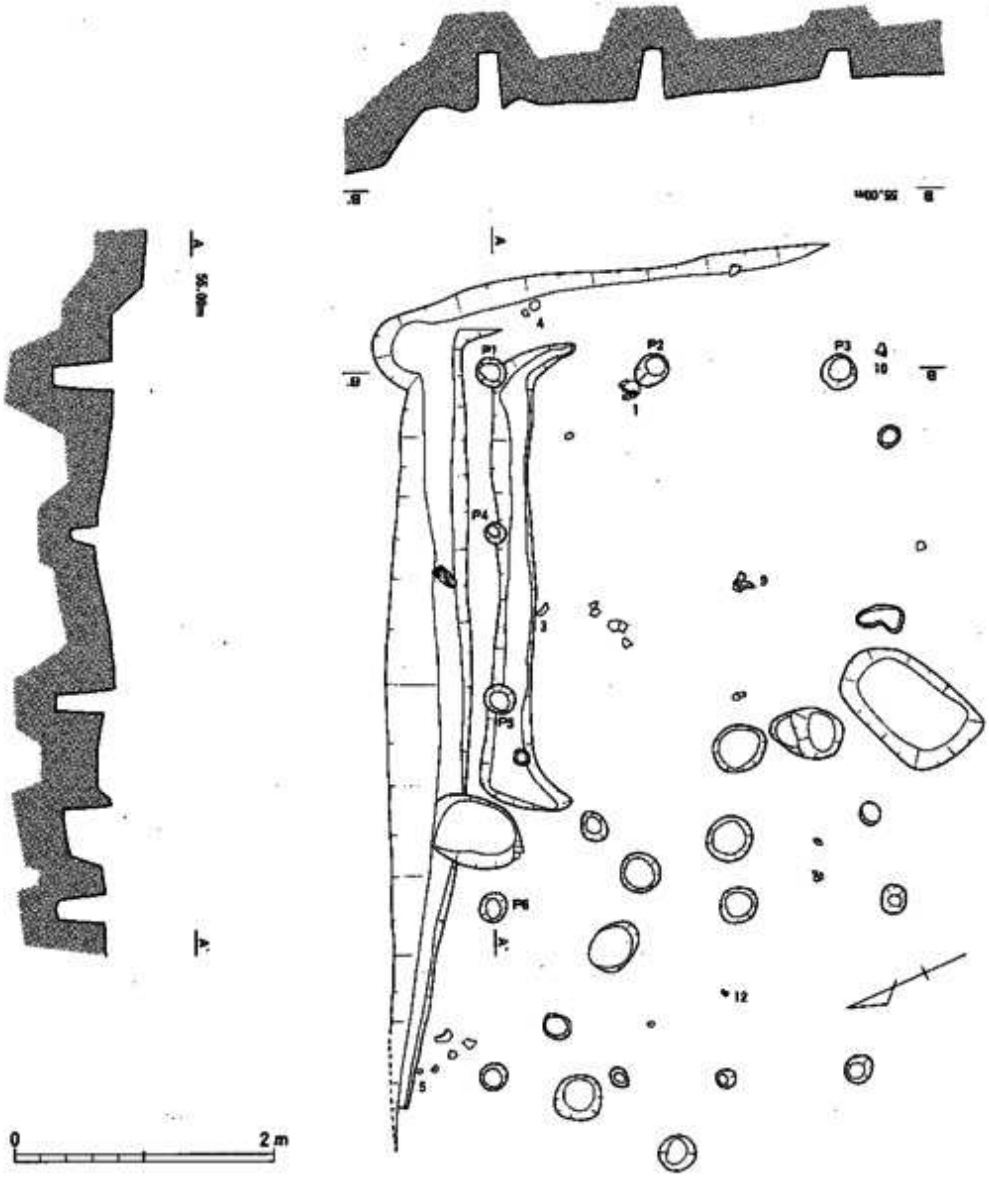


第25図　SB－05 実測図

く開くもので，底径 9.4 cmを測る。調整は外面がヘラミガキ後ナデ，筒部内面にヘラケズリを施す。

土製支脚（9）　3方向に突起を付けるものであるが，脚部を欠く。調整はナデの痕跡が著しい。

石匙（第28図10，11）　つまみ状の突起を一端に付け，もう一方に刃部を付ける。つまみ部は両面二次調整を行うが，刃部は片面のみ細かな二次調整を行う。石材は（10）が黒曜石製，（11）が安山岩製であり，重量は（10）が33.3 g，（11）が21.0 gを測る。

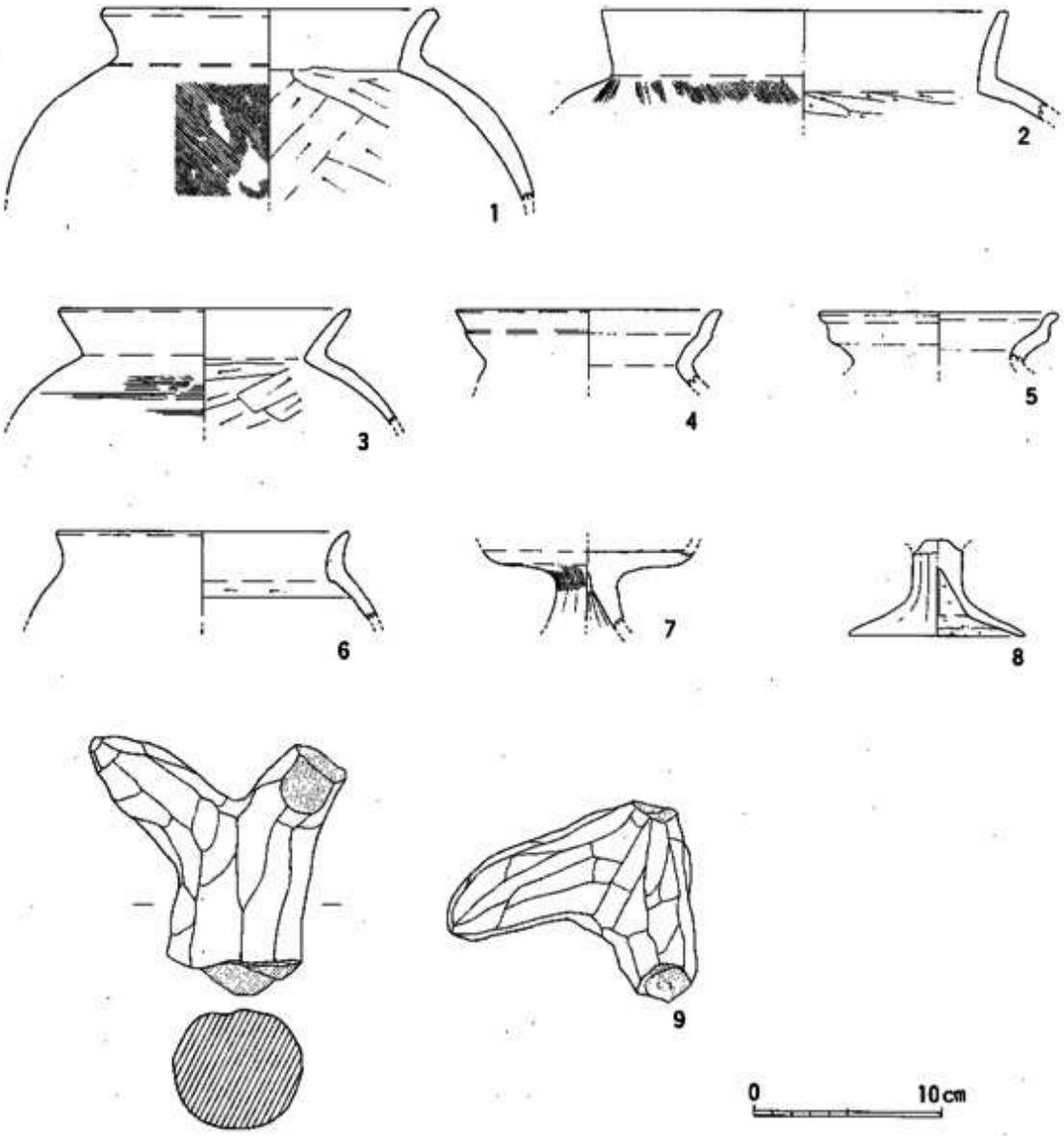


第26図　SB－06 実測図

加工段（第29図）

第Ⅰ調査区の東側，標高 56.25～57.50ｍを測る最高所に位置する場所を南東から北西に横断する形の加工段であり，比高差15～97cmを測る。加工段の斜面下には平坦面を作り出しており，ピットを多数検出した。しかし，どのピットをもって上家を構築したかは不明である。

加工段の斜面からは平面「コ」の字型の遺構２基（ＳＸ－01・ＳＸ－02）を検出した。規模は下部平坦面で，ＳＸ－01 が幅3.65ｍ，奥行き 0.5 ｍ，高さ最大0.83ｍを測り，ＳＸ－02 は幅 5.3 ｍ，奥行き 1.1 ｍ，高さ最大0.97ｍを測る。



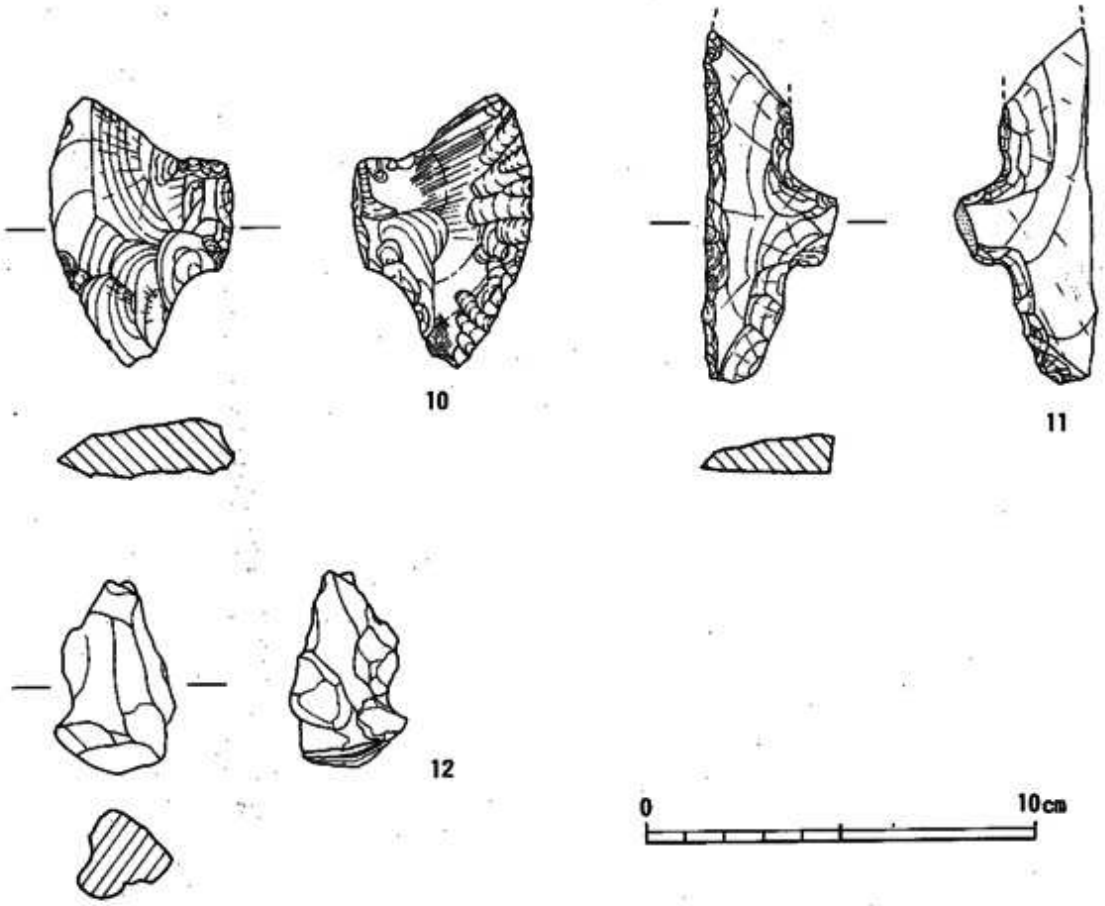
第27図　SB－06 出土遺物実測図

SX－01は土器溜りを呈しており，竈（第30図3，4），土師器の甕（1，2），甑（5），須恵器の坏（6～9），無頸壺（10）が出土した。また加工段の斜面及び平坦面からは，土師器の椀（第31図13），須恵器の坏蓋（14），長頸壺（16，19，20），壺底部（21），高台付坏（17，18），坏口縁部（15）が出土した。

SX－01出土遺物（第30図1～12）

甕形土器（1，2）　1，2は外反する単純な口縁と，なで肩を持つ甕である。調整は口縁部内外面が横ナデ，体部内面がヘラケズリ，体部外面にハケメを施す。口径は復元で（1）が19.6cm，（2）が34.2cmを測る。

竈（3，4）　3と4は焼成及び胎土から同一個体と考えられる。（3）は炊き口の上部にあたり，調整はナデの痕跡が著しい。（4）は炊き口の側面にあたる。調整は，表面がナデ及び一部にハケメを施し，指頭圧痕が残る。内面にはヘラケズリを施す。



第28図　SB－06出土遺物実測図

甑形土器（5）　底部より外傾して伸びる体部を持ち，底端部近くに直径8㎜の円孔を穿つ。調整は，外面がハケメ，内面にヘラケズリを施す。

須恵器（6～12）　6，9は体部が内湾し，口縁部をくびれさせ，内面に稜を持った，底部の平らな坏である。切離しは回転糸切りによって行われ未調整のままである。法量は（6）が口径12.0㎝，器高4.5㎝を測り，（9）は口径14.0㎝，器高4.55㎝を測る。7，8，12は体部が内湾気味に伸び，口縁端部外面をくびれさせるが，内面に明瞭な稜を持たないものである。切離しは回転糸切りによって行われ未調整のままである。法量は，（7）が口径13.0㎝，器高3.75㎝，（8）が口径12.9㎝，器高3.8㎝，（12）が口径13.4㎝，器高3.7㎝を測る。（11）は坏底部であり，底部外面に回転糸切りを行うが，切離し後の調整は行われていない。

（10）は端部に平坦面をなすくびれた口縁と，よく張り出した胴部，上げ底気味の底部をもつ壺である。法量は口径8.3㎝，底径6.7㎝，器高9.4㎝を測る。調整は回転ナデが施され，切離しは回転糸切りによって行われ，切離し後の調整は行われていない。

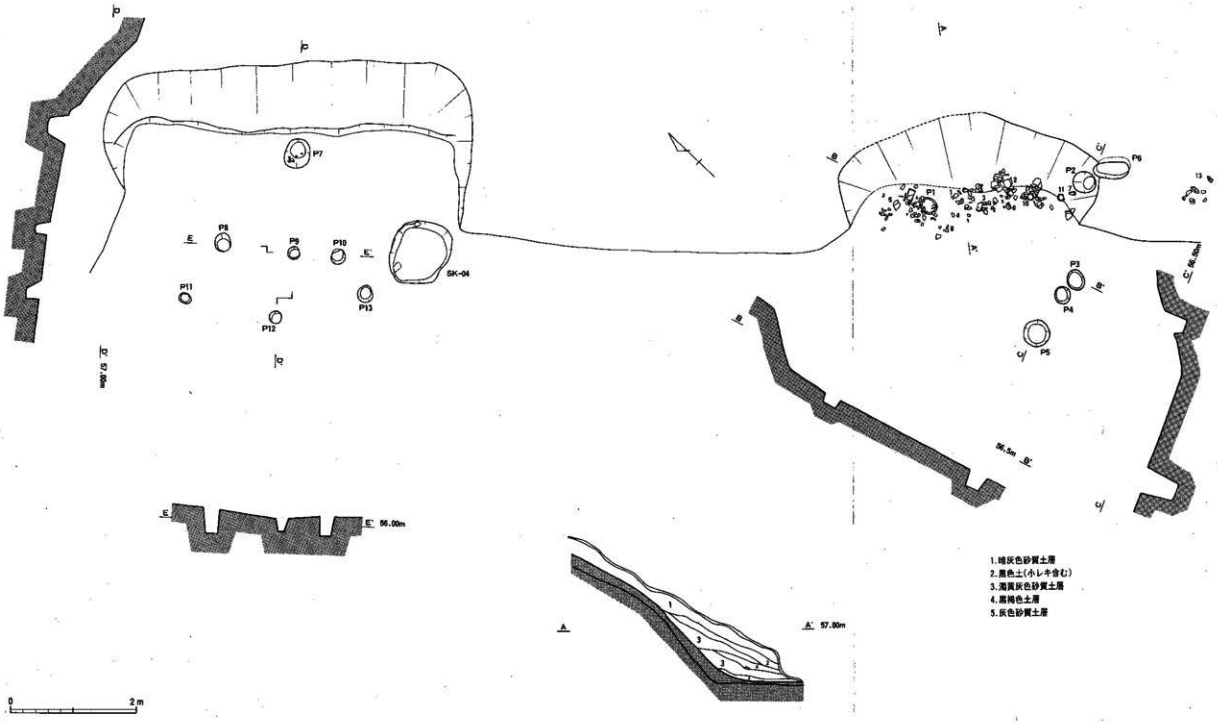
加工段出土遺物（第31図13～21）

土師器　皿（13）　平らな底部より丸みを持って立ち上がる短い体部を持つもので，法量は口径18.6㎝，器高2.9㎝を測る。調整は回転ナデが施され，回転糸切りによって切離しが行われている。また，口縁内外面の一部に，赤色顔料が残る。

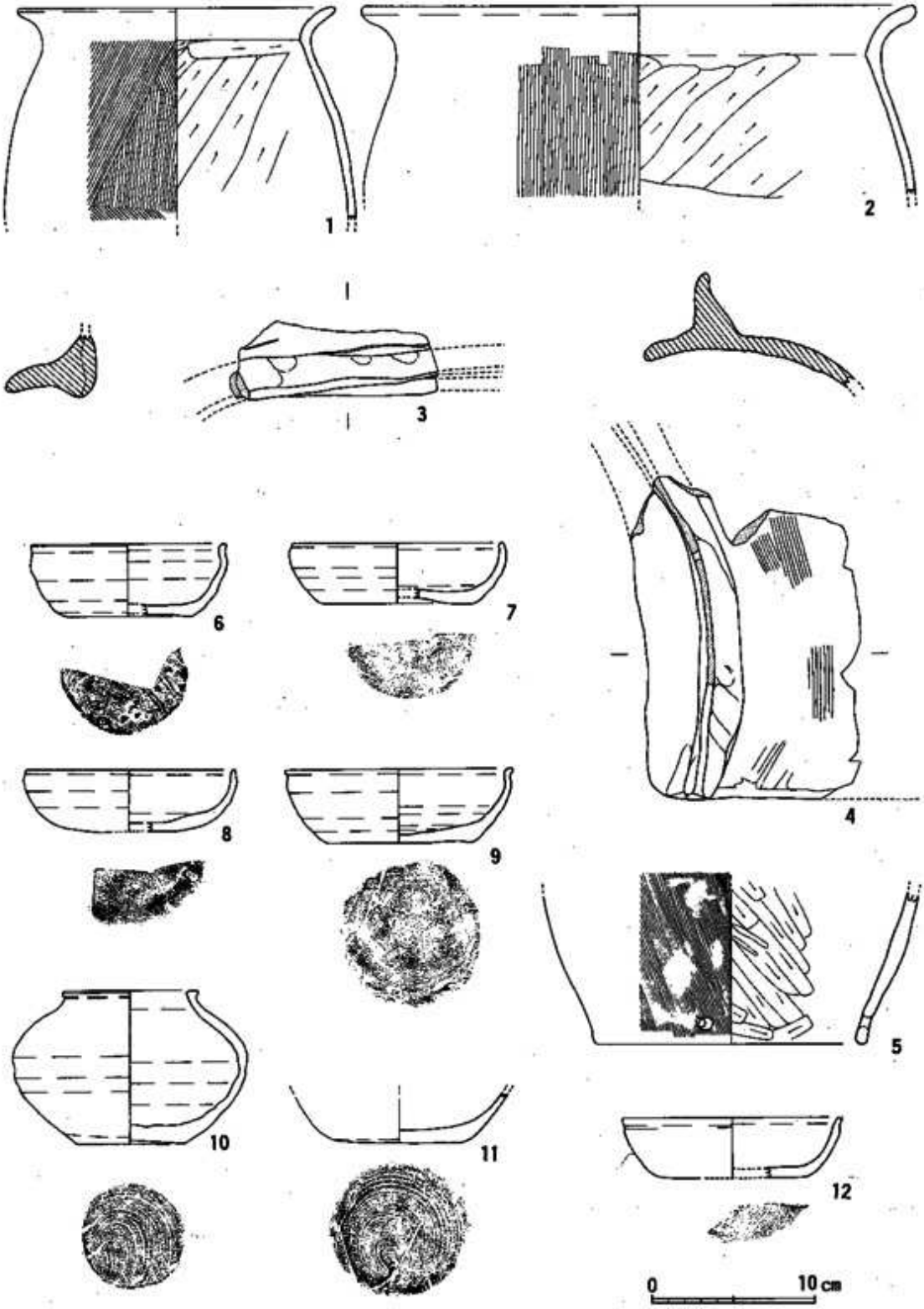
須恵器（14～21）　蓋（14）　天井部に低い輪状のつまみを持ち，口縁端部は下垂する。調整は天井部外面が回転ヘラケズリ，内面がナデ，その他は回転ナデを施す。法量は口径14.8㎝，つまみ径4.5㎝，器高2.65㎝を測る。

坏（15，17，18）　（15）は坏口縁部の破片と思われる。外反する器肉の厚い口縁部を持ち，口径10.4㎝を測る。調整は内外面とも回転ナデを施す。（17）は坏部が内湾気味に立ち上がり，底部に高台を持つもので，口径11.4㎝，高台径7.6㎝，器高4.75㎝を測る。調整は体部内外面に回転ナデを施す。（18）は直線的に開く口縁を持ち，平坦な底部に高台をもつもので，口径13.0㎝，高台径7.4㎝，器高4.0㎝を測る。調整は体部内外面に回転ナデを施す。

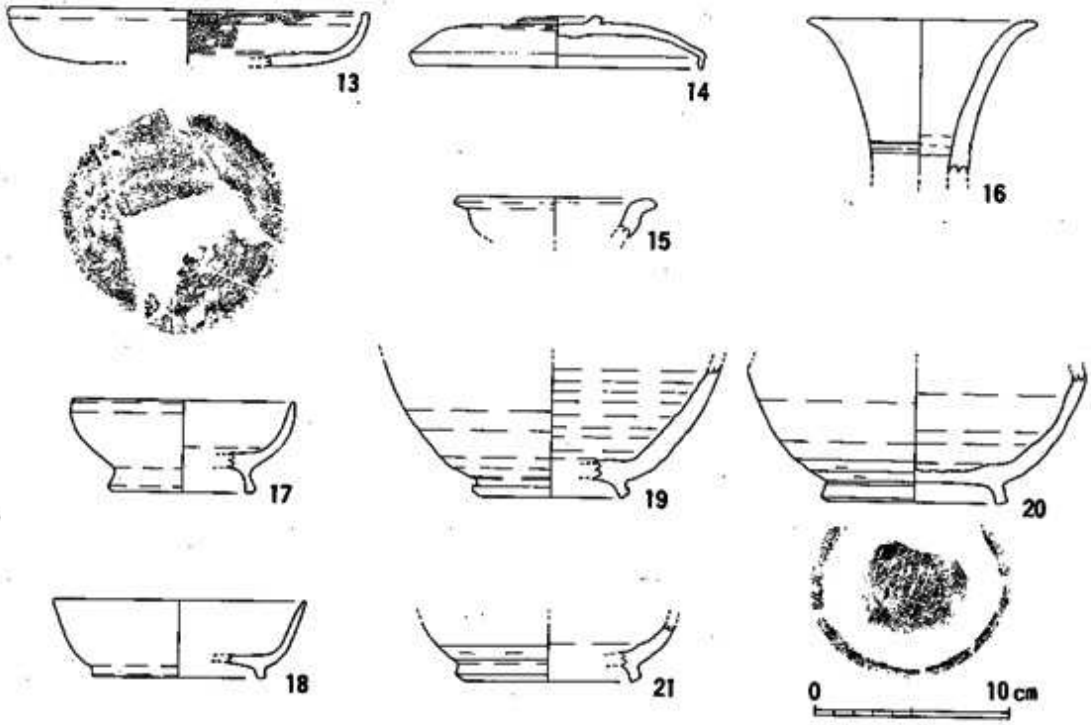
壺形土器（16，19～21）　（16）は口縁部が外反して大きく開く長頸壺口縁の破片であり，口径11.8㎝を測る。調整は内外面ともに回転ナデを行い，頸部外面に沈線2条を施す。（20）は「ハ」の字に開くしっかりした高台をもつ壺底部の破片であり，高台径9.6㎝を測る。調整は底部外面が静止糸切り後回転ナデを施す。焼成，胎土より（16）と同一個体と考えられる。（19，21）もしっかりした高台の付けられた壺底部の破片であり，（19）は高台端部外面に返りを持つ。調整は両者とも体部内外面に回転ナデを施す。



第29図　加工段，SX－01，SX－02実測図



第30図　SX－01 出土遺物実測図



第31図　加工段出土遺物実測図

SK－01（第32図）

SX－01の西側，加工段の平坦面に位置する方形プランの土坑である。規模は一辺1.0m，深さ36cmを測る。壁は熱を受け焼き締まっており，地山が1～5cmの厚さで赤変していた。

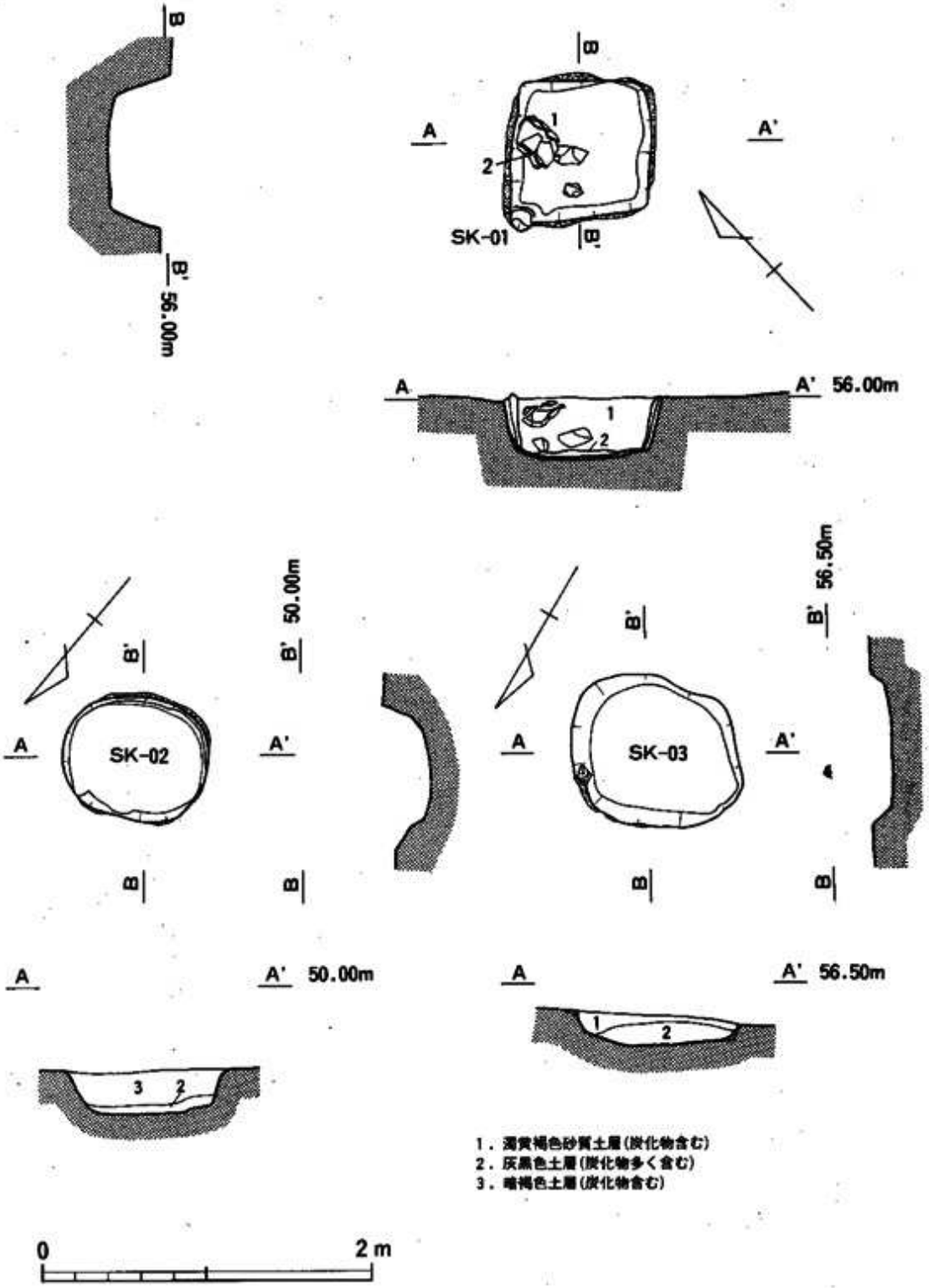
底部は平坦であり，ここから一辺5～20cm，厚さ5～7cmほどの石を3個検出した。覆土には炭化物を多く含んだ層がつまっており，炉として使用されていたと思われる。

出土遺物としては土坑埋土中から，土師器の甕（第33図1），須恵器の高台付坏（2）が出土した。

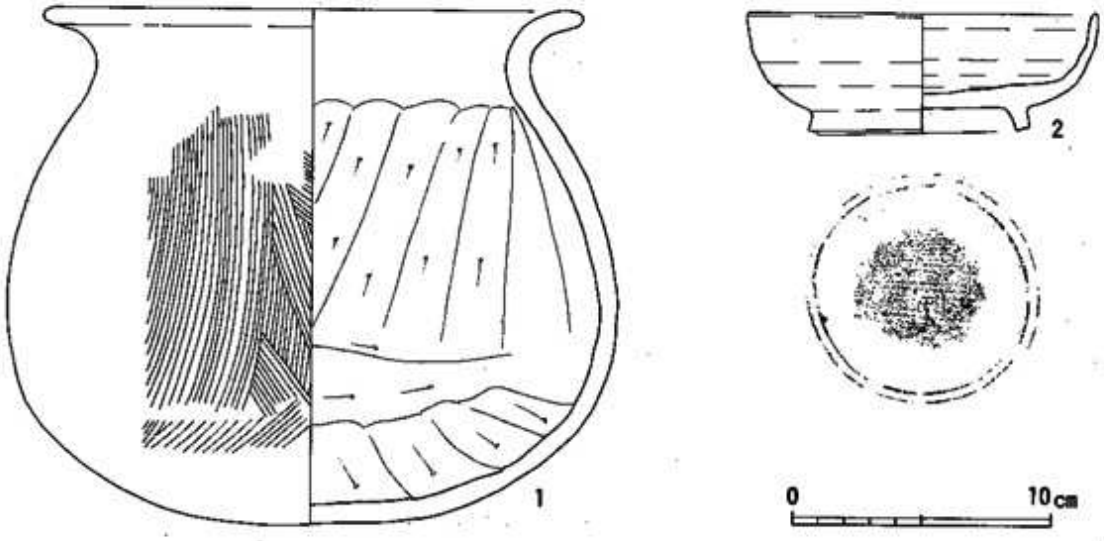
SK－01出土遺物（第33図）

甕形土器（1）　口縁部が外反し，胴部から底部にかけてよく張り出すもので，口径20.7cm，器高20.0cmを測る。調整は，口縁部が横ナデ，体部外面に縦方向のハケメ，内面にヘラケズリを施す。

坏（2）　平坦な底部の端に「ハ」の字に開く高台を付け，体部は内湾気味に立ち上がり口縁に至るもので，高台の端部にくぼみを持つ。調整は，底部が静止糸切りの後，回転ナデを施す。法量は口径13.0cm，高台径8.6cm，器高4.7cmを測る。



第32図　SK－01，SK－02，SK－03 実測図



第33図　SK－01 出土遺物実測図

SK－02（第32図）

ＳＩ－01の西壁と切り合う形で検出された楕円形プランの土坑であり，新旧関係はＳＩ－01（古），SK－02（新）である。規模は径80×88cm，深さ28cmを測る。

埋土は炭化物を多く含んでおり，土坑壁面は熱を受け赤変していたため，炉として使用されていたと考えられる。

SK－03（第32図）

ＳＸ－02の北側，加工段の平坦面に位置する不整楕円形プランの土坑である。規模は径91×99cm，深さ19.8cmを測る。

埋土は炭化物を多く含んでおり，土坑壁面は熱を受け赤変していた。SK－01，02同様，炉として使用されていたと考えられる。

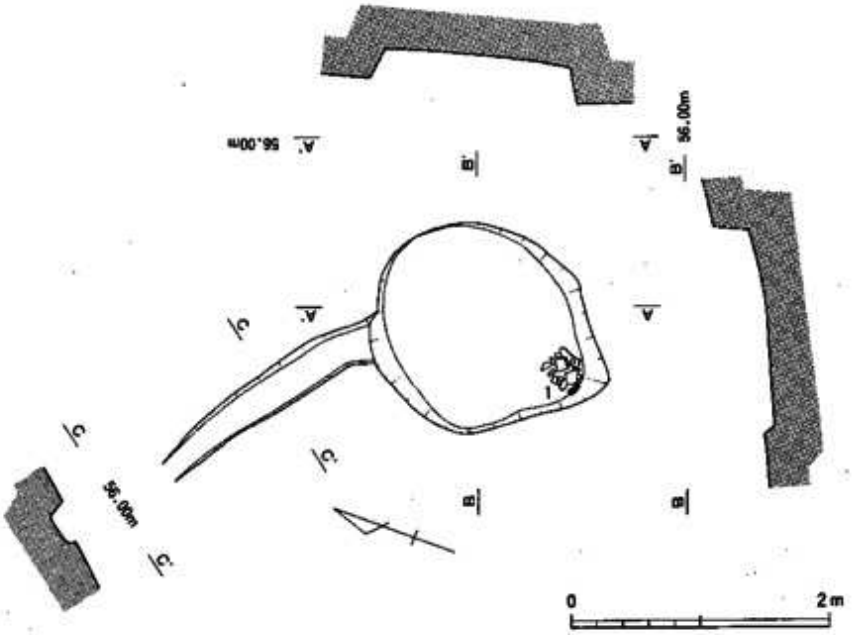
SK－04（第34図）

第Ｉ調査区の東側，加工段の平坦面やや下から検出された円形の土坑である。規模は上縁部で径162cm，深さ3.2～28.7cmを測る。土坑北西には幅17～24cm，深さ12.5cmを測る溝が北西方向に向かって伸びている。

出土遺物としては土坑埋土中から土師器の甕（第35図１）が出土した。

SK－04 出土遺物（第35図）

甕形土器（１）　外傾する口縁と緩やかに広がる肩部を持つもので，復元口径15.5cmを測る。調整は，風化がひどいが，体部内面にヘラケズリを観察することができる。

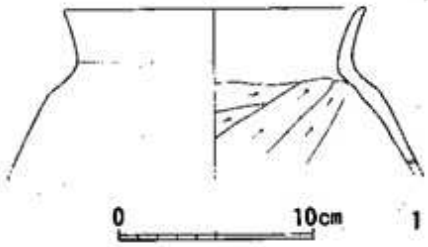


第34図　SK－04 実測図

SK－05（第36図）

第Ⅰ調査区の南東，南西向きの緩斜面で検出された不整楕円形の土坑であり，規模は径0.8×1.05ｍ，深さ 43.4～51cmを測る。

出土遺物としては，埋土中より，黒曜石の石鏃が３点（第37図１～３）出土している。



第35図　SK－04
出土遺物実測図

SK－05 出土遺物（第37図）

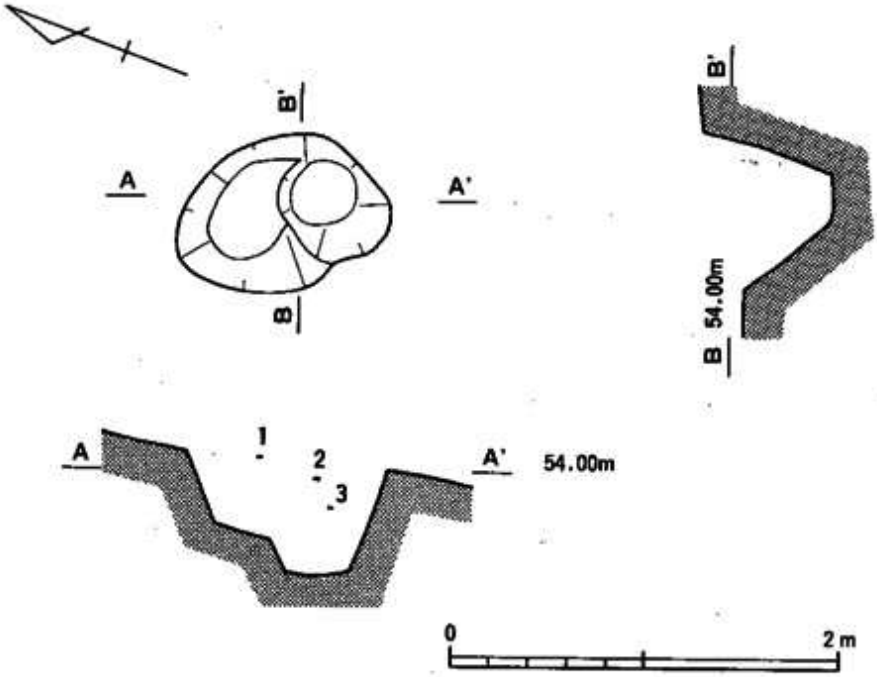
石鏃（１～３）　（１）は二等辺三角形の各辺が凹む形を呈する。（２，３）は二等辺三角形を呈し，基部が凹むものである。いずれも比較的丁寧な二次加工を施し，石材は黒曜石製である。重量は（１）が0.4ｇ，（２）が0.24ｇ，（３）が0.5ｇを測る。

第Ⅰ調査区出土遺物（第38～41図）

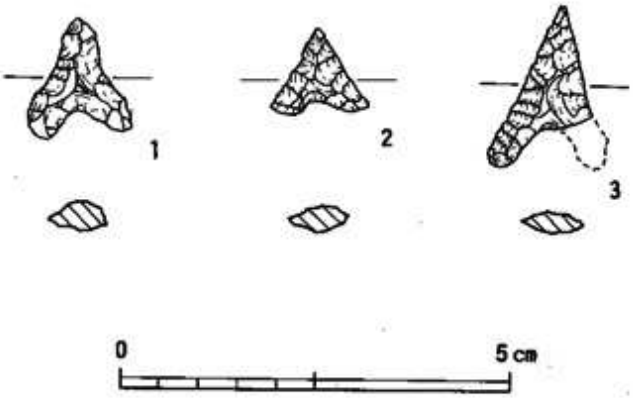
縄文土器（１，16）　（１）は胴部が屈曲する深鉢でありＨ－２区のピット中より出土した。調整は内外面共にナデを施し，外面に浅い一条の沈線と，内面に二枚貝条痕がみられる。（16）は縄文土器の破片であり，器種は不明である。Ｈ－２区の地山直上より出土した。調整は外面が荒いナデ，内面はナデを施す。時期は（１）が縄文時代晩期前半，（16）が縄文時代晩期と思われる。

甕形土器（２～７）　（２，３，５，７）は外反する複合口縁を持った甕であり，（６）はその底部と考えられる。（４）は突出部が鈍い複合口縁の甕である。いずれもＪ－４区・第２層より出土した。時期は（２，３，５～７）が弥生時代後期末から古墳時代前期初頭，（４）が古墳時代中期のものと思われる。

器台形土器（８）　筒部の縮約の進んだもので，Ｊ－４区・第２層より出土した。調整は風化が



第36図　SK－05 実測図

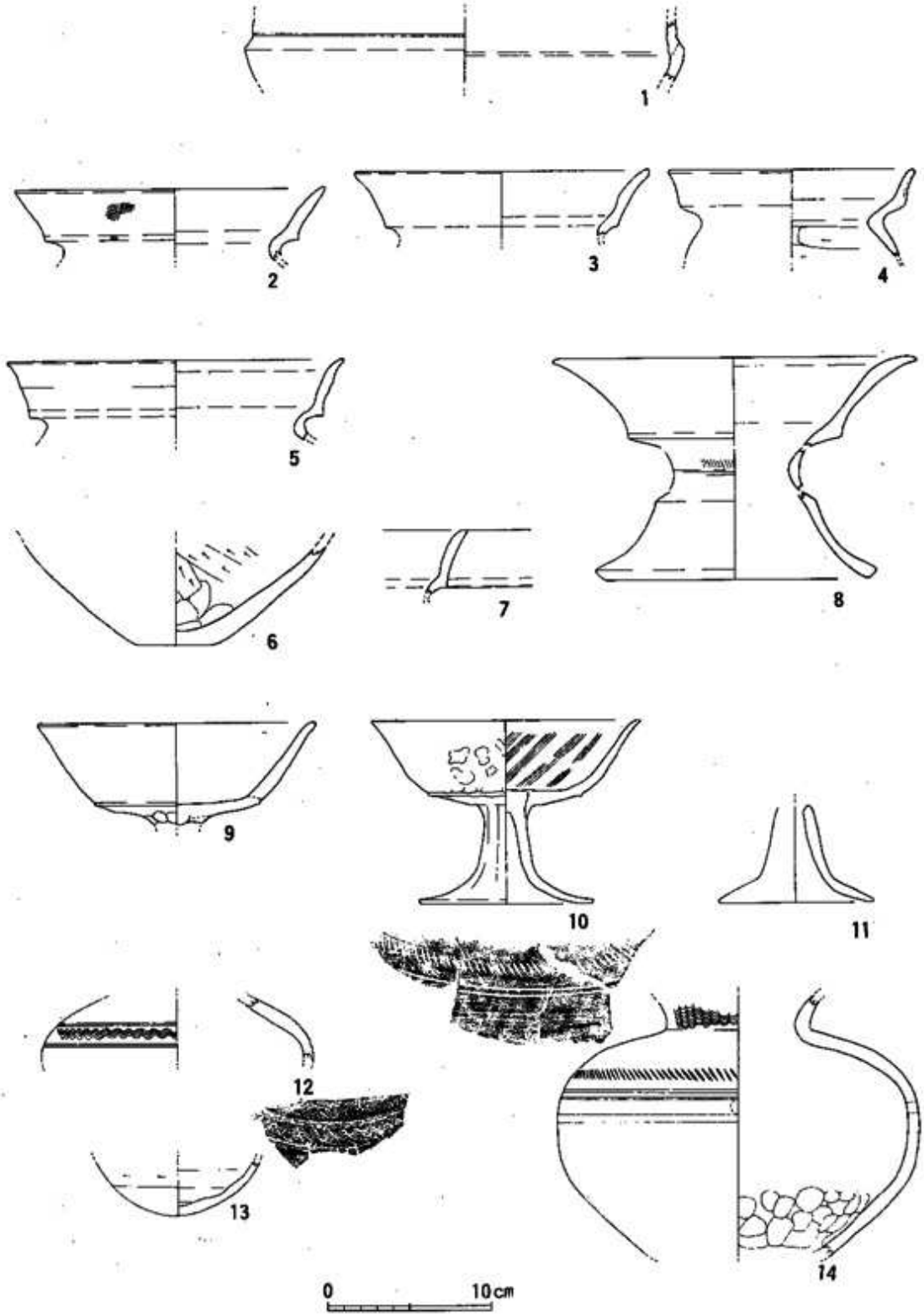


第37図　SK－05 出土遺物実測図

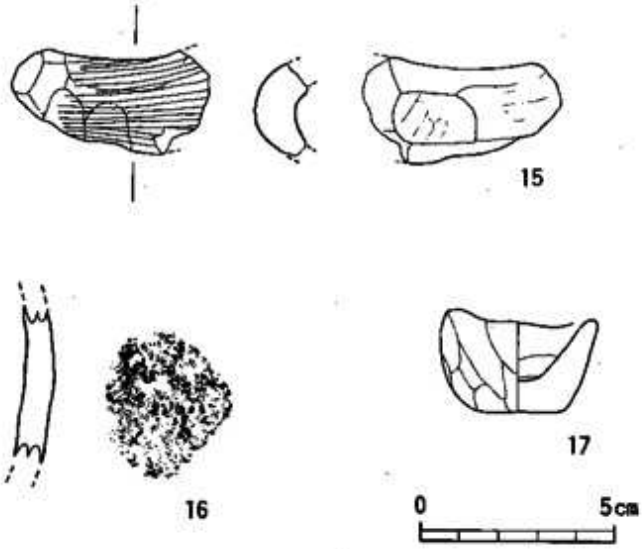
ひどいが，筒部外面に沈線と斜行刺突紋が観察できる。時期は弥生時代後期末から古墳時代前期初頭と思われる。

高坏（9～11）　（9，10）は坏部が外傾し口縁に至り，坏部外面に段を持つもので，J－4区・第2層より出土した。（9）の筒部には坏部との接合に用いられた粘土が充塡されたまま残っている。（11）はやや開き気味の脚筒部から端部にかけて更に大きく開くもので，I－3区のピット中より出土した。時期はいずれも古墳時代中期と思われる。

須恵器（12～14）　（12，13）は胎土及び焼成より同一個体の甕と考えられる。体部外面に，二条の沈線と櫛描波状紋を施すもので，J－3区・第1層より出土した。（14）はやや大型の甕で，J－3区・第1層より出土した。調整は口頸部に櫛描波状紋，体部外面に浅い四条の沈線と斜行刺



第38図　第Ⅰ調査区出土遺物実測図



第39図　第Ⅰ調査区出土遺物実測図

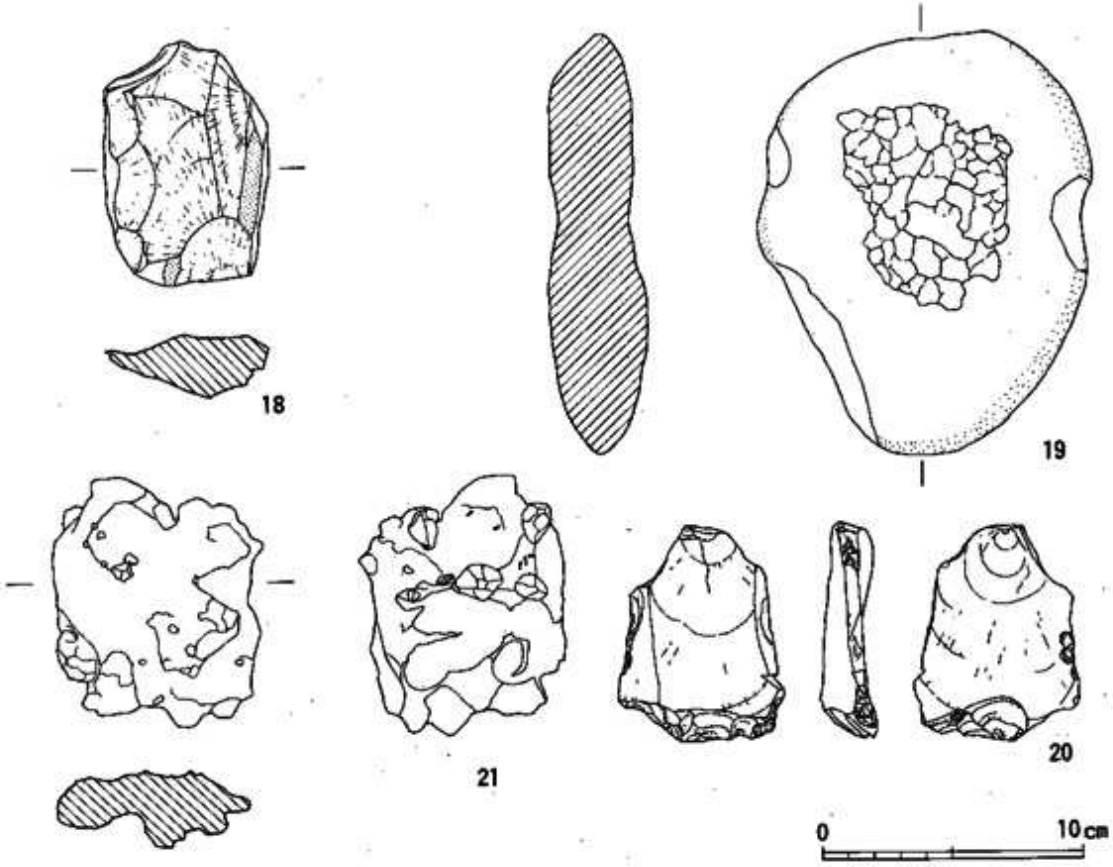
突紋を施し，底部内面と頸部内面の一部に指頭圧痕が残る。いずれも古式の須恵器と思われる。

手捏ね土器（17）　椀形で，内外面に指頭圧痕が残る。Ⅰ－2区のピット中より出土した。

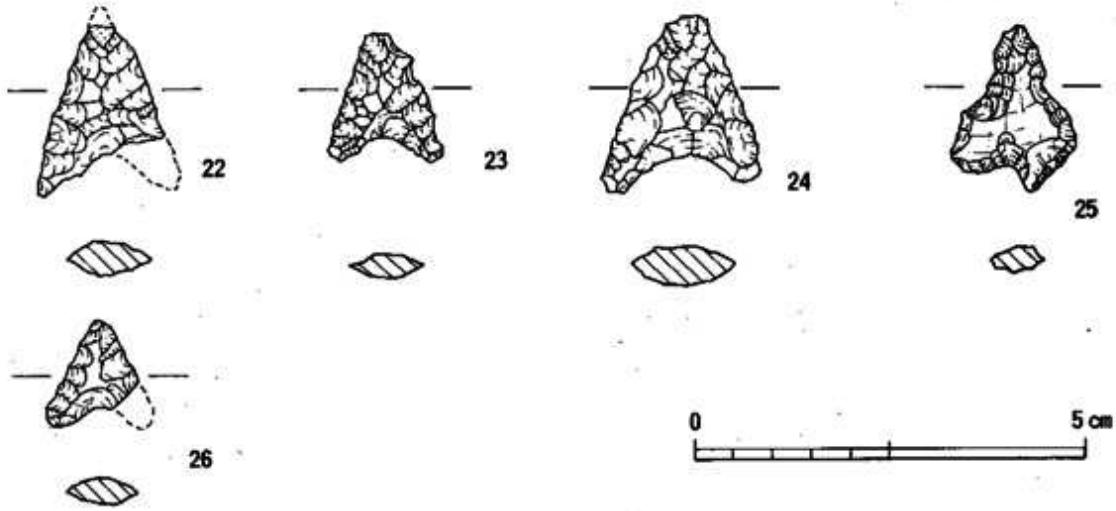
土製品（15）　内面は中空になっていたと考えられ，外面にはハケメを施す。Ⅰ－2区・第1層より出土した。

石器，鉄滓（18～26）

（18）は打製石斧で長さ9.1cm，幅6.3cm，厚み2.3cm，重量160gを測るもので，J－3区・第1層より出土した。（19）は敲石であり，石の両面が使用により大きく凹んでいる。重量905gを測るものでJ－4区・第1層より出土した。（20）は，玉髄製の掻器である。素材は比較的形の整った縦長剥片で，背面も腹面と同一方向の剥離面が3面観察される。剥片の末端には，腹面から急角度の剥離を施して，刃部を形成している。ただ，刃部形成以前に腹面に平坦な剥離面が数面形成されているため，刃部は不規則に曲がっている。背面左側縁には削器状の簡単な剥離面が，右側縁には刃こぼれ状の剥離が見られる。基部（打面側）の両サイドには背面より抉るような加工が施されている。何らかの着柄を意識したのかもしれない。J－3区・地山直上より出土した。(注1)（21）は254gを測る鉄滓であり，Ⅰ－2区のピット中より出土した。（22～26）は黒曜石製の石鏃である。（22）はJ－5区・第1層，（23）はJ－3区・第1層，（24）はJ－4区・第1層，（25）はⅠ－3区・第1層，（26）はⅠ－2区・第1層から出土した。重量は（22）が1.07g，（23）が0.55g，（24）が1.64g，（25）が0.73g，（26）が0.4gを測る。



第40図　第Ⅰ調査区出土遺物実測図



第41図　第Ⅰ調査区出土遺物実測図

第Ⅱ調査区

SI－06（第43図）

第Ⅱ調査区の北西，西向きの緩斜面で検出された隅丸多角形の竪穴住居跡である。壁は東側が良く残っており，周壁肩部で径7.8ｍ，深さ最大0.7ｍを測り，垂直に近く立ち上がるが，西側では周壁は認められず，住居床面も一部削られている。

住居床面からは主柱穴7個（P_1～P_7），中央ピット（P_8），ピット7個，周溝，炉を検出している。主柱穴間の間隔は2.35～3.0ｍ，規模は上縁径で40～75cm，深さ21～56cmを測る。現存する周壁下には幅5～15cm，深さ2.6～6.5cmを測る周溝が巡り，また中央ピット（P_8）から東，北東方向に幅8～15cm，深さ1～4.7cmを測る2本の溝が伸びる。中央ピットを囲むように炉が設けられており，4か所が10×10～45cmの範囲で焼け，赤変していた。現存する床面は水平で貼り床を確認した。地山と同じ土を2～5cmの厚さで貼り付け，貼り床下からSI－09（第43図）を検出した。

住居周壁肩部から1.5～2ｍの間隔の所には，幅30～150cm，深さ5～8cmを測る溝（SD－01）が，途中途切れながらも周っている。

SI－06と切り合ってSK－23，SK－24を検出したが，新旧関係は，SI－06（新），SK－23（古）。SI－06（古），SK－24（新）であり，SI－06に伴うものではない。

出土遺物としては住居床面より甕（第44図1，2），低脚坏（3，4），器台形土器（6），SD－01より高坏の脚部（5）が出土した。

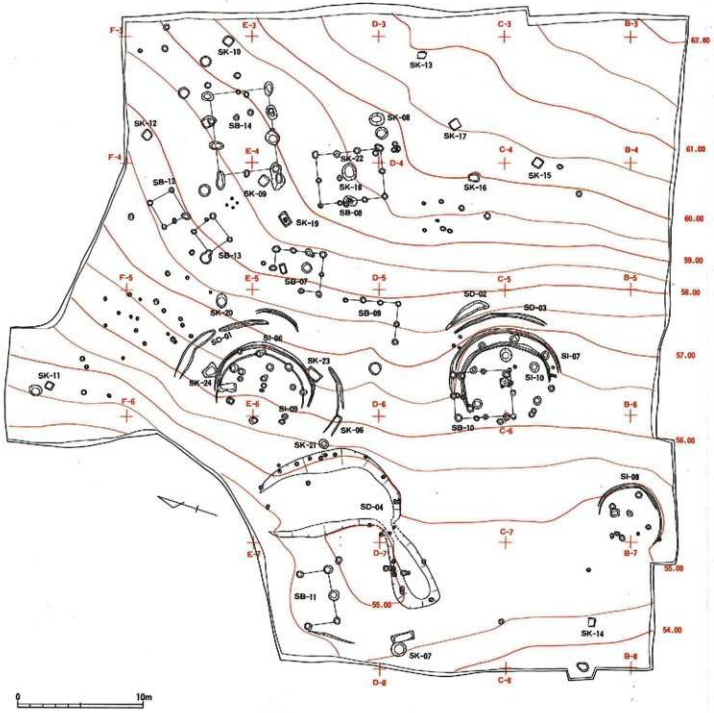
SI－06出土遺物（第44図）

甕形土器（1，2）　外反する複合口縁部を持つ甕の破片である。調整は口縁内外面に横ナデがが施される。口径は復元で（1）が16.8cm，（2）が14.1cmを測る。

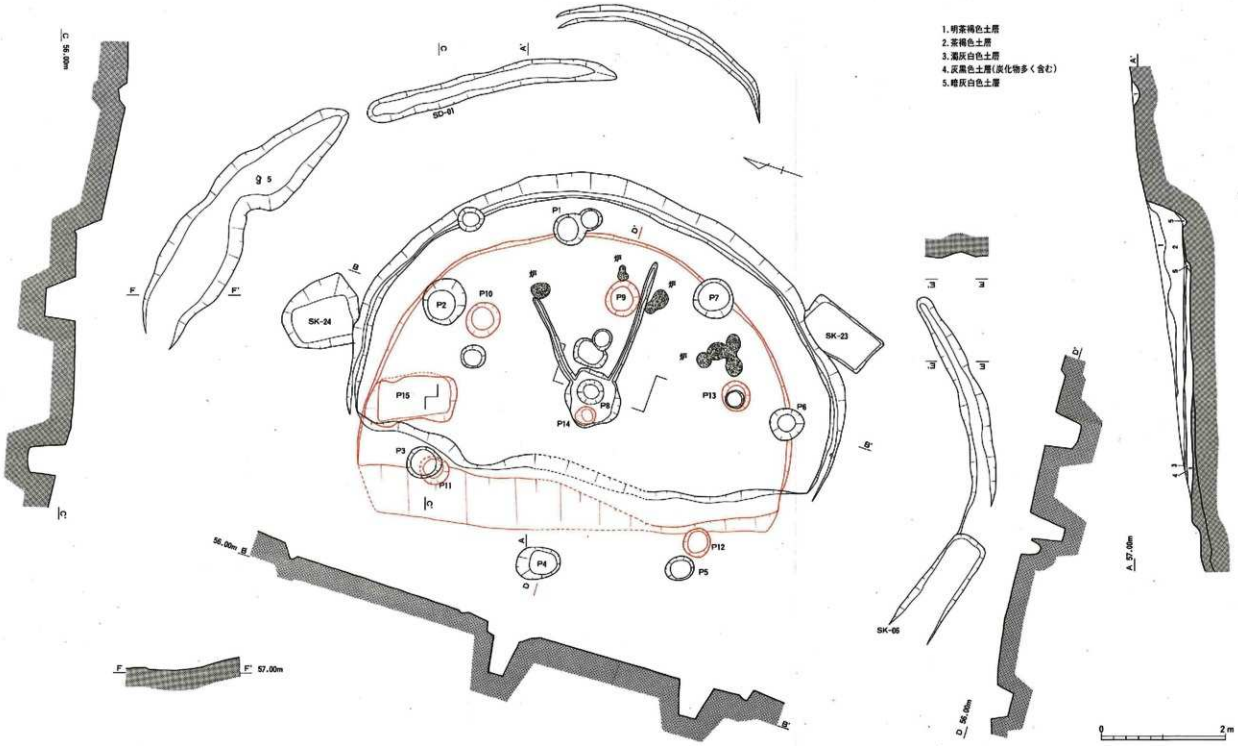
低脚坏（3，4）　（3）は坏部が深く，口縁部は薄く引き出され外反し，「ハ」の字に開く低い脚部を持つもので，法量は口径11.6cm，脚径5.9cm，器高4.9cmを測る。調整は風化がひどく不明である。（4）は坏部が浅く，直立気味の脚部を持つもので，法量は口径14.8cm，脚径4.9cm，器高5.2cmを測る。調整は坏部内面がミガキ，外面は縦方向のハケメを施す。

高坏（5）　脚筒部の破片であり，調整は筒部外面が横ナデ，内面にヘラケズリを施す。

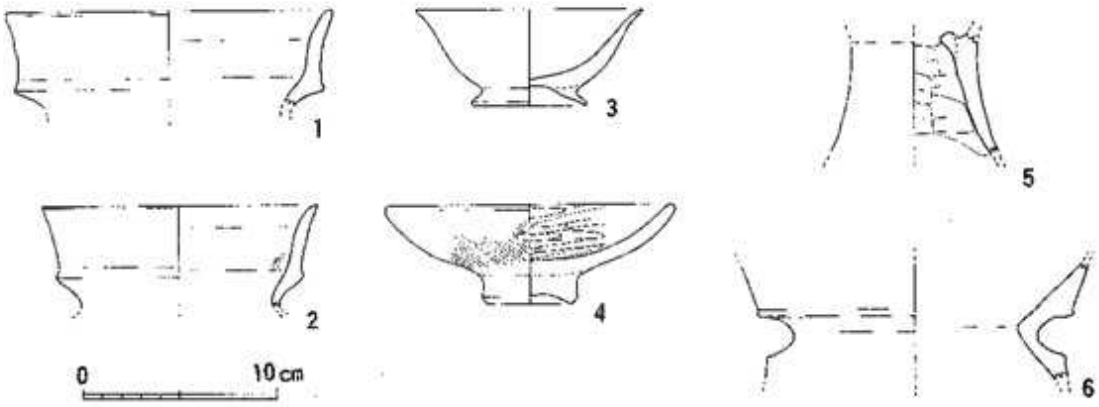
器台形土器（6）　縮約の進んだ筒部の破片である。調整は内外面とも風化がひどく不明である。



第42図　第Ⅱ調査区遺構位置図



第43図　SI－06，SI－09実測図



第44図　ＳＩ－06 出土遺物実測図

ＳＩ－09（第43図）

ＳＩ－06 の貼り床下から検出された隅丸多角形の竪穴住居跡である。覆土は大部分が堅く締まった灰白色土層（地山と同じ土）であり，間に灰黒色土層（炭化物含む）が入っていた。

規模は周壁肩部で径 6.9 ｍを測る。周壁は東側が良く残っており，高さ最大11cmを測るが，西側では周壁は認められず，住居床面も一部消失している。

住居跡の床面からはピット８個を検出した。主柱穴となりうるものは６個（P_4，P_9～P_{13}）であり，主柱穴間の間隔は 2.3 ～ 2.5 ｍ，上縁の径は 25～45cm，深さ38～56cmを測る。中央ピット（P_{14}）は平面円形を呈し，上縁径32cm，深さ48.6cmを測る。また，北西の周壁下には，平面方形を呈する一辺70× 142 cm，深さ76.5cmを測る比較的規模の大きいピット（P_{15}）が掘られていた。

ＳＩ－07（第45図）

ＳＩ－06 の南東，西向きの緩斜面で検出された隅丸多角形の竪穴住居跡である。規模は周壁肩部で径 8.8 ｍである。周壁は東側が良く残っており，高さ最大24.8cmを測るが，西側では周壁は認められなかった。

住居跡の床面からは，ピット12個，中央ピット（P_{15}），周溝を検出した。主柱穴となりうるものは８個（P_1 ～P_8）であり，その間隔は2.65 ～ 2.8 ｍで，ピット上縁の径は40～55cm，深さ26.7～70cmを測る。残存する周壁下の床面には幅10～25cm，深さ 3.5 ～ 5 cmを測る周溝が巡る。床面は平坦であり．貼り床を確認した。淡茶褐色土を貼り付け，床面を平らに作っており，貼り床下からＳＩ－10 を検出した。

住居跡の北東側，ほぼ 2.0 ｍの間隔の所には，幅20～70cm，深さ１～ 17.7cmを測る溝（ＳＤ－ 02）が周る。

出土遺物としては，住居床面より甕の口縁部（第46図１，２），器台形土器（３），甑形土器（４，５），鉄製品（第47図７），ＳＩ－07の覆土中，灰黒色土層より須恵器の蓋（第46図６）が出土した。

ＳＩ－07出土遺物（第46，47図）

甕形土器（１，２）　外反する複合口縁部の破片である。調整は（１）が横ナデで，（２）は風化がひどく不明である。口径は復元で（１）が12.4cmを測るが，（２）は不明である。

器台形土器（３）　筒部から脚台部の破片であり，底径11.6cmを測る。調整は風化がひどく不明である。

甑形土器（４，５）　（４）は体部から口縁部，（５）は底部から体部の破片であり，胎土及び焼成より同一個体と思われる。底部から内湾気味に立ち上がり，上部がすぼみ口縁部となっているもので，口縁端部より下に10cmの位置に，差し込み接合された把手が横方向についている。法量は復元で口径9.6cm，底径37cmを測る。調整は口縁部は横ナデ，体部外面はハケメ，内面はヘラケズリ，裾部は横ナデを施す。

須恵器蓋（６）　天井部に低い輪状のつまみを持ち，口縁端部は下垂する。調整は天井部外面が回転ヘラケズリ，内面はナデ，その他は回転ナデを施す。法量は口径16.1cm，つまみ部径4.9cm，器高2.5cmを測る。なお，本住居跡に伴うものではない。

鉄製品（７）　長さ6.7cm，幅1.1cm，厚さ1.1cmを測る鉄製品である。酸化がひどく詳細は不明であるが，刀子と思われる。

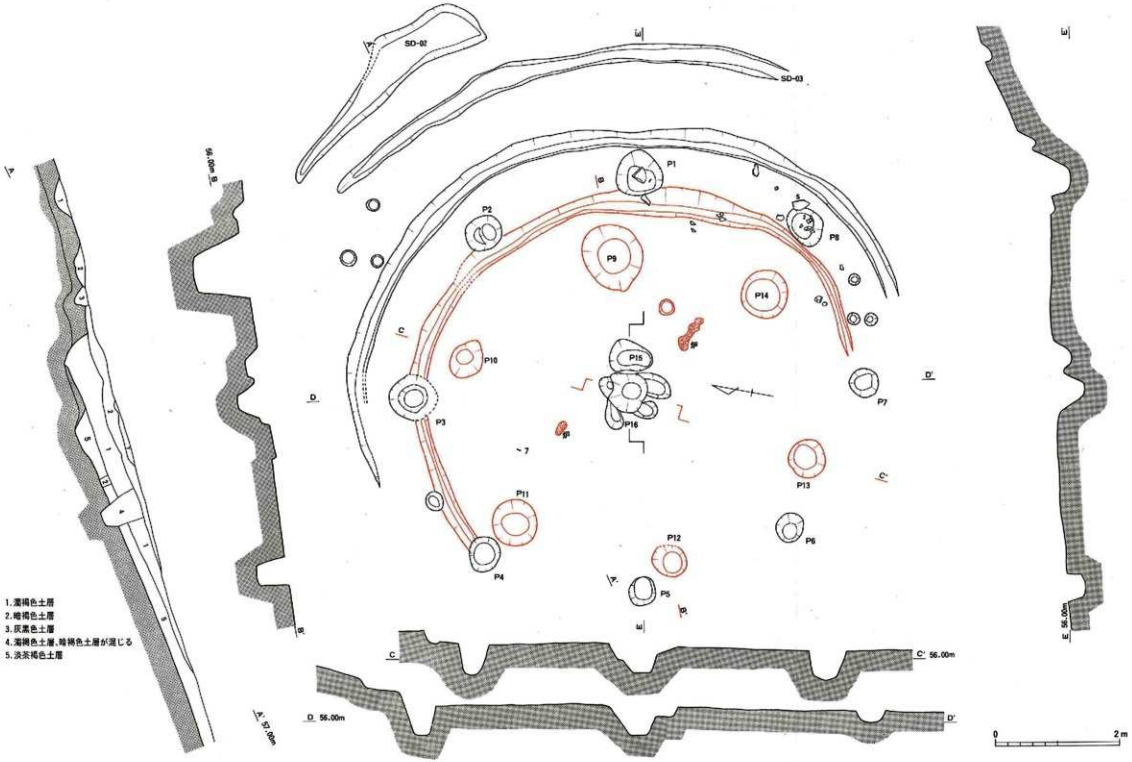
ＳＩ－10（第45図）

ＳＩ－07の貼り床下から検出された隅丸多角形の竪穴住居跡である。規模は周壁肩部で径7.1mを測る。周壁は東側が良く残り，壁高17cmを測るが，西側では周壁は認められなかった。

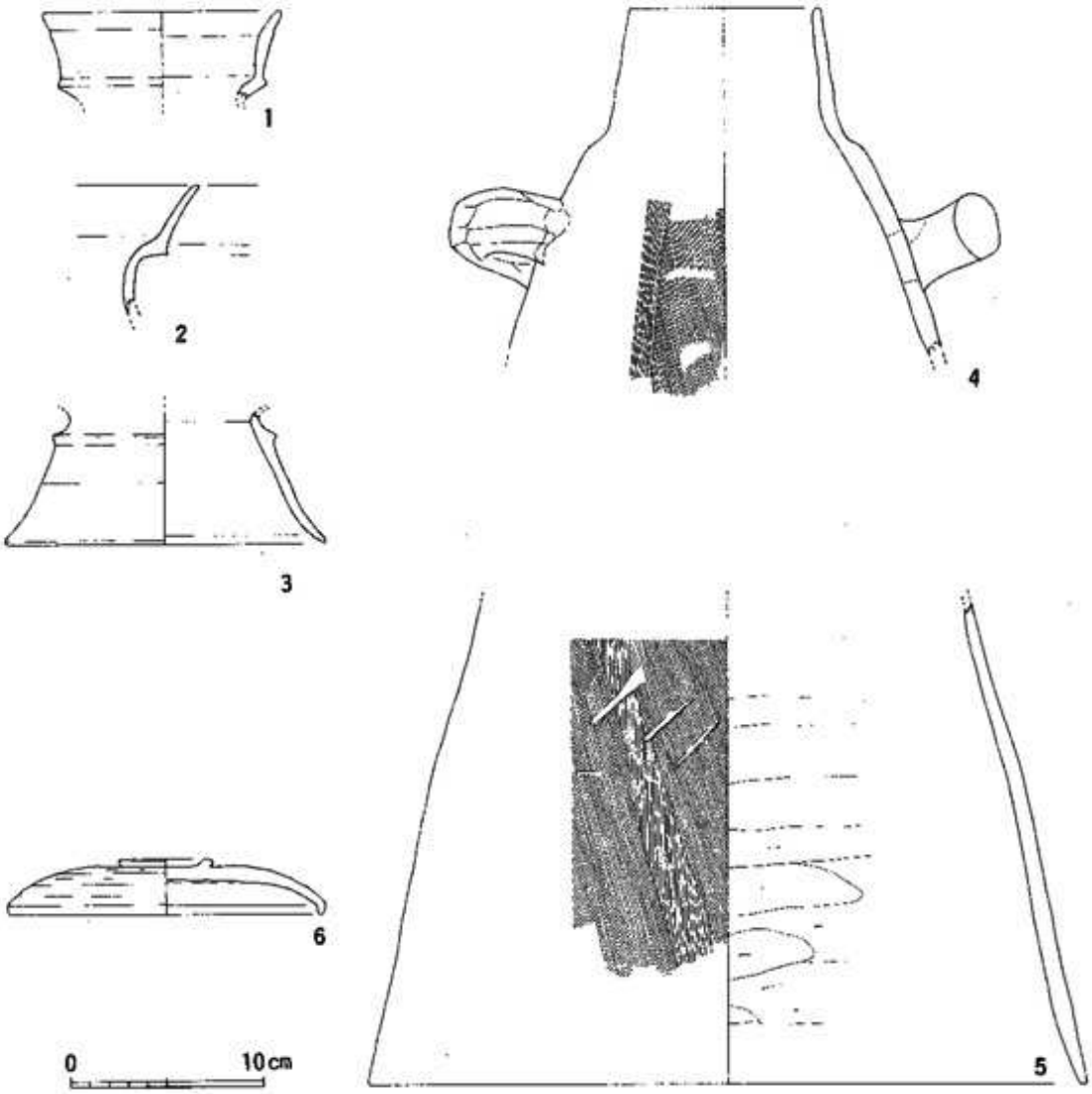
住居床面からは主柱穴６個（P_9～P_{14}），中央ピット（P_{15}），ピット，周溝，炉を検出した。主柱穴間の間隔は2.7mを測り，上縁径60～110cm，深さ40～81.5cmを測る。残存する周壁下の床面には幅10～20cm，深さ3.5～5.5cmを測る周溝が巡っている。中央ピットの東と西には炉が設けられており，10×60cm，10×20cmの範囲が焼け，赤変していた。

住居跡の東側，2.2mの間隔の所には幅22～40cm，深さ6～13cmを測る溝（ＳＤ－03）が周っている。

出土遺物としては，住居床面から器台形土器（第48図１），黒曜石の石鏃（第49図２）が出土している。



第45図　SI－07，SI－10実測図

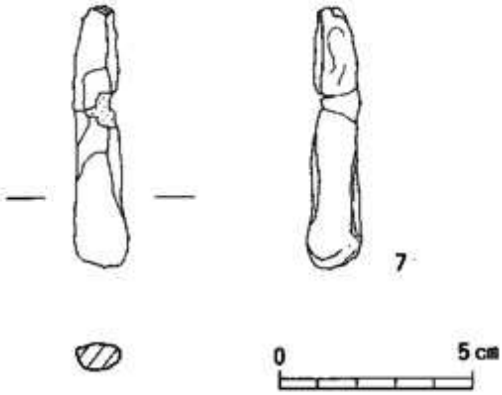


第46図　SI－07 出土遺物実測図

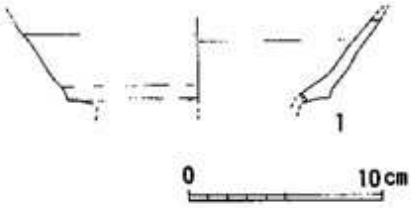
SI－10 出土遺物（第48，49図）

器台形土器（1）　口縁端部を欠く器台上台部の破片である。調整は内外面ともに横ナデが施される。

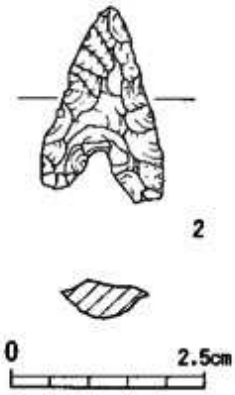
石鏃（2）　二等辺三角形を呈し，基部が凹むものである。比較的丁寧な二次加工を施し，石材は黒曜石製である。



第47図　SI－07 出土遺物実測図



第48図　SI－10
出土遺物実測図



第49図　SI－10
出土遺物実測図

SI－08（第50図）

第Ⅱ調査区の南側，西向きの緩斜面で検出された隅丸方形の竪穴住居跡である。規模は周壁肩部で径5.5ｍを測る。周壁は東側が良く残っており，最大壁高49cmを測るが，西側では周壁は認められなかった。

住居跡の床面からは主柱穴４個（P_1～P_4），中央ピット（P_5），ピット，溝を検出している。主柱穴間の間隔は2.4×2.7ｍを測り，ピット上縁での径は40～55cm，深さ41.4～67.4cmを測る。残存する周壁下の床面には幅５～10cm，深さ2.4～４cmを測る周溝が巡る。

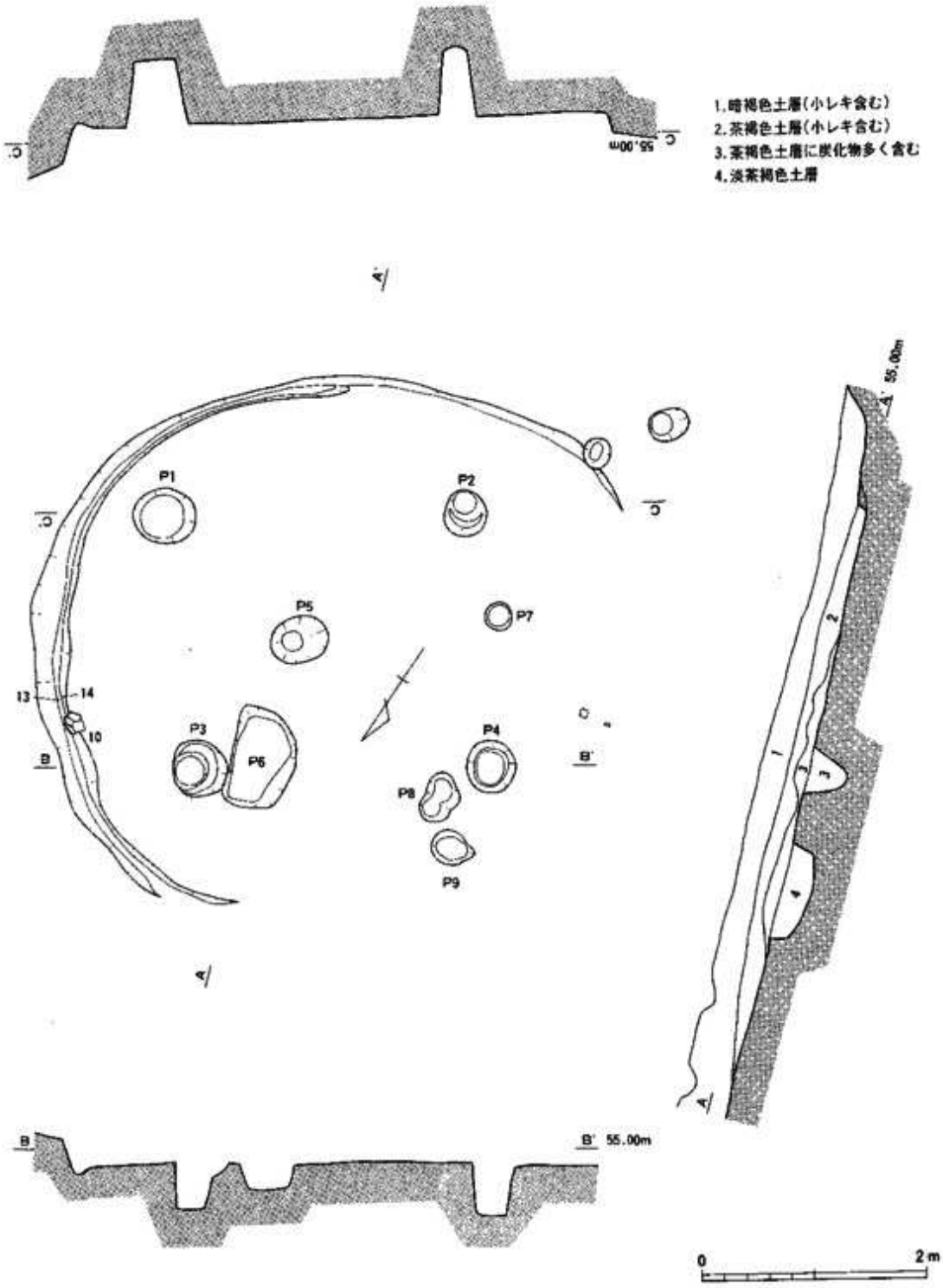
出土遺物としては，住居床面より甕形土器の体部（第51図10），炭化した桃の種（第52図13，14）が出土した。また，覆土の茶褐色土層より甕形土器の口縁部（第51図１～８），低脚坏の脚部（９），暗褐色土層より須恵器の高台付坏（11），土師器の甕口縁部（12）が出土した。

SI－08出土遺物（第51，52図）

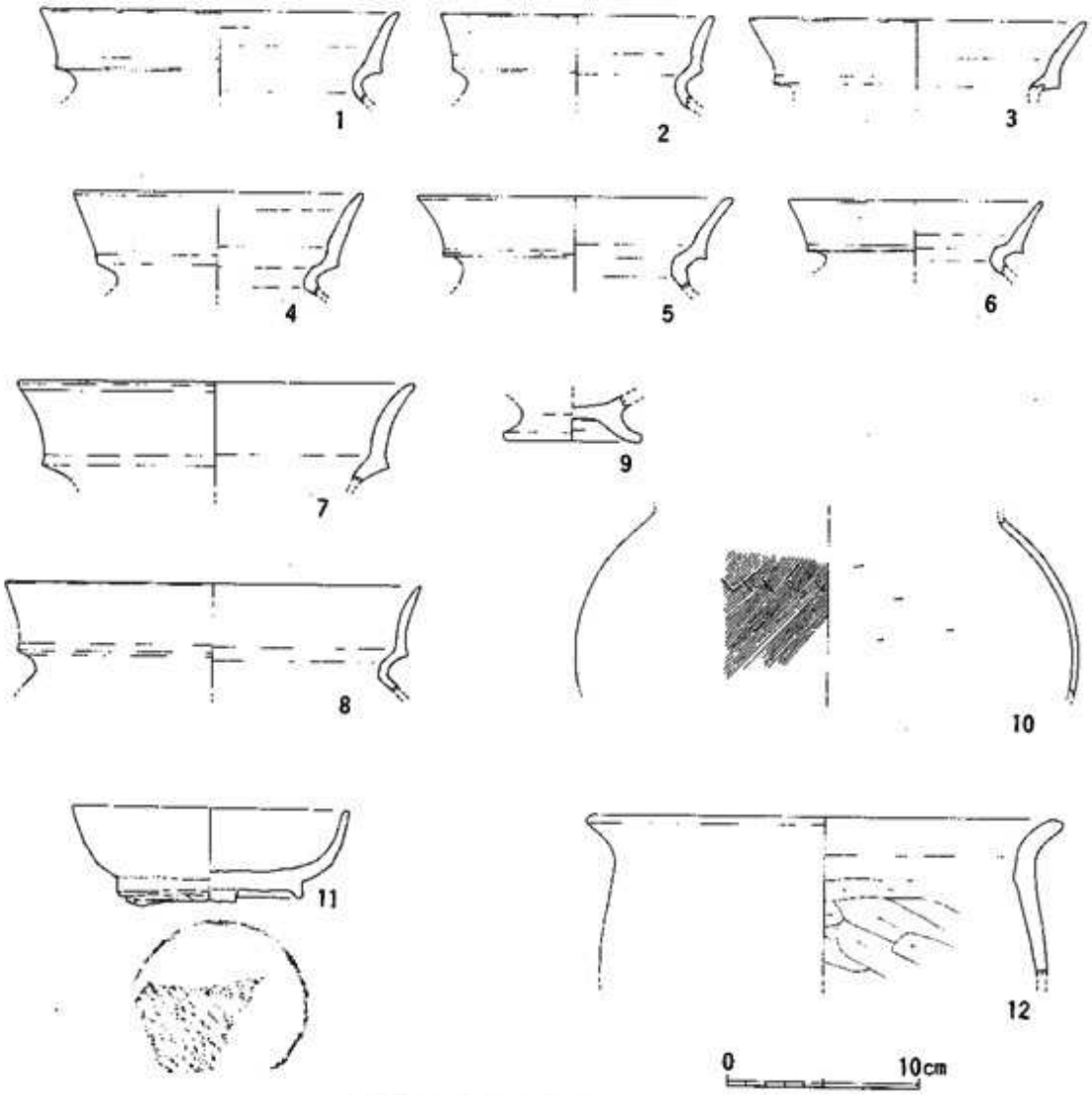
甕形土器（１～８，10，12）　１～８は外反する複合口縁部の破片であり，調整はいずれも横ナデである。口径は復元で（１）が18.7cm，（２）14.2cm，（３）17.6cm，（４）15.0cm，（５）16.4cm，（６）13.2cm，（７）20.6cmを測る。(10)は甕体部の破片であり，内面はヘラケズリ，外面にハケメと刷毛目原体による斜行刺突紋が施される。（12）は外反する口縁と，なで肩の体部を持ったものであり，口径は復元で24.8cmを測る。調整は口縁部が横ナデ，体部内面にヘラケズリが施される。

須恵器坏（11）　「ハ」の字状の高台を持った底部より内湾気味に立ち上がるもので，口径14.4cm，高台径9.5cm，器高5.3cmを測る。調整は底部には甕片が溶着しているため詳細は不明であるが，回転ナデが観察でき，その他は回転ナデが施される。

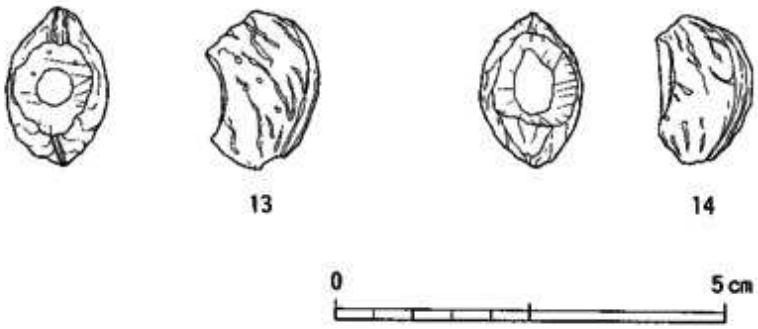
桃の種（13，14）　住居北東隅の周溝の上部分から出土したものである。両方の種子とも孔があいていたが，人為的なものかどうかは不明である。



第50図　SI－08実測図



第51図　S I－08 出土遺物実測図



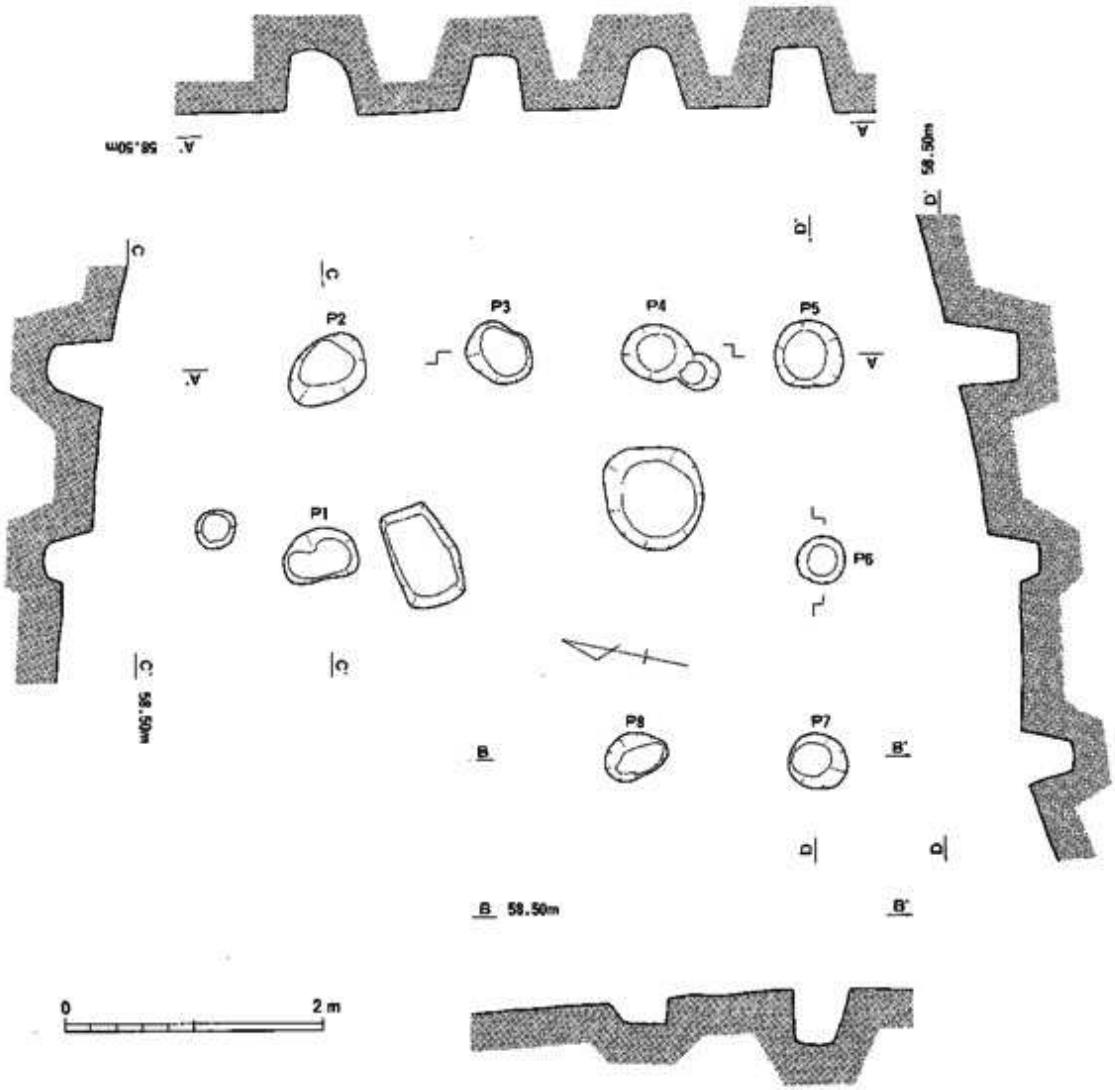
第52図　S I－08
出土遺物実測図

SB－07（第53図）

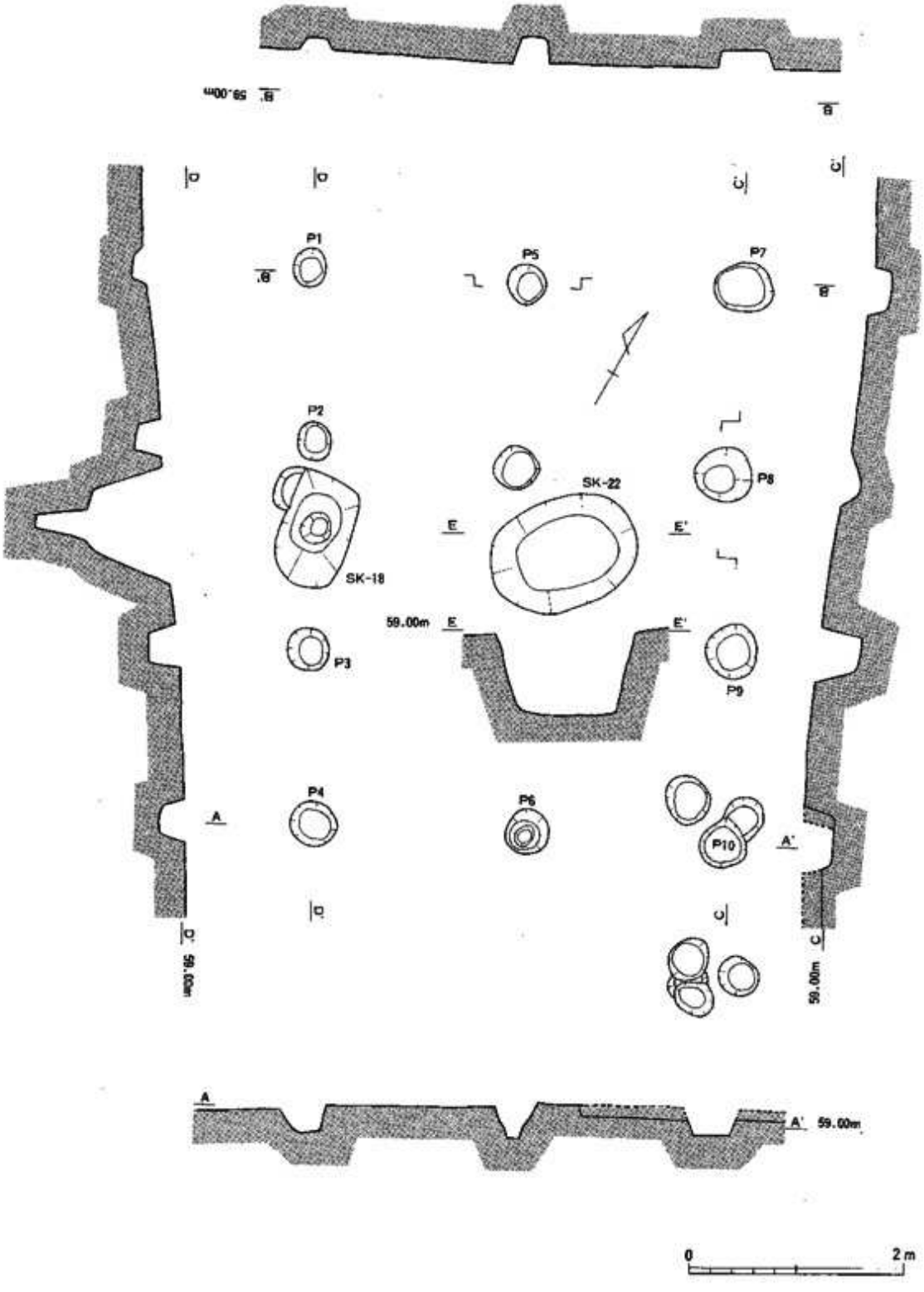
第Ⅱ調査区の中央北側，西向きの緩斜面から検出された長辺3.8ｍ，短辺3.2ｍを測る，3×2間の掘立柱建物跡であるが，北西側のピットは後世の掘削によりかなり削られており，検出できなかった。床面も水平ではなく，比高差は最大で33cmの開きがある。ピットの現状での規模は，上縁部径34～56cm，深さ28.3～51.3cmを測る。

SB－08（第54図）

第Ⅱ調査区の東側，西向きの緩斜面で検出された長辺5.2ｍ，短辺4.0ｍを測る，3×2間の掘立柱建物跡である。床面はほぼ水平で，標高59.50ｍを測る場所に位置する。ピットの現状での規模は，上縁径30～56cm，深さ16.5～40.5cmを測る。



第53図　SB－07 実測図



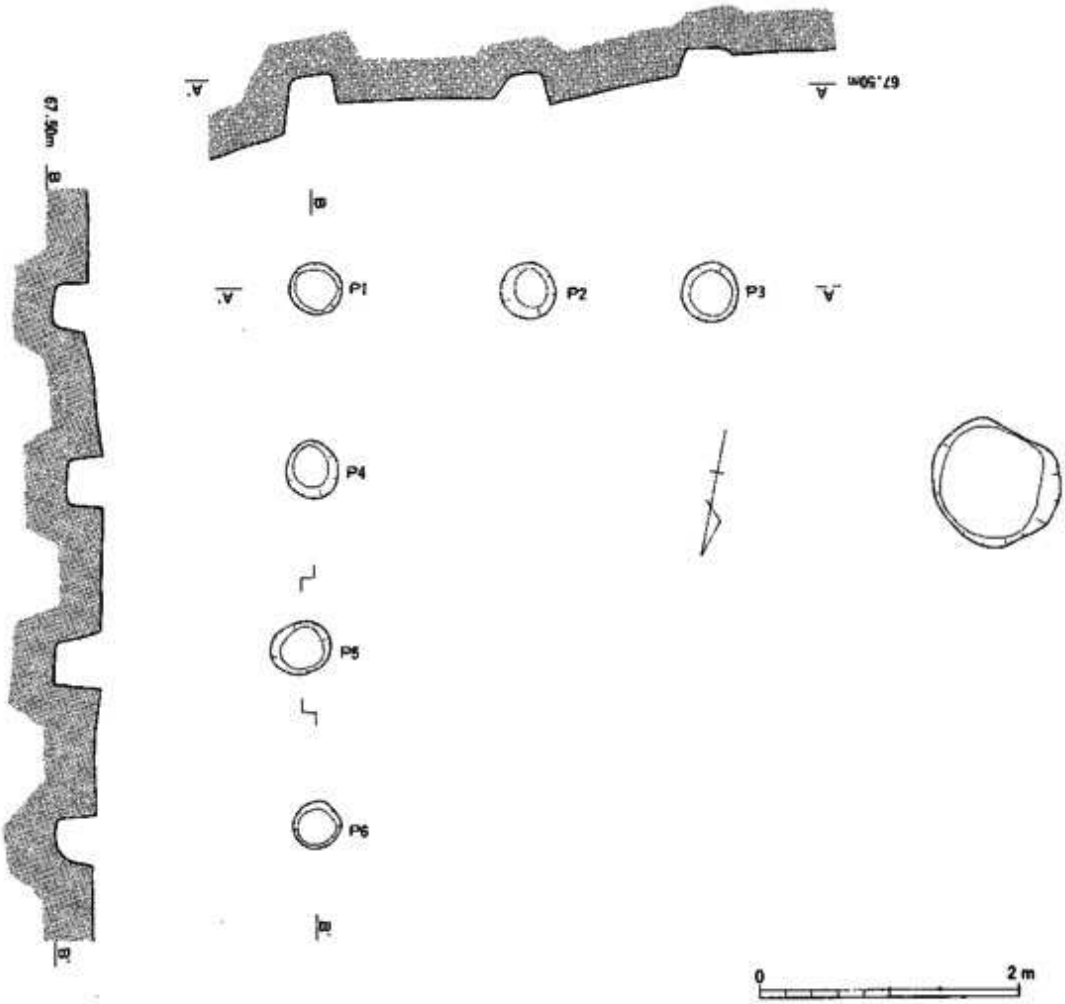
第54図　SB－08 実測図

SB－09（第55図）

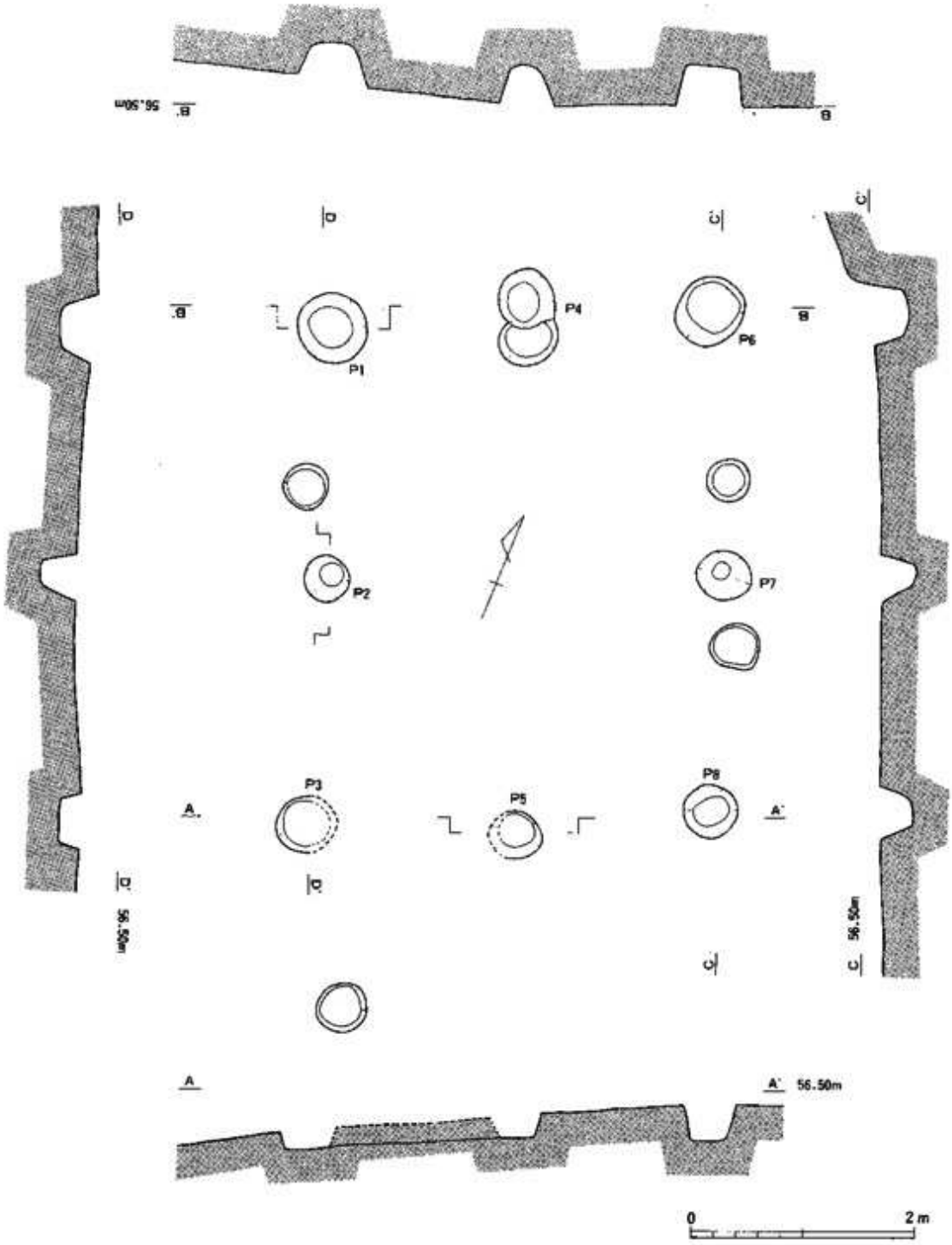
第Ⅱ調査区の中央，西向きの緩斜面で検出された長辺4.2ｍ，短辺3.1ｍを測る，３×２間の掘立建物跡であるが，西側は斜面下となるためピットは検出されなかった。ピットの現状での規模は，上縁径40cm，深さ18～39.5cmを測る。立地を観察すると，ＳＢ－07の南側に位置し，主軸をほぼ同一方向に合わせる。

SB－10（第56図）

第Ⅱ調査区の中央南側，ＳＩ－07と重なり合う形で検出された長辺4.6ｍ，短辺3.5ｍを測る，２×２間の掘立柱建物跡である。ピットの現状での規模は上縁径40～66cm，深さ20～43.8cmを測り，住居床面での標高は，ＳＩ－07の土層図より観察すると，56.75ｍを測る。

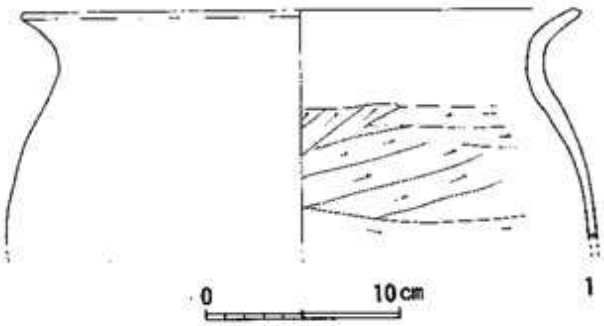


第55図　SB－09実測図



第56図　SB－10 実測図

出土遺物としては，床面上にあたる暗褐色土層より，土師器の甕口縁部（第57図１）が出土している。



第57図　SB－10 出土遺物実測図

SB－10 出土遺物（第57図）

甕形土器（１）　外反する口縁部とで肩の体部を持つもので，口径は復元で28.9cmを測る。調整は，口縁部が横ナデ，体部内面にヘラケズリを施す。

SB－11（第59図）

第Ⅱ調査区の西側，台地状の場所で検出された掘立柱建物跡であるが，北西側のピットは後世の掘削のため検出されなかった。現存する梁２間は4.2ｍを測り，ピットの現状での規模は，上縁径48～80cm，深さ10.7～73.9cmを測る。建物の南東から北東にかけては，幅1.2～6.8cm，深さ6.7～50cmを測るかなり大きな溝（SD－04）が周っている。

出土遺物としては，SD－04より土師器の高坏（第59図１～３），SD－04の覆土の灰黒色土層より甑の把手（４），須恵器の坏底部（５～７）が出土した。

SD－04 出土遺物（第58図）

高坏（１～３）　（１，２）は口縁部が内湾する深い椀形の坏部と，「八」の字状に開く低い脚部を持つものである。（１）の調整は口縁部内面が横方向のハケメ，坏部外面が横ナデ，脚部が横ナデを施し，坏部と脚部の境に指頭圧痕が残る。法量は口径13.3cm，脚径10.0cm，器高8.0cmを測る。（２）の調整は，坏部外面が横ナデ，口縁部内外面と脚部内外面にハケメを施す。法量は口径14.4cm，脚径10.1cm，器高9.3cmを測る。（３）は外傾する坏部の外面に段を有し，開き気味の脚筒部から端部に向かって更に開く脚を持つもので，法量は口径13.5cm，脚径6.9cm，器高10.7cmを測る。調整は，風化がひどいが，坏部外面と坏底部内面の一部にハケメを観察することができる。

甑（４）　甑把手の破片であり，調整はナデの痕跡が著しい。

須恵器坏（５～７）　５～７は坏底部の破片である。（５）は回転糸切り後，高台が貼り付けられ，高台径8.5cmを測る。（６）の切離しには回転糸切り，（７）は静止糸切りが行われている。

SB－12（第60図）

第Ⅱ調査区の北側，北西向きの緩斜面で検出された一辺 2 × 2.3 mを測る，1 × 1間の掘立柱建物跡である。ピットの現状での規模は，上縁径37～45cm，深さ25.3～41cmを測る。

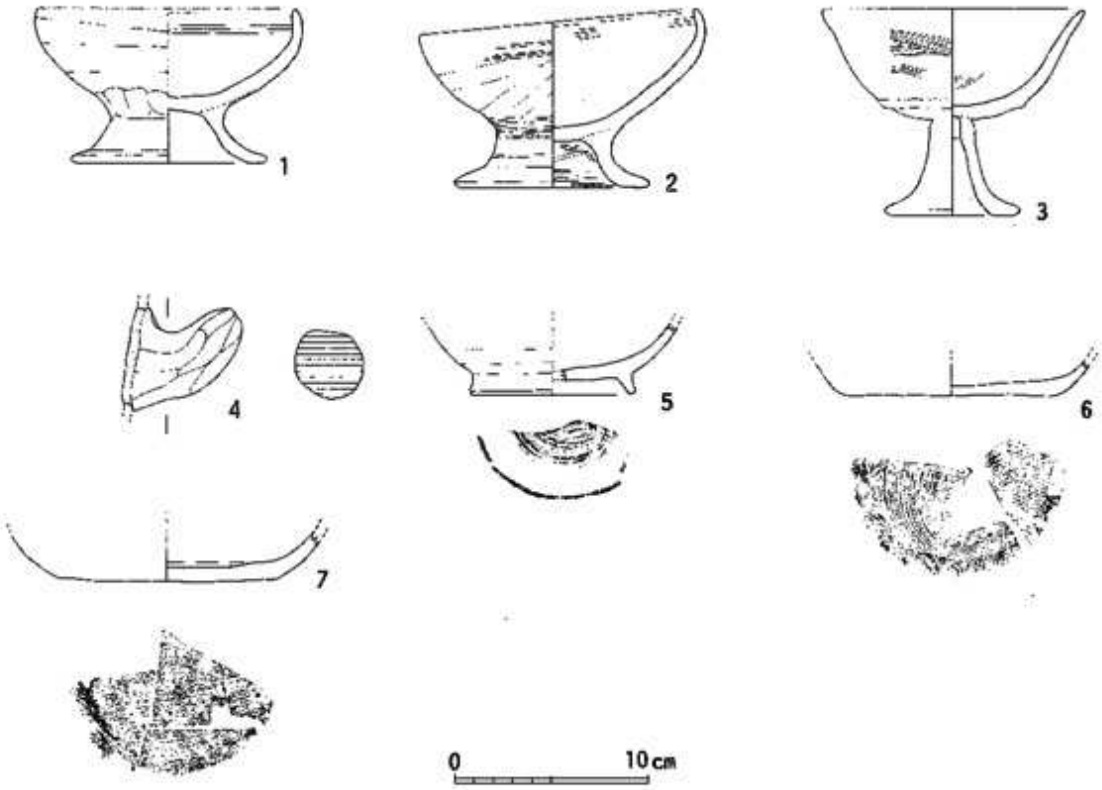
SB－13（第60図）

第Ⅱ調査区の北側，北西向きの緩斜面で検出された一辺 2～2.35 mを測る，1 × 1間の掘立柱建物跡である。ピットの現状での規模は，上縁径38～49cm，深さ19～38.8cmを測る。

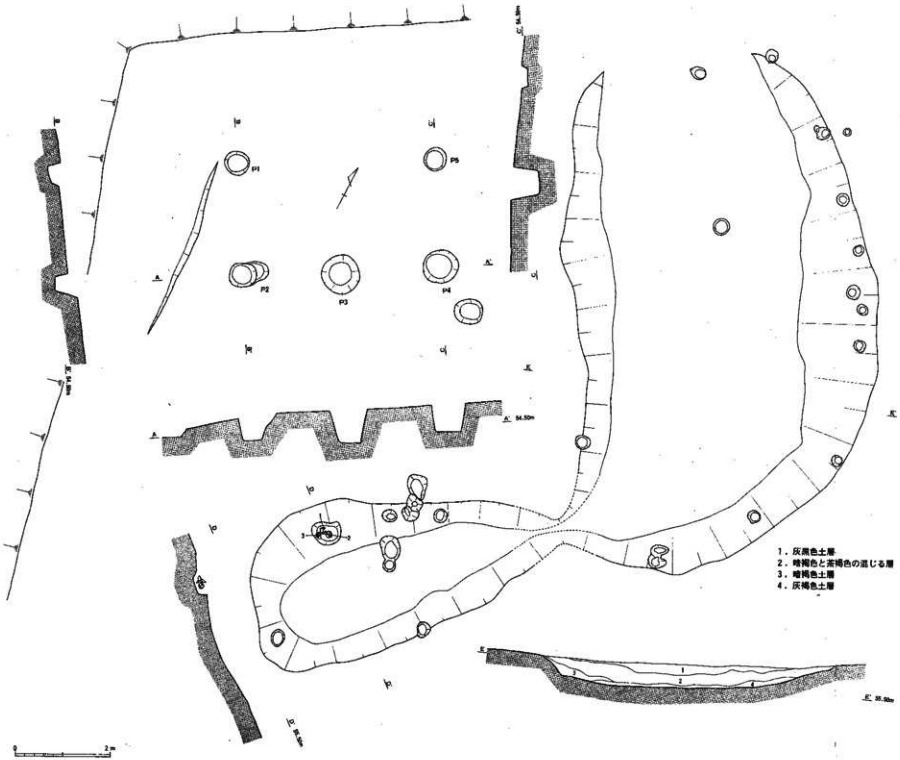
立地を観察すると，SB－12 の南側に位置し，主軸を同一方向に合わせる。

SB－14（第61図）

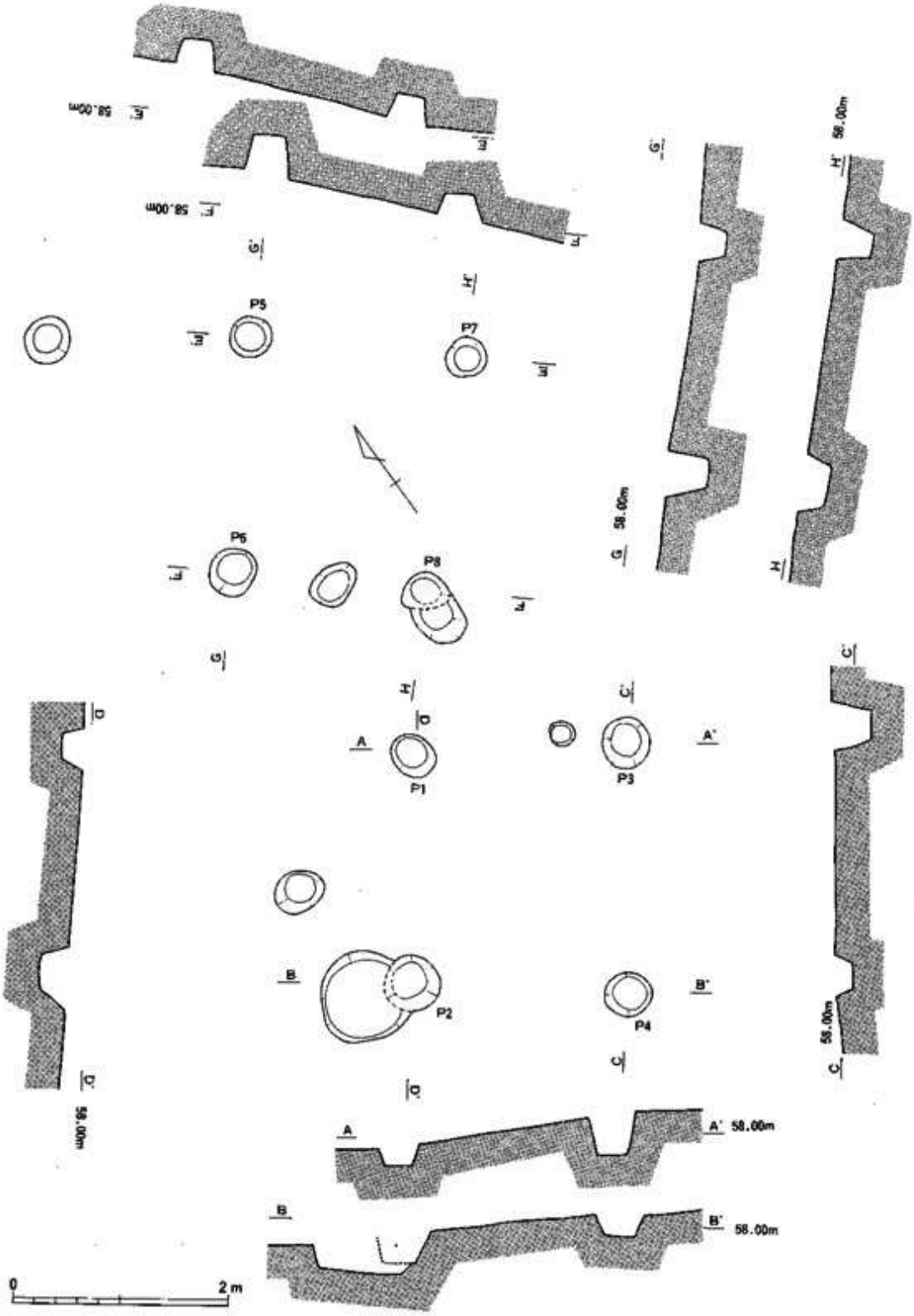
第Ⅱ調査区の北東側，北西向きの緩斜面で検出された長辺 7.1 m，短辺 4.6 mを測る，3 × 2間の掘立柱建物跡である。ピットの現状での規模は，上縁径で 0.38 ～ 2.15 m，深さ 21.5 ～ 67.5 cmを測る。ピットの埋土は，暗灰色土層と赤褐色土層（地山の土）が混ざり合った層であった。この埋土は軟らかい層であり，新しい時代の建物である可能性も考えられる。



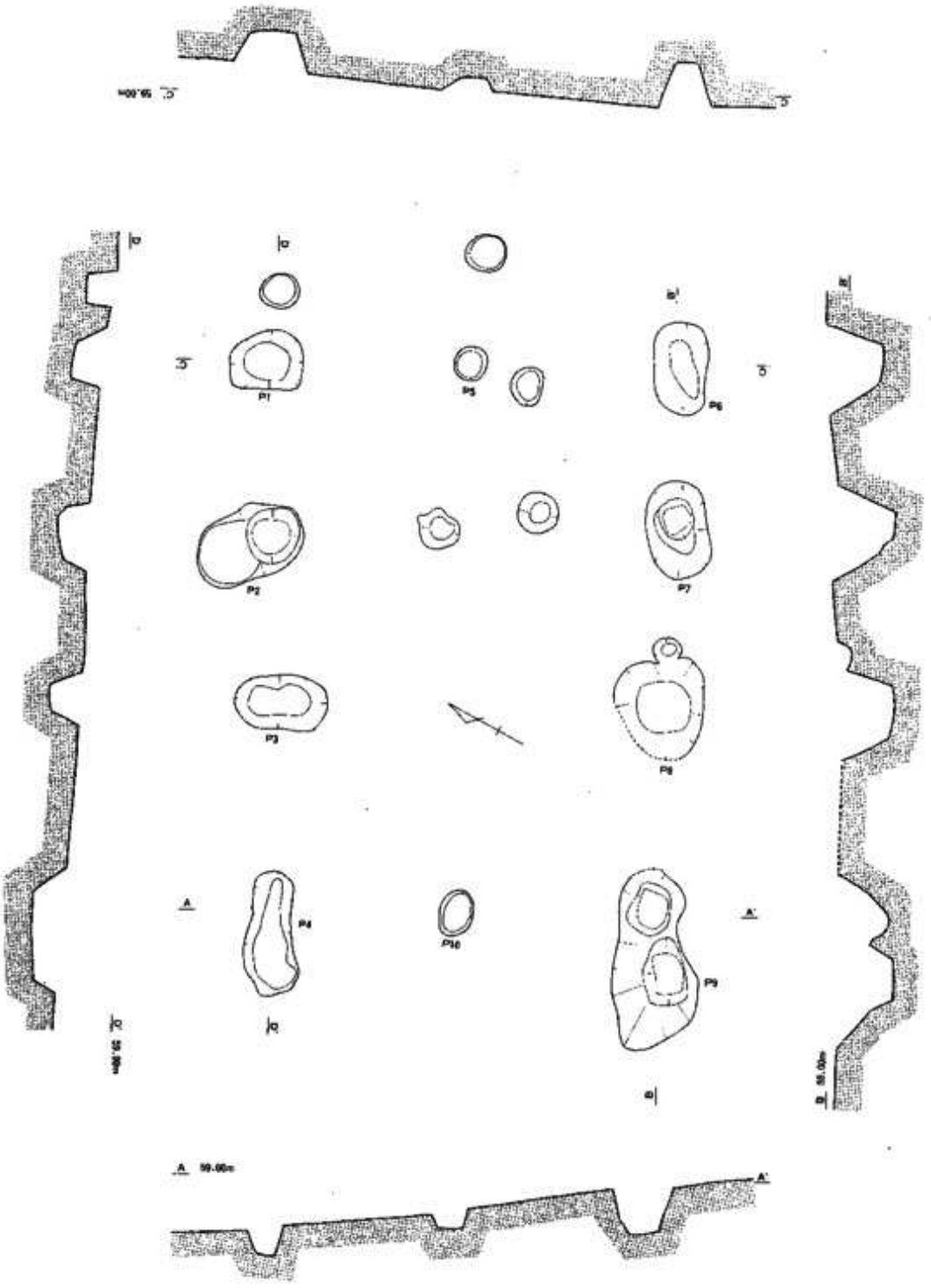
第58図　SD－04 出土遺物実測図



第59図　SB－11，SD－04 実測図



第60図　SB－12，SB－13実測図



第61図　SB－14実測図

SK－06（第62図）

ＳＩ－06の南側，ＳＤ－01と切り合う形で位置している土壙墓であり，新旧関係はＳＤ－01（古）、ＳＫ－06（新）である。

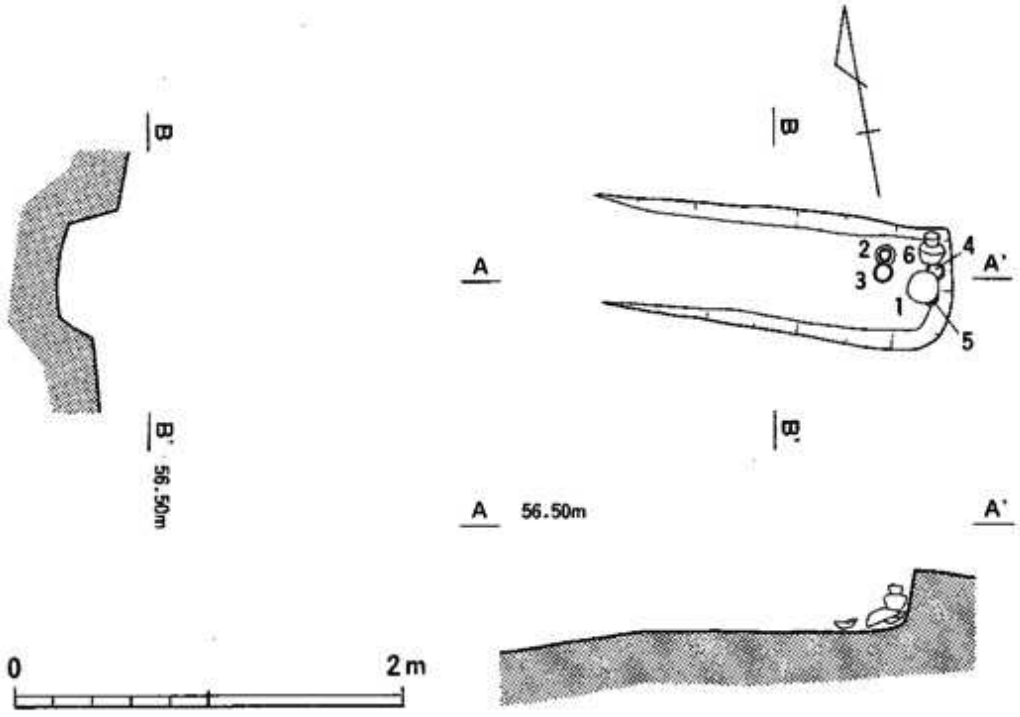
土壙は，平面形は長方形を呈しているが，西側の壁は斜面下となるため検出されなかった。主軸は東西に合わせ，長辺180㎝，短辺60㎝，壁高最大27.8㎝を測る。

出土遺物としては東側隅より須恵器の長頸壷（第63図６），蓋坏（２～５），螺旋状の暗紋を施した土師器の椀（１）が，ほぼ完形で出土している。蓋坏のセット関係は，２（蓋）－３（坏身），４（蓋）－５（坏身）であり，蓋は裏返しの状態で検出された。

SK－06出土遺物（第63図）

椀形土器（１）　平坦な底から丸みを持って立ち上がるもので，口径17.1㎝，器高5.9㎝を測る。調整は体部外面は風化のため不明であるが，底部外面にヘラケズリ，内面に螺旋状の暗紋，体部内面に放射状の暗紋と螺旋状の暗紋を施す。

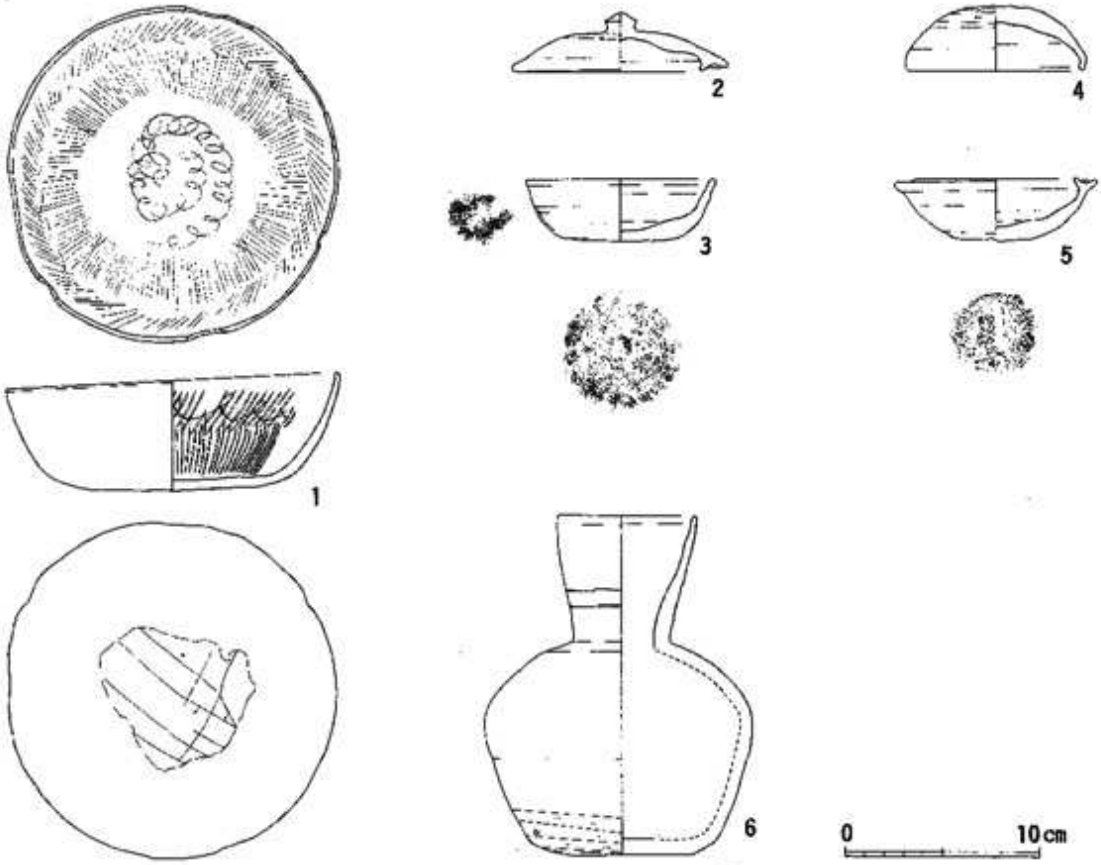
蓋坏（２～５）　（２）は頂部に宝珠つまみを持ち，縁端部内面に返りを付けるもので，口径10.9㎝，器高3.0㎝を測る。調整は，天井部外面が回転ヘラケズリ，天井部内面がナデ，その他は



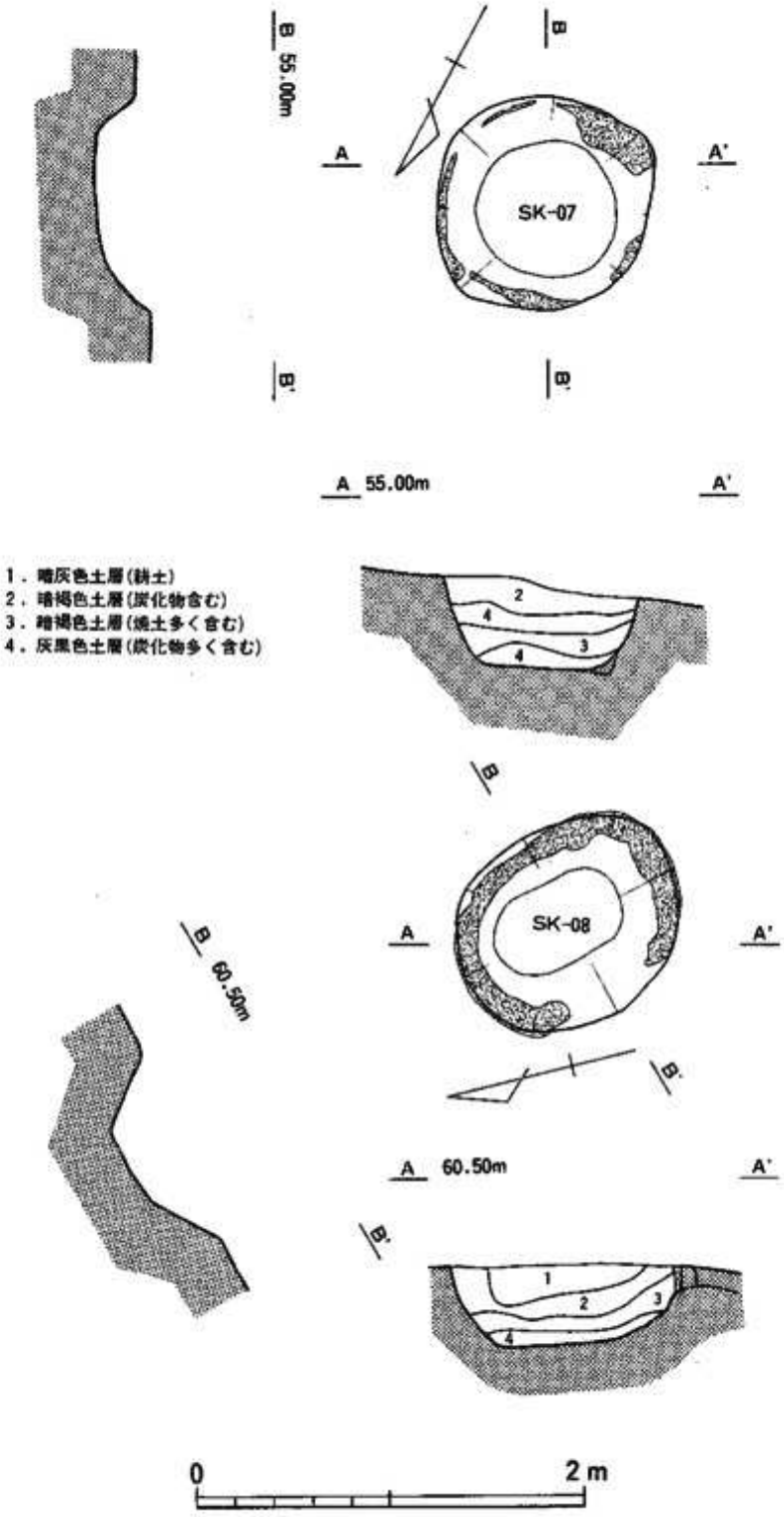
第62図　SK－06実測図

回転ナデを施す。（3）は平坦な底部と，外傾する口縁を持つもので，口径 9.2 cm，器高 3.2 cm を測る。底部外面がヘラオコシ，その他には回転ナデが施され，体部と底部にヘラ記号がある。（4）は頂部と縁部の境が不明瞭で，口縁端部が内湾するものである。法量は口径 9.1 cm，器高 3.4 cm を測る。天井部外面がヘラオコシ，天井部内面がナデ，その他は回転ナデが施される。（5）はやや丸味のある底部と，口縁内面に返りを持つもので，口径 10.4 cm，器高 3.3 cm を測る。底部外面がヘラオコシ，底部内面がナデ，その他は回転ナデを施し，底部外面にヘラ記号状の痕がある。時期はいずれも山陰地方の須恵器編年第Ⅳ期にあたる。[註2]

長頸壺（6）　底部は平坦で，肩部はよく張り，頸部から口縁部に向かって緩やかに広がるもので，口径 7.1 cm，底形 7.5 cm，器高 17.5 cm を測る。調整は底部外面が回転ヘラケズリ，その他は回転ナデが施され，頸部から口縁部の間に浅い二条の沈線がある。



第63図　SK－06 出土遺物実測図

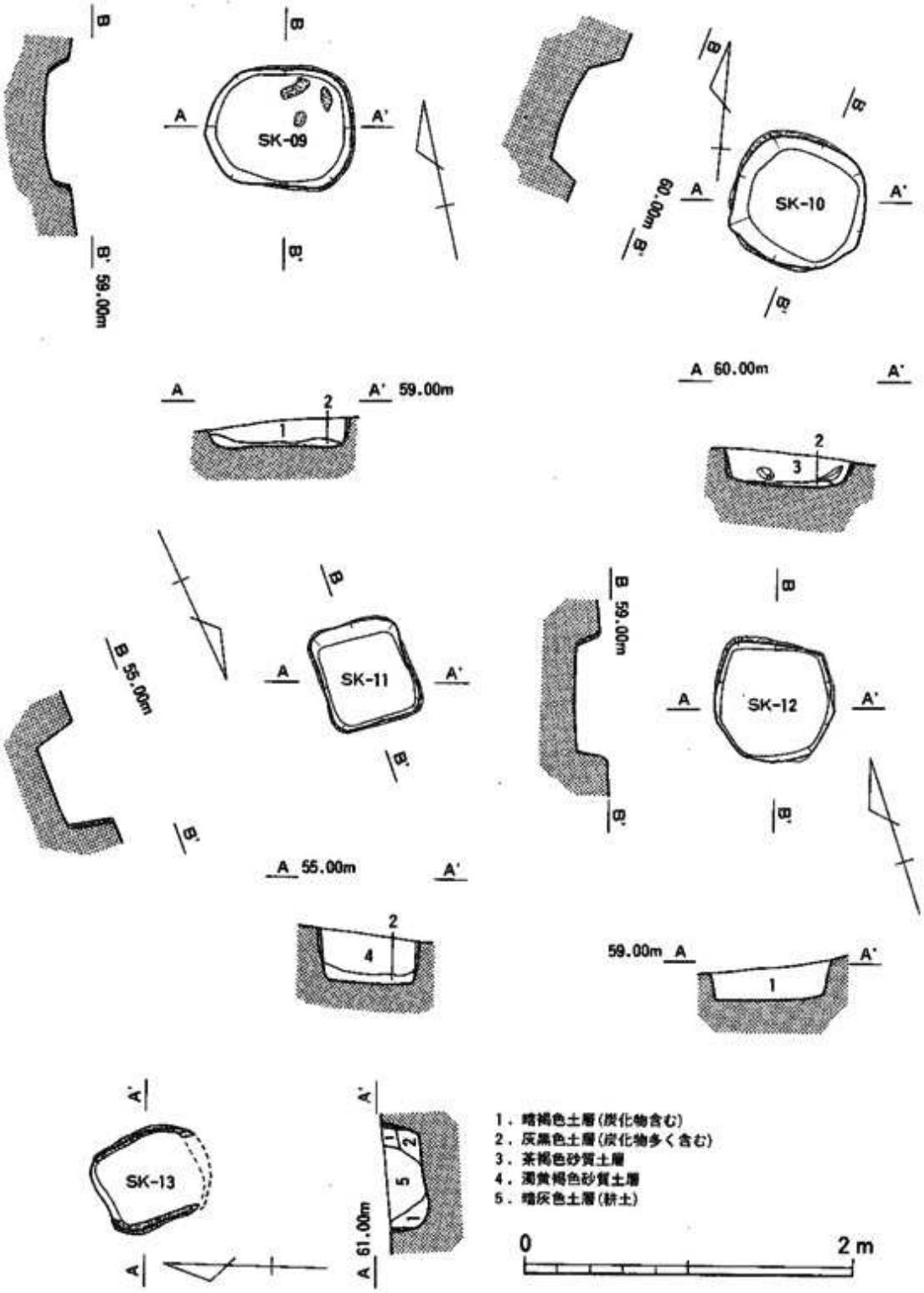


第64図　第Ⅱ調査区土坑実測図

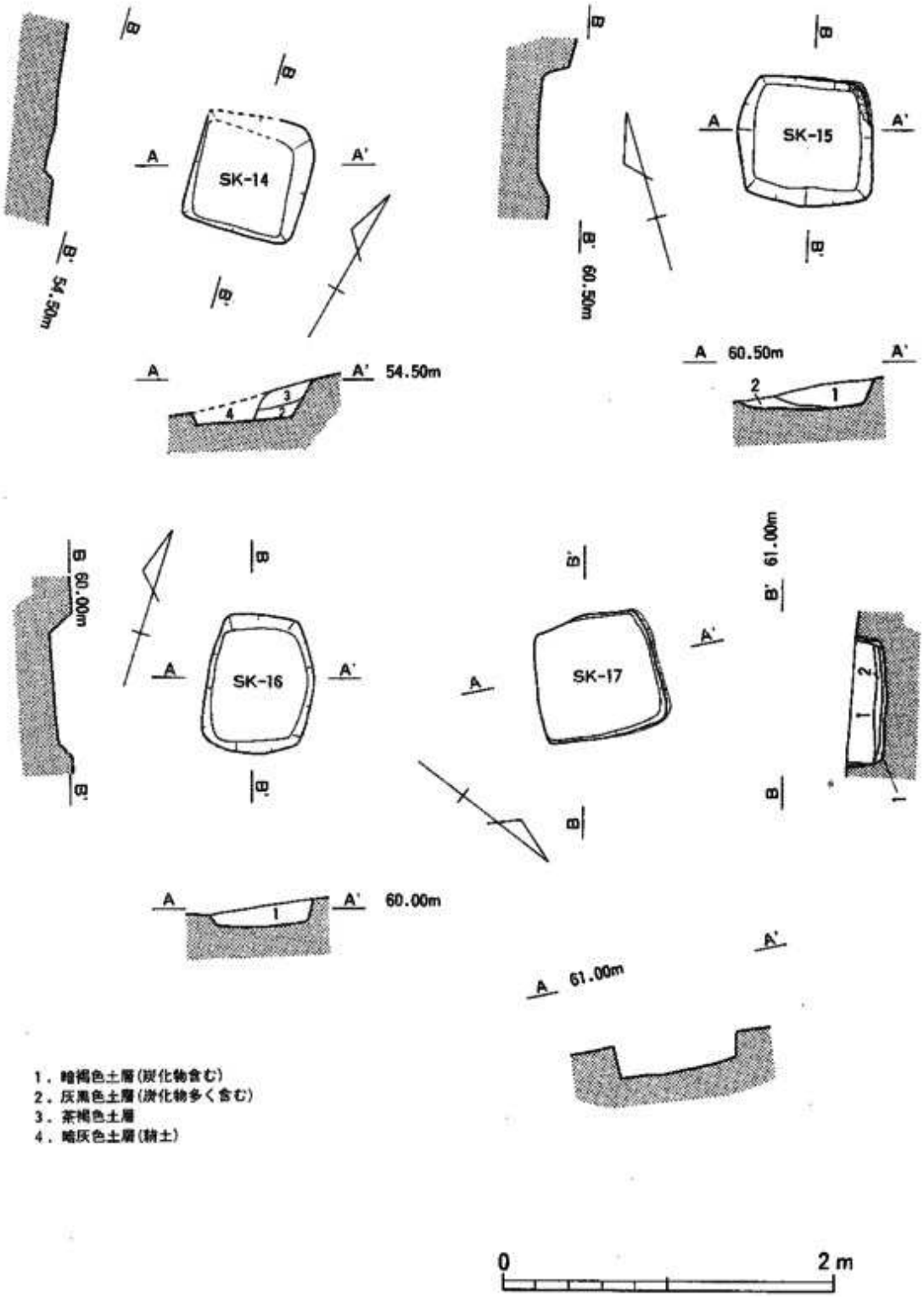
調査Ⅱ区土坑（第64～67図）

熱を受けた土坑（SK－07～17）　調査Ⅱ区ではⅠ区と同様の熱を受けた土坑が11基検出された。平面形で大別すると円形，または楕円形（SK－07，08），隅丸方形（SK－09，10），方形（SK－11～27）に分類できる。いずれの土坑も炭化物を多く含む層が堆積し，壁面も熱を受け赤変しており，炉として使用されたものと考えられる。

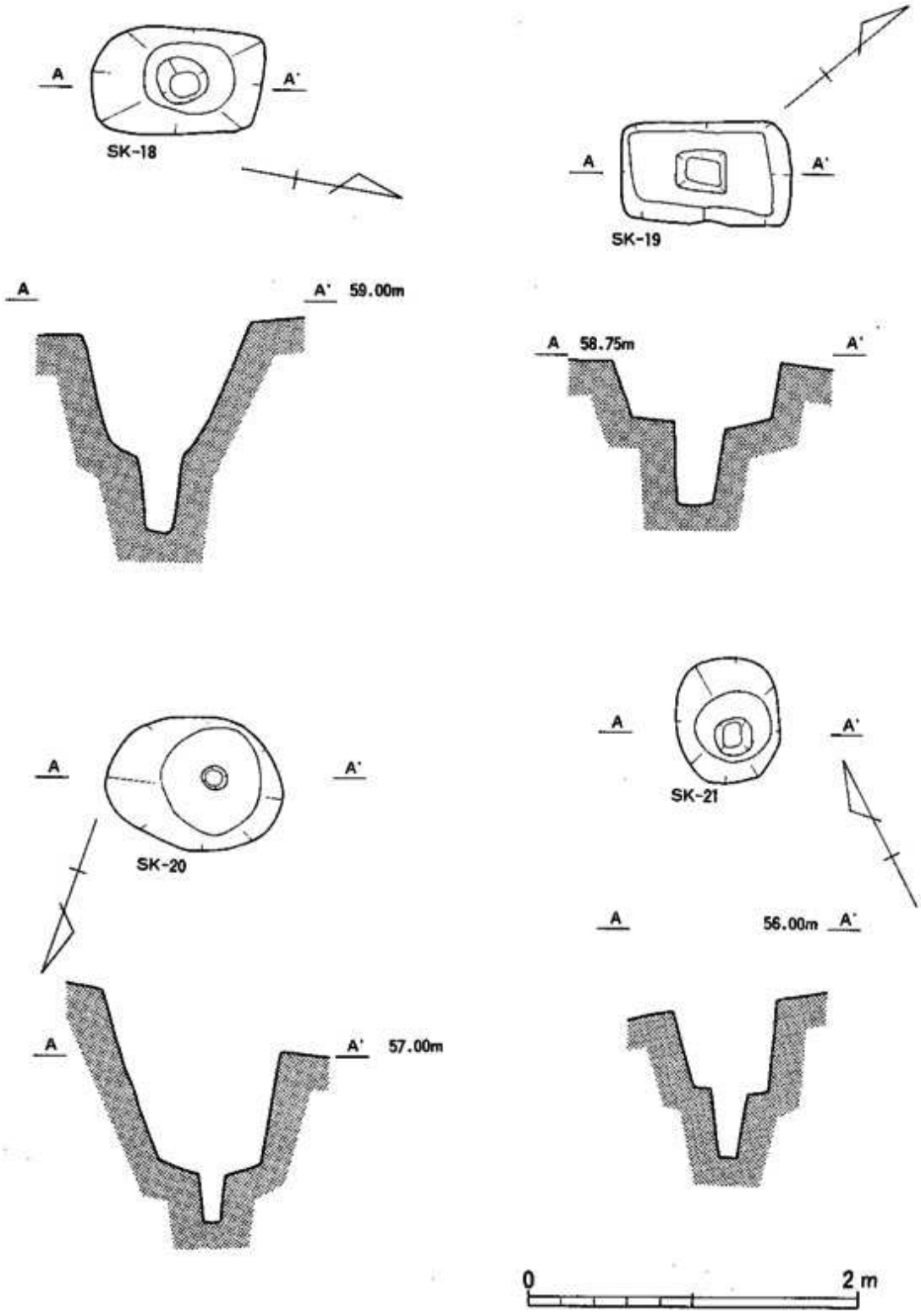
落し穴状の土坑（SK－18～21）　土坑の底部中央に小さな穴を持つもので，4基検出された。中央の穴に槍状の物を差し込み動物を捕獲していたと考えられるが，SK－19は深さも浅く，中央の穴も整った方形であり，落とし穴とは違った性格の可能性も考えられる。



第65図　第Ⅱ調査区土坑実測図



第66図　第Ⅱ調査区土坑実測図

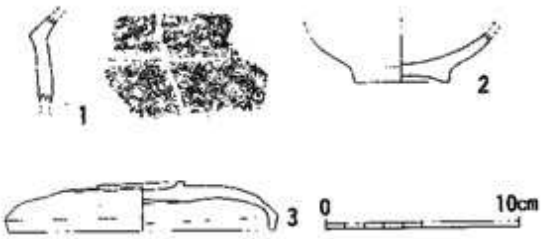


第67図　第Ⅱ調査区土坑実測図

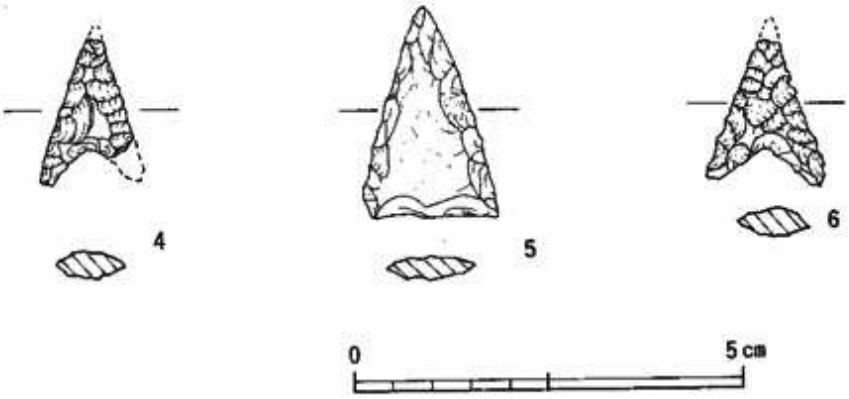
第Ⅱ調査区出土遺物（第68～70図）

（1）は屈曲する胴部を持つ縄文土器・浅鉢の破片であり，B－7区・第1層より出土した。時期は縄文時代晩期前半と思われる。（2）は底部外面に低い高台を持つ低脚坏の破片であり，E－3区・第2層より出土した。（3）は天井部に低い輪状のつまみを付け，口縁端部は下垂する須恵器の蓋で，B－7区のピット中より出土した。

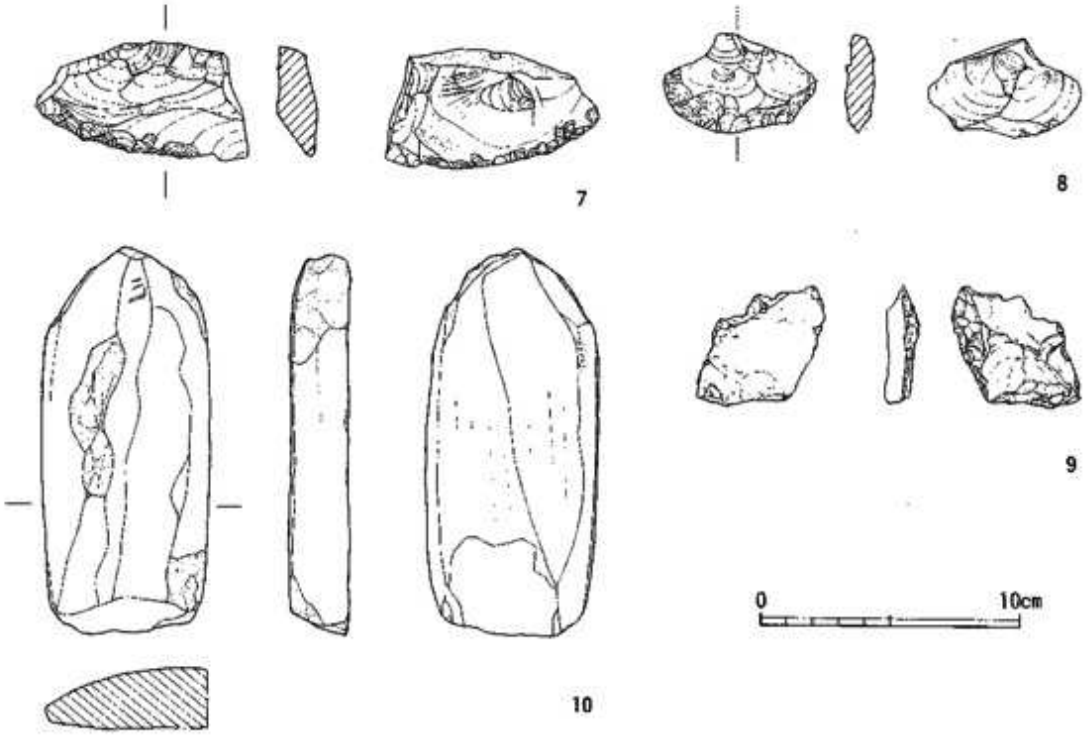
（4～6）は石鏃である。（4，6）は二等辺三角形を呈し，基部が凹むものである。石材は黒曜石製であり，（4）はC－6区・第1層，（6）はB－6区・第1層より出土した。（5）は二等辺三角形を呈するものである。石材はサヌカイト製であり，D－1区・第1層より出土した。重量は，（4）が0.44ｇ，（5）が1.48ｇ，（6）が0.57ｇを測る。（7～9）は石匙と考えられる。（7）は一方に刃部を付け，両面より細かな二次調整を行うもので，石材は黒曜石製，重量68.37ｇを測る。C－5区・地山直上より出土した。（8）はつまみ状に加工された部分を一方に持ち，もう一方に刃部を付ける。刃部は片面のみ細かな二次調整を行うもので，石材は黒曜石製，重量19.8ｇを測る。E－4区・第1層より出土した。（9）は，白色の硬質の石材を用いた削器である。素材は長幅比1：1程度の剥片で，背面には同方向の剥離面が数面みられる。背面の下縁には底面らしき面が確認できるため，剥片素材の石核であったものと推測される。背面の右側縁には腹面からの加工により刃部が形成され，右側縁には刃こぼれ状の剥離が見られる。下縁は，背面から2回，腹面から1回のやや大きな剥離により，裁ち切るように加工されている。打面は複数の面で構成されている。C－5区・第3層より出土した。（10）は断面が三角形を呈する砥石であり，全面が使用されているもので，重量365ｇを測る。D－5区・第1層より出土した。



第68図　第Ⅱ調査区出土遺物実測図



第69図　第Ⅱ調査区出土遺物実測図



第70図　第Ⅱ調査区出土遺物実測図

註

(1) 石器（20）の掻器については丹羽野裕氏の御教示を得た。

(2) 山本　清「山陰の須恵器」『山陰古墳文化の研究』所収　1971年

(3) 石器（9）の削器については丹羽野裕氏の御教示を得た。

V　小　　結

折原上堤東遺跡は，弥生後期から奈良時代に及ぶ集落跡であり，Ⅰ・Ⅱ区の隣接する丘陵斜面において，竪穴住居跡10棟（建て替えも含む），掘立柱建物跡14棟，加工段１段，土坑（壙）24基と多数のピットを検出した。

竪穴住居跡は，Ⅱ区の弥生時代後期末から古墳時代前期初頭にかけてのものと，Ⅰ区の古墳時代中期のものとの２時期に大別される。これらの住居の平面プランは，前者のＳＩ－08が隅丸方形，ＳＩ－06・07・09・10が隅丸多角形であり，後者のＳＩ－01～03が方形，ＳＩ－04・05は全容は不明だが，方形を呈する。

前者の住居には，いずれも中央ピットが設けられ，中央ピット内からは炭化物が多く検出された。ＳＩ－06・07は丘陵高所側に溝を周らせており，貼り床を確認した。これらの規模をみると他に比べ突出して大きい住居で，ＳＩ－07は床面積が50㎡を越えるものである。この時期の大型住居としては，横田町国竹遺跡[註1]，安来市越峠遺跡[註2]，鳥取県西伯町竹山遺跡[註3]等で確認されている。

古墳時代中期の住居跡ＳＩ－01～03は方形プランで主柱穴が４本という構造であり，壁下には特殊ピットが設けられていた。ＳＩ－04・05も方形を呈すると思われるが，主柱穴が明確なものではなかった。出土遺物で注目されるのは，焼失住居であるＳＩ－02床面出土の臼玉45個と，ＳＩ－03黒褐色土層出土の有孔円板４個である。いずれも祭祀遺物と考えられ，これらの住居は集落内祭祀に関係した遺構と推定される。

掘立柱建物跡は古墳時代中期から奈良時代にかけてのもの４棟（ＳＢ－01・02・06・10）時期不明のもの10棟を検出した。ＳＢ－01・02・06の立地を観察すると，それぞれ丘陵斜面をカットし，平坦面を造り出して建物を建てている。

土坑（壙）は，土壙墓（ＳＫ－06），落し穴状の土坑，熱を受けた土坑，その他不明に大別することができる。土壙墓は，ＳＤ－01と切り合う形で検出された長方形プランを呈するものである。副葬品として須恵器の長頸壺，蓋坏２セットと供に，畿内から搬入されたと考えられる螺旋状の暗紋を施した土師器の椀１個が出土している。これらより７世紀中頃のものと思われる[註4]。

以上，折原上堤東遺跡について概観したが，八雲村で古代の集落跡が発掘されたのは初めてであり，集落の構造の一端が把握される一方，村内に多く分布する古墳，横穴との関係で貴重な資料になるものと考える。

註

(1)　横田町教育委員会　『国竹遺跡発掘調査結果』　1987年

(2)　島根県教育委員会　「越峠遺跡・宮内遺跡」『一般国道９号（安来道路）建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅳ』　1993年

(3)　西伯町教育委員会　『竹山遺跡現地説明会資料』　1994年

(4)　古代の土器研究会　『第２回シンポジウム、古代の土器研究＝律令的土器様式の西・東２須恵器＝』　1993年

第2表　折原上堤東遺跡遺構推移表

時　　代	竪穴住居跡	掘立柱建物跡	その他の遺構
弥生時代（後期）	SI－09（隅丸多角形） SI－10（隅丸多角形） SI－06（隅丸多角形） SI－07（隅丸多角形） SI－08（隅丸方形）		
古墳時代（前期）			
（中期）	SI－01（方　形） SI－02（方　形） SI－03（方　形） SI－04（方　形） SI－05（方　形）	SB－01（1×2間） SB－02（2×　間） SB－06（2×3間）	SI－03 黒褐色土層（祭祀跡）
（後期）		SB－10（2×2間）	SD－04 土壙墓（SK－06）
奈良時代			SK－01 SK－04 加工段

第3表　折原上堤東遺跡竪穴住居一覧表

挿図番号	遺構名	平面形	長辺×短辺×最大壁高(m)	側溝幅－深さ(cm) 最大	主柱穴数	焼土	特殊ピット位置	図版番号	備考
5	SI－01	方形	6.3×5.4×0.45	15－7	4	有2ケ所	東壁下	2	
6	SI－02	方形	4.1×4.1×0.61	10－7	4	有2ケ所	南東壁下	3	焼失住居
9	SI－03	方形	5.8×　×0.57	17－7.7	4	有2ケ所	東壁下	4	
16	SI－04	方形	6.4×　×0.24		?	有1ケ所		5	
18	SI－05	方形	3.5×　×0.28		?	有1ケ所		6	
43	SI－06	隅丸多角形	7.8×　×0.70	15－6.5	7	有4ケ所	中央	13	拡張(SI－09)
45	SI－07	隅丸多角形	8.8×　×0.25	25－5	8		中央	14	拡張(SI－10)
50	SI－08	隅丸方形	5.5×　×0.49	10－4	4		中央	14	
43	SI－09	隅丸多角形	6.9×　×0.11		6		中央	15	
45	SI－10	隅丸多角形	7.1×　×0.17	20－5.5	6	有2ケ所	中央	14	

第4表　折原上堤東遺跡掘立柱建物一覧表

挿図番号	遺構名	梁間×桁行	梁間×桁行(m)	主軸方向	図版番号	備考
20	SB－01	1×2間	2.2×4.1	N－60°－W	6	
23	SB－02	2×　間	4.2×	N－7°－E	7	
24	SB－03	2×3間	3.5×5.0	N－48°－W	7	
24	SB－04	2×3間	4.0×6.4	N－43°－W	7	
25	SB－05	2×2間	2.3×2.7	N－63°－W	8	総柱
26	SB－06	2×3間	2.7×4.1	N－66°－W	8	
53	SB－07	2×3間	3.2×3.8	N－13°－W	15	
54	SB－08	2×3間	4.0×5.2	N－29°－W	16	
55	SB－09	2×3間	3.1×4.2	N－12°－W	16	
56	SB－10	2×2間	3.5×4.6	N－22°－W	17	
29	SB－11	2×　間	4.2×	N－60°－E	17	
60	SB－12	1×1間	2.0×2.2	N－50°－W	19	
60	SB－13	1×1間	2.0×2.2	N－55°－W	20	
61	SB－14	2×3間	4.6×7.1	N－62°－E	20	

第5表　折原上堤東遺跡土坑（壙）一覧表

挿図番号	遺構番号	平面形	区	上面 長軸×短軸	深さ	出土遺物	遺物挿図番号	備考
32	SK－01	方形	H－3	100×100	36	須恵器・土師器	33	焼土あり
34	SK－02	楕円形	K－6	80×88	28			焼土あり
36	SK－03	不整楕円形	I－3	99×91	19.8			焼土あり
32	SK－04	円形	I－3	190×166	28.7	土師器	35	溝あり
32	SK－05	不整楕円形？	J－5	105×80	51	石鏃	37	
62	SK－06	方形	D－6	180×60	27.8	須恵器・土師器	63	土壙墓
64	SK－07	円形	C－7	123×110	47.5			焼土あり
64	SK－08	楕円形	C－3	124×102	33.5			焼土あり
65	SK－09	隅丸方形	D－4	85×64	16			焼土あり
65	SK－10	隅丸方形	E－3	82×77	18			焼土あり
65	SK－11	方形	F－5	65×56	34.5			焼土あり
65	SK－12	不整方形	E－3	76×74	24.8			焼土あり
65	SK－13	方形？	C－3	70×58	31.2			焼土あり
65	SK－14	方形	B－7	72×70	20.7			焼土あり
65	SK－15	方形	B－3	82×77	18			焼土あり
65	SK－16	方形	C－4	84×64	16			焼土あり
65	SK－17	方形	C－3	76×75	25.6			焼土あり
67	SK－18	隅丸方形	D－4	103×64	124.9			落とし穴
67	SK－19	方形	D－4	103×61	92.9			落とし穴？
67	SK－20	楕円形	E－5	108×81	141			落とし穴
67	SK－21	楕円形	D－6	77×63	95.8			落とし穴
54	SK－22	楕円形	D－4	140×103	74			
44	SK－23	方形	D－5	124×70	34.6			
44	SK－24	不整方形	E－5	124×110	17.1			

第6表　折原上堤東遺跡土器観察表

挿図番号	図版番号	出土地点	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	形態の特徴	手法の特徴	胎土	焼成	備考
4図1	24	SI－01	甕	13.5			口縁部はやや内湾気味に立ち上がる	口縁部内面：ヨコナデ 口縁部外面：風化	0.5～3㎜の砂粒含む	良	
4図2	24	SI－01	甕	17.2			単純口縁を有し、端部で平坦面をなす	口縁部内外面：ヨコナデ	1㎜未満の砂粒含む	良	
4図3	24	SI－01	甕	17.8			「く」の字に屈曲する口頸部。口縁部は外傾し、端部は平坦	口縁部内外面：ヨコナデ	1㎜未満の砂粒含む	良	
4図4	24	SI－01	丸底壺	10.5		13.0	外反する口縁。良く張った球形の体部と丸底	口縁内外面：ヨコナデ 底部外面：ハケメ 体部内面：ヘラケズリ	2㎜大の砂粒含む	良	体部外面にすす付着
4図5	24	SI－01	高坏坏部	16.6	12.9		坏部外面に段をもち、大きく外傾し口縁に至る	坏内部底面：ハケメとミガキ 坏外部底面：ハケメ	2㎜以下の砂粒含む	良好	内外面に放射状の暗紋
4図6	24	SI－01	高坏脚部	16.6	12.9		やや開いた脚筒部よりさらに「八」の字状に広がる	筒部内面：ヘラケズリ 脚部外面：ヨコナデ	2㎜以下の砂粒含む	良好	4図－5と同一個体
4図7	24	SI－01	高坏		7.5		「ハ」の字状に広がる低い脚をもつ	風化	3㎜大の砂粒含む	良	
4図8	24	SI－01	甕	14.5			「く」の字に屈曲する口頸部。外傾する単純な口縁	口縁内外面：ヨコナデ・一部ハケメ 体部外面：荒いハケメ 体部内面：ヘラケズリ	2㎜以下の砂粒含む	良	表面に凸凹あり
4図9	24	SI－01	甕	18.0			「く」の字に屈曲する口頸部。口縁部は外傾し、端部は平坦	口縁内外面：ヨコナデ	1㎜以下の砂粒含む	良好	
4図10	24	SI－01	小型丸底壺				球形の体部と丸底	外面：荒いハケメ 内面：指頭圧痕残る	1㎜以下の砂粒含む	良好	作りが雑
4図11	24	SI－01	高坏		8.8		脚端部にかけて大きく開く	風化	3㎜大の砂粒含む	良	
8図46	25	SI－02	甕	18.0			「く」の字に屈曲する口頸部。肩部は良く張り、外傾する口縁をもつ	外面：風化 口縁内面：ヨコナデ 体部内面：ヘラケズリ	1㎜以下の砂粒含む	良	
8図47	25	SI－02	小型丸底壺				良く張った球形の体部と丸底をもつ	外面：ハケメ 内面：タテハケメ	0.5㎜大の砂粒含む	良	
10図1	25	SI－03	甕	16.4			「く」の字に屈曲する口頸部。体部は良く張り、外傾する口縁をもつ	口縁内外面：ヨコナデ 体部外面：ハケメ 体部内面：ヘラケズリ	3㎜以下の砂粒含む	良	
10図2	25	SI－03	丸底壺	9.2		15.7	複合口縁の名残を残す口縁。球形の体部、丸底	口縁内外面：ヨコナデ 外面：ハケメ 内面：ヘラケズリ	2㎜以下の砂粒含む	良	内部に炭化物付着
10図3	25	SI－03	甕	16.8			外傾する短い複合口縁をもち、端部は平坦、稜は鈍い	口縁内外面：ヨコナデ	密	良	

挿図番号	図版番号	出土地点	器種	法量cm 口径	底径	器高	形態の特徴	手法の特徴	胎土	焼成	備考
10図4	25	SI−03	高坏	22.6			大きく外傾する口縁 坏部外面に段を有する	坏部外面：ヨコナデ ミガキ 坏部内面：ヨコナデ	密	良好	
10図5	25	SI−03	高坏	20.0	10.0	12.9	坏部外面に段をもち、大きく外反する口縁を有す。「八」の字に開く脚部	坏外面底部：ミガキ 口縁内外面：ヨコナデ 脚内部：ヘラケズリ	1mm以下の砂粒含む	良好	坏部内面に放射状の暗紋
11図6	26	SI−03	甕	16.4			外傾する短い複合口縁を持ち、端部は平坦。突出部は鈍く、下ぶくらみ	口縁内外面：ヨコナデ 体部外面：ハケメ 体部内面：ヘラケズリ	1mm以下の砂粒含む	良	
11図7	26	SI−03	甕	15.3			退化した複合口縁、稜は鈍い	口縁内外面：ヨコナデ 体部外面：タテハケメ 体部内面：ヘラケズリ	1mm以下の砂粒含む	良	
11図8	26	SI−03	甕	18.4			退化した複合口縁、稜は鈍い	口縁内外面：ヨコナデ	0.5mm大の砂粒含む	良	
11図9	26	SI−03	甕	19.1			外傾する短い複合口縁をもち、端部は平坦	口縁内外面：ヨコナデ	1mm以下の砂粒含む	良好	
11図10	26	SI−03	甕	14.8			退化した複合口縁、稜は鈍い	口縁内外面：ヨコナデ	1mm以下の砂粒含む	良	
11図11	26	SI−03	甕	16.2			退化した複合口縁、稜は鈍い	口縁内外面：ヨコナデ	0.5mm以下の砂粒含む	良	
11図12	26	SI−03	甕	15.7			外傾する短い複合口縁を持ち、端部は平坦。稜は鈍い	口縁内外面：ヨコナデ	0.5mm以下の砂粒含む	良	
12図13	26	SI−03	甕	10.8			「く」の字に屈曲する口頸部	口縁内外面：荒いハケメ 体部外面：荒いハケメ 体部内面：ヘラケズリ	0.5mm以下の砂粒含む	良	
12図14	26	SI−03	壺	13.3			直立する短い口縁	口縁内面：ハケメ 口縁外面：ヨコナデ 体部内面：ヘラケズリ 体部外面：ハケメ	0.5mm以下の砂粒含む	良	
12図15	26	SI−03	壺	10.4			直立する短い口縁	口縁内外面：ヨコナデ 体部内面：ヘラケズリ 体部外面：ハケメ	1mm以下の砂粒含む	良	
12図16	26	SI−03	甕	17.0			口頸部は緩く外反し、胴部があまり張り出さない	口縁内外面：ヨコナデ 体部内面：ヘラケズリ 体部外面：ハケメ	0.5mm以下の砂粒含む	良	
12図17	26	SI−03	甕	13.4			「く」の字に屈曲する口頸部	口縁内面：ヨコナデ 体部内面：ヘラケズリ 体部外面：ハケメ	2mm以下の砂粒含む	良	
12図18	26	SI−03	甕	11.6			直立する短い口縁を持ち、端部は外傾する	口縁内外面：ヨコナデ	3mm以下の砂粒含む	良	
12図19	26	SI−03	甕	18.6			口縁部は強く反る 器肉は厚い	口縁外面：ハケメ 口縁内面：ヨコナデ ハケメ 体部内面：ヘラケズリ	0.5mm以下の砂粒含む	良	

挿図番号	図版番号	出土地点	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	形態の特徴	手法の特徴	胎土	焼成	備考
12図20	26	SI−03	甕	19.2			「く」の字に屈曲する口頸部	口縁内外面：ヨコナデ 体部内面：ヘラケズリ 体部外面：ハケメ	1mm以下の砂粒含む	良好	
12図21	26	SI−03	甕	15.6			口縁部は強く反る、器肉は厚い	口縁内外面：ヨコナデ	0.5mm以下の砂粒含む	良	
12図22	27	SI−03	甕	22.5			「く」の字に屈曲する口頸部	口縁内外面：ヨコナデ 体部内面：ヘラケズリ 体部外面：ハケメ	3mm以下の砂粒多く含む	良	
12図23	27	SI−03	甕	21.0			「く」の字に屈曲する口頸部	口縁内外面：ヨコナデ 体部内面：ヘラケズリ 体部外面：ハケメ	0.6mm以下の砂粒含む	良	
12図24	27	SI−03	甕	18.5			「く」の字に屈曲する口頸部	口縁内外面：ヨコナデ 体部内面：ヘラケズリ	0.5mm以下の砂粒含む	良	
12図25	27	SI−03	甕	19.0			「く」の字に屈曲する口頸部	口縁内面：ハケメ 口縁外面：ヨコナデ 体部外面：ハケメ 体部内面：ヘラケズリ	1mm以下の砂粒含む	良好	
12図26	27	SI−03	甕	17.6			「く」の字に屈曲する口頸部	口縁内外面：ヨコナデ 体部内面：ヘラケズリ 体部外面：ハケメ	0.6mm以下の砂粒含む	やや不良	表面に凸凹あり
12図27	27	SI−03	甕	13.3			「く」の字に屈曲する口頸部	体部内面：ヘラケズリ	1mm以下の砂粒含む	良	
12図28	27	SI−03	甕	16.7			「く」の字に屈曲する口頸部	体部内面：ヘラケズリ	1mm以下の砂粒含む	やや不良	
12図29	27	SI−03	甕	16.5			「く」の字に屈曲する口頸部	口縁内外面：ヨコナデ 体部内面：ヘラケズリ	密	良	
13図30	27	SI−03	甕	21.5			口縁部は肉厚で、端部内面に段をもつ	口縁内外面：ヨコナデ 体部内面：ヘラケズリ 体部外面：ハケメ	密 1.5mm以下の砂粒含む	良好	
13図31	27	SI−03	甕	18.7			口縁部は肉厚で、端部内面に段をもつ	口縁内外面：ヨコナデ	1.5mm以下の砂粒含む	良好	
13図32	27	SI−03	甕	16.2			口縁部は肉厚、端部は磨滅	口縁内外面：ヨコナデ 体部内面：ヘラケズリ 体部外面：ハケメ	0.5mm以下の砂粒含む	良好	
13図33	27	SI−03	甕	16.8			口頸部は外反して伸び、端部近くでより強く反る	口縁内外面：ヨコナデ 体部内面：ヘラケズリ 体部外面：ハケメ	0.5mm以下の砂粒含む	良好	
13図34	27	SI−03	甕	20.0			口頸部は外反して伸び、端部近くでより強く反る	口縁内面：ヨコナデ ハケメ 体部内面：ヘラケズリ	1mm以下の砂粒含む	良好	
13図35	27	SI−03	高坏	16.0	9.2	9.6	坏部が屈曲し稜をなす	坏底部内面：ハケメ ミガキ 外面：ミガキ 脚部内面：ナデ	1mm以下の砂粒含む	良好	

挿図番号	図版番号	出土地点	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	形態の特徴	手法の特徴	胎土	焼成	備考
13図36	28	SI−03	高坏	15.2	9.8	11.5	坏部が半球形で椀形を呈する。外面に段をもたない	坏底部外面：ハケメ 脚底部内面：ハケメ	密	良好	
13図37	27	SI−03	高坏	14.4			坏部が半球形で椀形を呈する。外面に段をもたない	風　化	0.5㎜以下の砂粒含む	良	
13図38	28	SI−03	高坏	15.2			坏部は外傾し口縁に至る段不明	内外面：ヨコナデ	0.5㎜大の砂粒含む	良	
13図39	28	SI−03	高坏	17.0			坏部は外傾し口縁に至る段不明	外面：ヨコナデ 内面：風化	1㎜以下の砂粒含む	良	
13図40	28	SI−03	高坏	16.4			坏部は外傾し口縁に至る段不明	外面：ヨコナデ 内面：ハケメ	密	良好	
13図41	28	SI−03	高坏	15.9			坏部は外傾し口縁に至る外面に段を有する	風　化	1㎜以下の砂粒含む	良	
13図42	28	SI−03	高坏	17.0			坏部は外傾し口縁に至る外面に段を有する	外面：ヨコナデ 内面：ハケメ	密	良	
13図43	28	SI−03	高坏	16.5			坏部は外傾し口縁に至る外面に段を有する	内外面：ヨコナデ	0.5㎜以下の砂粒含む	良	
13図44	28	SI−03	高坏	15.0			坏部は外傾し口縁に至る外面に段を有する	外面：ヨコナデ 内面：ミガキ	1㎜以下の砂粒含む	良	
13図45	28	SI−03	高坏				丸みを持つ坏底部 外面に段をもたない	坏外面底部：ハケメ 坏内面底部：ミガキ	密	良	
14図46	28	SI−03	高坏	23.5			坏部は大きく外傾し口縁に至る 段不明	外面：ヨコナデ 内面：ハケメ	1㎜以下の砂粒含む	良	
14図47	28	SI−03	高坏	22.2			坏部は大きく外傾し口縁に至る 段不明	風　化	密	良	
14図48	28	SI−03	高坏		8.8		丸みをもつ坏底部と「八」の字に開く脚端部	坏外面底部：ハケメ 坏内面底部：ミガキ	1.5㎜以下の砂粒含む	良	
14図49	28	SI−03	高坏		9.0		やや開き気味の脚筒部から脚端部にかけ、さらに大きく開く	坏外面底部：荒いハケメ 坏内面底部：ミガキ 脚内面底部：ハケメ	密	良好	
14図50	28	SI−03	高坏		10.4		やや開き気味の脚筒部から脚端部にかけ、さらに大きく開く	脚筒部外面：ハケメ	1.5㎜以下の砂粒含む	やや不良	
14図51	28	SI−03	高坏		6.2		丸みをもつ坏底部と「ハ」の字に開く短い脚部	外面：ハケメ、指頭圧痕 脚部内面：ヘラケズリ	2㎜以下の砂粒含む	良	作りが雑

挿図番号	図版番号	出土地点	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	形態の特徴	手法の特徴	胎土	焼成	備考
14図52	29	SI−03	高坏		12.7		やや開き気味の脚筒部から脚端部にかけ、さらに大きく開く	外面：ヘラミガキとナデ 内面：ケズリ・ナデ	密	良	
14図53	29	SI−03	高坏		10.0		やや開き気味の脚筒部から脚端部にかけ、さらに大きく開く	外面：ヘラミガキとナデ 脚筒部内面：ケズリ	密 0.5㎜以下の砂粒含む	良	
14図54	29	SI−03	高坏		11.0		やや開き気味の脚筒部から脚端部にかけ、さらに大きく開く	外面：ヘラミガキとナデ 脚筒部内面：ケズリ	0.5㎜以下の砂粒含む	良	
14図55	29	SI−03	高坏		8.7		やや開き気味の脚筒部から脚端部にかけ、さらに大きく開く	内面：しぼり痕	密	良	
14図56	29	SI−03	高坏		9.4		やや開き気味の脚筒部から脚端部にかけ、さらに大きく開く	脚筒部内面：ケズリ	1㎜以下の砂粒含む	良	
14図57	29	SI−03	坏	10.8			半球形の坏	風　化	3㎜以下の砂粒含む	良	
14図58	29	SI−03	坏	8.4			体部〜口縁部内湾 半球形	風　化	2㎜以下の砂粒含む	良	
14図59	29	SI−03	坏	10.0		4.7	上げ底の底部から外傾気味に立ち上がり、端部は内湾する	内面：ナデ、一部ハケメ、指頭圧痕 外面：ナデ、一部ハケメ	密 1㎜以下の砂粒含む	良	作りが雑
14図60	29	SI−03	須恵器 甕	8.4			口縁部は外傾し、段をもつ。端部に平坦面あり	内外面：ヨコナデ	密	良好	
14図61	29	SI−03	須恵器 壺				胴部の破片	外面：タタキのちナデ 内面：同心円押当具痕の上をナデ	密 0.5㎜以下の砂粒含む	良	
14図62	29	SI−03	須恵器 壺				胴部の破片	外面：タタキのちナデ 内面：同心円押当具痕の上をナデ	密 0.3㎜以下の砂粒含む	良	
14図63	29	SI−03	須恵器 壺				胴部の破片	外面：タタキのちナデ 内面：同心円押当具痕の上をナデ	密 1㎜以下の砂粒含む	良	
14図64	29	SI−03	須恵器 壺				胴部の破片	外面：タタキのちナデ 内面：同心円押当具痕の上をナデ	密 0.5㎜以下の砂粒含む	良	
14図65	29	SI−03	須恵器 壺				胴部の破片	外面：タタキのちナデ 内面：同心円押当具痕の上をナデ	密 0.5㎜以下の砂粒含む	良	
17図1	30	SI−04	甕	18.2			外傾する短い複合口縁を持ち、端部は平坦 稜は鈍い	内外面：ヨコナデ	1㎜以下の砂粒含む	良	
19図1	30	SI−05	甕	11.8			口縁部は強く反る 器肉は厚い	口縁内外面：ハケメ 体部内面：ヘラケズリ	0.5㎜以下の砂粒含む	良	

挿図番号	図版番号	出土地点	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	形態の特徴	手法の特徴	胎土	焼成	備考
19図2	30	SI−05	高坏	16.0			坏部は外傾し口縁に至る外面に段を有する	外面：ハケメ	3㎜以下の砂粒含む	やや不良	
19図3	30	SI−05	高坏				平坦な坏底部内面	風化	密	やや不良	
19図4	30	SI−05	高坏		9.2		やや開き気味の脚筒部から脚端部にかけ、さらに大きく開く	外面：ヘラミガキ後ナデ 内面：しぼり痕	密	良	内外面に刺突痕あり
21図1	30	SB−01	甕	19.8			退化した複合口縁 稜は鈍い	内外面：ヨコナデ	0.3㎜以下の砂粒含む	良	
21図2	30	SB−01	高坏	15.0			坏部は外傾し口縁に至る外面に段を有する	坏口縁部外面：ヨコナデ 坏底部外面：ハケメ	密 0.3㎜以下の砂粒含む	やや不良	
23図1	30	SB−02	甕	13.4			口縁部は外傾 端部外面に稜をもつ	外面：ハケメ後ヨコナデ 口縁内面：ヨコナデ 体部内面：ヘラケズリ	密 1㎜以下の砂粒含む	良好	
23図2	30	SB−02	甕	13.5			単純口縁は外反気味なで肩	口縁部：ヨコナデ 体部外面：ハケメ 体部内面：ヘラケズリ	1㎜以下の砂粒含む。	良	
23図3	31	SB−02	甕	31.2			口縁部に向かってゆるやかに開く	外面：ハケメ 内面：ヘラケズリ	1㎜以下の砂粒含む	やや不良	
23図4	30	SB−02	高坏		9.8		やや開き気味の脚筒部から脚端部にかけ、さらに大きく開く	外面：ハケメ 筒部内面：ケズリ	密	良	
27図1	31	SB−06	甕	18.0			「く」の字に屈曲する口頸部。外傾する単純な口縁	口縁内外面：ヨコナデ 体部外面：ハケメ 体部内面：ヘラケズリ	2㎜以下の砂粒含む	良	
27図2	31	SB−06	甕	21.6			「く」の字に屈曲する口頸部	口縁内外面：ヨコナデ 体部外面：ハケメ 体部内面：ヘラケズリ	0.5㎜以下の砂粒含む	良	
27図3	31	SB−06	甕	15.5			「く」の字に屈曲する口頸部。外傾する単純な口縁	口縁内外面：ヨコナデ 体部外面：ハケメ 体部内面：ヘラケズリ	1㎜以下の砂粒含む	良	
27図4	31	SB−06	甕	14.2			退化した複合口縁 稜は鈍い	内外面：ヨコナデ	0.5㎜以下の砂粒含む	良	
27図5	31	SB−06	甕	12.8			退化した複合口縁を持ち、突出部は鈍く下ぶくらみ	内外面：ヨコナデ	0.3㎜以下の砂粒含む	良	
27図6	31	SB−06	壺	15.6			単純口縁は外反気味なで肩	体部内面：ヘラケズリ	1㎜以下の砂粒含む	やや不良	
27図7	31	SB−06	高坏				平坦な坏底部内面	坏底部内面：ミガキ 坏底部外面：ハケメ	密	良	

挿図番号	図版番号	出土地点	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	形態の特徴	手法の特徴	胎土	焼成	備考
27図8	31	SB−06	高坏		9.4		やや開き気味の脚筒部から脚端部にかけ、さらに大きく開く	内面：ヘラケズリ 外面：ヘラミガキ、ナデ	1.5㎜以下の砂粒含む	良	
27図9	31	SB−06	土製支脚				3方向に突起をつける	指頭圧痕 ナデ	1㎜以下の砂粒含む	良好	
30図1	31	SX−01	甕	19.6			外反する単純口縁なで肩	口縁内外面：ヨコナデ 体部外面：ハケメ 体部内面：ヘラケズリ	1㎜以下の砂粒含む	良好	
30図2	32	SX−01	甕	34.2			外反する単純口縁なで肩	口縁内外面：ヨコナデ 体部外面：ハケメ 体部内面：ヘラケズリ	1㎜以下の砂粒含む	良好	
30図3	32	SX−01	甕					指頭圧痕 ナデ	1㎜以下の砂粒含む	良好	第30図4と同一個体
30図4	32	SX−01	甕					外面：ハケメ、ナデ 指頭圧痕 内面：ヘラケズリ	1㎜以下の砂粒含む	良好	第30図3と同一個体
30図5	31	SX−01	甑	16.5			底部の破片。直径8㎜の円孔	外面：ハケメ 内面：ヘラケズリ	0.5㎜以下の砂粒含む	良好	
30図6	32	SX−01	須恵器坏	12.0		4.5	口縁部がくびれ、内面にかすかな稜	底部回転糸切り 底部内面：ナデ	密 1㎜以下の砂粒含む	良好	焼成時の歪で楕円形
30図7	32	SX−01	須恵器坏	13.0		3.75	体部は内湾気味に伸び、口縁部でわずかにくびれる。あげ底	底部回転糸切り	密	良好	
30図8	32	SX−01	須恵器坏	12.9		3.8	体部は内湾気味に伸び、口縁部でわずかにくびれる	底部回転糸切り	密 0.5㎜程の砂粒含む	良好	
30図9	32	SX−01	須恵器坏	14.0		4.55	口縁部がくびれ、内面にかすかな稜。	底部回転糸切り	密 3㎜大の砂粒含む	良好	
30図10	32	SX−01	須恵器壺	8.3	6.7	9.4	胴部は良く張り、口縁部がくびれる 上げ底気味の底部	底部回転糸切り	密	良好	
30図11	32	SX−01	須恵器坏				底部の破片	底部回転糸切り	密 0.5㎜以下の砂粒含む	良好	
30図12	32	SX−01	須恵器坏	13.4		3.7	口縁部がわずかにくびれる	底部回転糸切り	2㎜以下の黒色砂粒多く含む 密	良好	
31図13	33	加工段	土師器皿	18.6		2.9	平坦な底部から、やや内湾する口縁	底部回転糸切り	密	良	
31図14	33	加工段	須恵器蓋	14.8	つまみ4.5	2.65	天井部に低い輪状つまみ。口縁端部は下垂	天井部外面：回転ヘラケズリ 天井部内面：ナデ その他は回転ナデ	密 2㎜大の砂粒含む	良好	

挿図番号	図版番号	出土地点	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	形態の特徴	手法の特徴	胎土	焼成	備考
31図15	33	加工段	須恵器坏	10.4			口縁部の小破片	内外面：回転ナデ	密 0.5㎜程度の砂粒含む	良好	
31図16	33	加工段	長頸壺	11.8			口縁部は外反して伸び、端部は丸くおさめる 頸部に沈線2条	内外面：回転ナデ	密	良好	31図20と同一個体
31図17	33	加工段	須恵器高台付坏	11.4	高台径 7.6	4.75	体部は内湾気味に立ち上がり、底部に高台を付ける	内外面：回転ナデ	密 0.5㎜以下の砂粒含む	良好	
31図18	33	加工段	須恵器高台付坏	13.0	高台径 9.0	4.0	直線的に開く口縁部 平坦な底部端に高台をつける	内外面：回転ナデ	密	良	
31図19	33	加工段	須恵器高台付壺		高台径 7.5		高台の端部が反り返る	内外面：回転ナデ	密 1㎜以下の砂粒含む	良好	
31図20	33	加工段	長頸壺		高台径 9.6		高台の付いた底部より丸味をもって立ち上がる	底部は静止糸切りのち回転ナデ、その他は回転ナデ	密	良好	31図16と同一個体
31図21	33	加工段	須恵器高台付壺		9.6		底部の小破片	体部内外面：回転ナデ	密 0.5㎜程度の砂粒含む	良好	
33図1	33	SK−01	甕	20.7		20.0	外反する口縁部、なで肩、底部が良く張る	体部外面：ハケメ 体部内面：ヘラケズリ 口縁内外面：ヨコナデ	1㎜以下の砂粒含む	良好	
33図2	33	SK−01	須恵器高台付坏	13.0	高台径 8.6	4.7	外傾する高台、底部より丸味をもって立ち上がりやや内湾して伸びる	底部静止糸切り	密	良好	
35図1	34	SK−02	甕	15.5			外傾する口縁	体部内面：ヘラケズリ	2㎜以下の砂粒含む	やや不良	
39図15	34	I区 I−2区	土製品				土製品の小破片	外面：ハケメ、指頭圧痕 内面：中空部あり	1㎜以下の砂粒含む	良	
39図16	34	I区 H−2区	縄文土器					外面：粗いナデ 内面：ナデ	1㎜以下の砂粒含む	良	
39図17	34	I区 I−2区	手づくね土器	3.8		2.7	椀形	指頭圧痕	0.5㎜以下の砂粒多く含む	良	完形
38図1	34	I区 H−2区	深鉢				胴部屈曲	外面：ナデ、浅い一条の沈線 内面：ナデ、2枚貝条痕	1㎜以下の砂粒含む	良	
38図2	34	I区 J−4区	甕	19.0			複合口縁部は外反する	口縁部：ヨコナデ	0.3㎜以下の砂粒含む	良	スス付着
38図3	34	I区 J−4区	甕	18.0			複合口縁部は外反する	口縁部：ヨコナデ	密	良	

挿図番号	図版番号	出土地点	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	形態の特徴	手法の特徴	胎土	焼成	備考
38図4	34	I区 J－4区	甕	15.0			退化した複合口縁 稜は鈍い	体部内面：ヘラケズリ	1㎜以下の砂粒多く含む	やや不良	
38図5	34	I区 J－4区	甕	20.6			複合口縁部は外反し、シャープなつくり	I縁部：ヨコナデ	0.3㎜以下の砂粒含む	良	
38図6	35	I区 J－4区	底部		4.8		平　底	体部外面：ヨコナデ 体部内面：ヘラケズリ	3㎜以下の砂粒多く含む	良	
38図7	34	I区 J－4区	甕				複合口縁部は外反する	I縁部：ヨコナデ	0.5㎜以下の砂粒含む	良	
38図8	35	I区 J－4区	鼓形器台	22.1	17.0		縮約の進んだ筒部	上台部内面：ヨコナデ 筒部外面：斜行刺突紋	0.5㎜以下の砂粒多く含む	良	
38図9	35	I区 J－4区	高杯	17.0			杯部は外傾し口縁に至る外面に段を有する	口縁部：ヨコナデ 杯底部外面：指頭圧痕	0.5㎜以下の砂粒含む	良好	
38図10	35	I区 J－4区	高杯	16.5	10.6	11.3	杯部は外傾し口縁に至る外面に段を有する	杯部内面：ハケメ 杯部外面：ヨコナデ 脚部外面：ヘラミガキナデ	1㎜以下の砂粒含む	良	
38図11	34	I区 I－3区	高杯脚部		9.4		やや開き気味の脚筒部から脚端にかけ、さらに大きく開く	風　化	1㎜以下の砂粒含む	やや不良	
38図12	35	I区 J－3区	須恵器 壺				肩部の破片	体部外面に2条の沈線とくし描き波状紋、その他回転ナデ	密 0.5㎜以下の砂粒含む	良好	38図13と同一個体
38図13	35	I区 J－3区	須恵器 壺				底部の破片、丸底	外面：回転ヘラケズリ後ナデ 内面：ナデ	密 0.5㎜以下の砂粒含む	良好	38図12と同一個体
38図14	35	I区 J－3区	須恵器 壺				外反する口頸部と良く張った肩部	外面：浅い4条の沈線、斜行刺突紋 くし描き波状紋	密	良好	
44図1	37	S1－06	甕	16.8			複合口縁部は外反する	口縁部：ヨコナデ	1㎜以下の砂粒含む	良	
44図2	37	SI－06	甕	14.1			複合口縁部は外反する	口縁部：ヨコナデ	1㎜以下の砂粒含む	良	
44図3	37	SI－06	低脚杯	11.6	5.9	4.9	底部から体部は内湾し、口縁端部は外反。脚部は開く	風　化	1㎜以下の砂粒含む	良	
44図4	37	SI－06	低脚杯	14.8	4.9	5.2	丸味のある底部よりゆるやかに内湾し立ち上がる	内面：ヘラミガキ 外面：ハケメ	1㎜以下の砂粒含む	良好	
44図5	37	SI－06	高杯				円筒状の脚筒部	外面：ヨコナデ 内面：ヘラケズリ	1㎜以下の砂粒含む	良	

挿図番号	図版番号	出土地点	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	形態の特徴	手法の特徴	胎土	焼成	備考
44図6	37	SI−06	鼓形器台	筒部径12.5			筒部付近の破片	風化	2mm以下の砂粒含む	良	
46図1	38	SI−07	甕	12.4			複合口縁部は外反する	口縁部：ヨコナデ	0.5mm以下の砂粒含む	良	
46図2	38	SI−07	甕				複合口縁部は外反する	風化	1mm以下の砂粒含む	やや不良	
46図3	38	SI−07	鼓形器台		11.6		筒部から脚台部の破片	風化	1mm以下の砂粒含む	やや不良	
46図4	37	SI−07	甑形土器	9.6			僅かに内湾気味にすぼまった口縁部 横把手	外面：ハケメ	1mm以下の砂粒含む	良	46図5と同一個体
46図5	37	SI−07	甑形土器		37		ゆるやかに開く底部	外面：ハケメ、ヨコナデ 一部浅い沈線 内面：ヘラケズリ	1mm以下の砂粒含む	良	46図4と同一個体
46図6	37	SI−07	須恵器蓋	16.1	つまみ4.9	2.5	天井部に低い輪状つまみ。口縁端部は下垂	天井部外面：回転ヘラケズリ 天井部内面：ナデ その他は回転ナデ	密 1mm以下の砂粒含む	やや不良	
48図1	38	SI−10	鼓形器台				筒部から上台部の破片	内外面：ヨコナデ	0.5mm以下の砂粒含む	良	
51図1	39	SI−08	甕	18.7			複合口縁部は外反する	口縁部：ヨコナデ	0.5mm以下の砂粒含む	良	
51図2	39	SI−08	甕	14.2			複合口縁部は外反する	口縁部：ヨコナデ	1mm以下の砂粒含む	良	
51図3	39	SI−08	甕	17.6			複合口縁部は外反する	口縁部：ヨコナデ	1mm以下の砂粒含む	やや不良	
51図4	39	SI−08	甕	15.0			複合口縁部は外反する	口縁部：ヨコナデ	1mm以下の砂粒含む	やや不良	
51図5	39	SI−08	甕	16.4			複合口縁部は外反する	口縁部：ヨコナデ	0.5mm以下の砂粒含む	良	
51図6	39	SI−08	甕	13.2			複合口縁部は外反する	口縁部：ヨコナデ	密 0.5mm以下の砂粒含む	良	
51図7	39	SI−08	甕	20.6			複合口縁部は外反する	口縁部：ヨコナデ	1mm以下の砂粒含む	良	
51図8	39	SI−08	甕	21.6			複合口縁部は外反する	口縁部：ヨコナデ	1mm以下の砂粒含む	良	

挿図番号	図版番号	出土地点	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	形態の特徴	手法の特徴	胎土	焼成	備考
51図9	38	SI−08	低脚坏		7.2		脚部片	外面：ヨコナデ	0.5㎜以下の砂粒含む	良	
51図10	38	SI−08	甕				胴部片	外面：ハケメ、斜行刺突紋 内面：ヘラケズリ	1㎜以下の砂粒多く含む	良	
51図11	39	SI−08	坏	14.4	高台径 9.5	5.3	低い高台、底部より丸味をもって立ち上がり、内湾気味	回転ナデ 内面底部：ナデ	密	良好	底部に甕片密着
51図12	39	SI−08	甕	24.8			外反する単純口縁なで肩	口縁部：ヨコナデ 体部内面：ヘラケズリ	0.5㎜以下の砂粒含む	良	
57図1	39	SB−10	甕	28.9			外反する単純口縁なで肩	口縁部：ヨコナデ 体部内面：ヘラケズリ	2㎜以下の砂粒含む	良	
58図1	40	SD−04	高坏	13.3	10.0	8.0	椀形の坏部、口縁部は内湾する。「八」の字状の低い脚部	内面：ナデ、一部ハケメ 坏底部外面：指頭圧痕	1㎜以下の砂粒含む	やや不良	
58図2	40	SD−04	高坏	14.4	10.1	9.3	椀形の坏部、口縁部は内湾する。「八」の字状の低い脚部	外面：ヨコナデ、ハケメ 内面：ナデ、一部ハケメ 脚部内面：ハケメ	1㎜以下の砂粒含む	やや不良	
58図3	40	SD−04	高坏	13.5	6.9	10.7	坏部は外傾し口縁に至る外面に段を有する	坏部内外面：横ナデ、一部ハケメ	1㎜以下の砂粒含む	やや不良	
58図4	40	SD−04	瓶把手					ナデ	1㎜以下の砂粒含む	良	
58図5	40	SD−04	須恵器坏		高台径 8.5		高台を持つ坏底部の破片	底部回転糸切り後、高台貼り付け	密 1㎜以下の砂粒含む	やや不良	
58図6	40	SD−04	須恵器坏				坏底部の破片	底部回転糸切り	密 0.5㎜以下の砂粒含む	良好	
58図7	40	SD−04	須恵器坏				坏底部の破片	底部静止糸切り	密 0.5㎜以下の砂粒含む	良好	
63図1	41	SK−06	土師器椀	17.1		5.9	平坦な底部から丸味をもって立ち上がる 端部は内湾気味	底部外面：ヘラケズリ 内面：螺旋状の暗紋と放射状の暗紋	1㎜以下の砂粒含む	良	
63図2	41	SK−06	坏蓋	10.9	つまみ径 1.6	3.0	頂部に宝珠つまみ、縁端部の内面に返りをつける	天井部外面：回転ヘラケズリ 天井部内面：ナデ その他は回転ナデ	密 0.5㎜以下の砂粒含む	良好	
63図3	41	SK−06	坏身		9.2	3.2	平坦な底部より丸味をもって立ち上がる。やや外傾した口縁部	底部外面：ヘラオコシ その他は回転ナデ ヘラ記号「×」	密	良好	底部外面にもヘラ記号状の痕あり
63図4	41	SK−06	坏蓋		9.1	3.4	頂部と縁部の境が不明瞭 端部は内湾する	天井部外面：ヘラオコシ 天井部内面：ナデ その他は回転ナデ	密 1㎜以下の砂粒含む	良好	

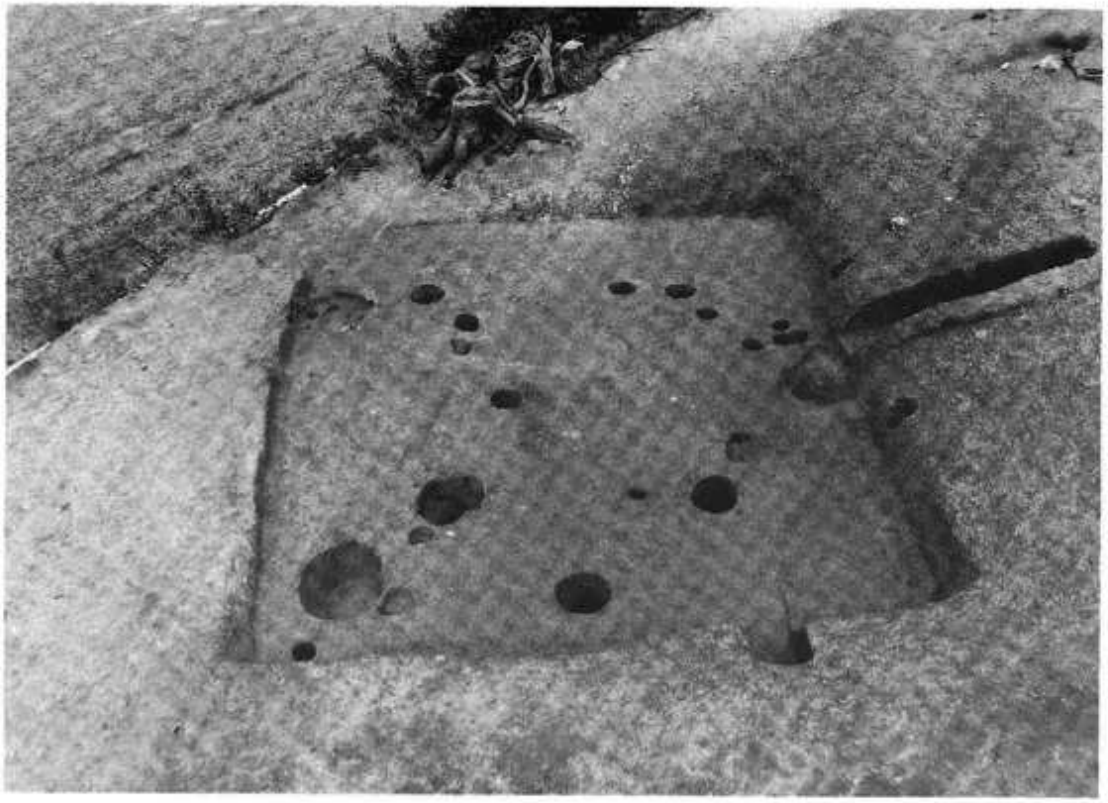
挿図番号	図版番号	出土地点	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	形態の特徴	手法の特徴	胎土	焼成	備考
63図5	41	SK−06	坏身	10.4		3.3	やや丸味のある底部返りは短い	底部外面：ヘラオコシ 底部内面：ナデ その他は回転ナデ	密 0.5㎜以下の砂粒含む	良好	底部外面にヘラ記号状の痕あり
63図6	41	SK−06	須恵器長頸壺	7.1	7.5	17.5	底部は平底、肩は丸味を帯び張る。頸部から口縁部にかけ緩やかに広がる	底部外面：回転ヘラケズリ その他は回転ナデ	密 2㎜以下の砂粒含む	良好	2条の沈線あり
68図1	42	Ⅱ区 B−7区	縄文浅鉢				胴部屈曲	風　化	1㎜以下の砂粒含む	良	
68図2	42	Ⅱ区 E−3区	低脚坏		4.9		脚部はあまり開かず直立気味	風　化	1㎜以下の砂粒多く含む	良	
68図3	42	Ⅱ区 B−7区	蓋	13.8	つまみ 4.5	2.5	天井部に低い輪状つまみ、口縁端部は下垂	天井部外面：回転ヘラケズリ 天井部内面：ナデ その他は回転ナデ	密	良好	

図　　版

I 区全景（北東より）

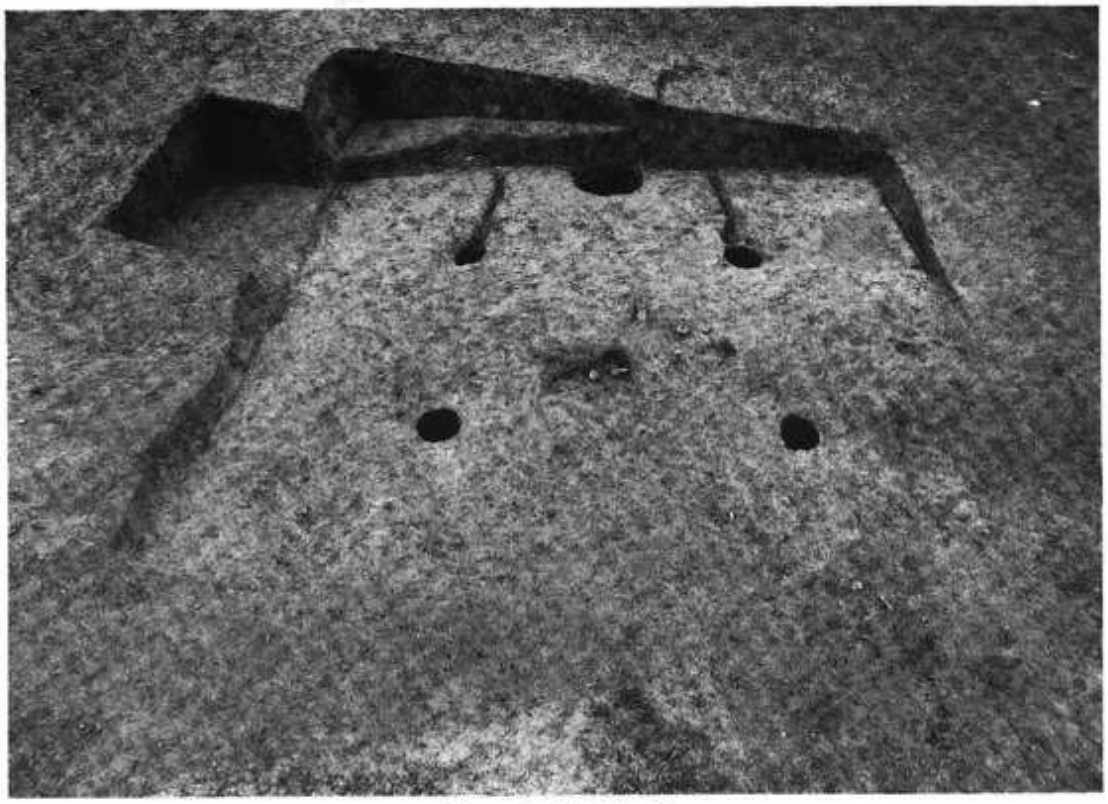
I 区全景（北より）

図版 2

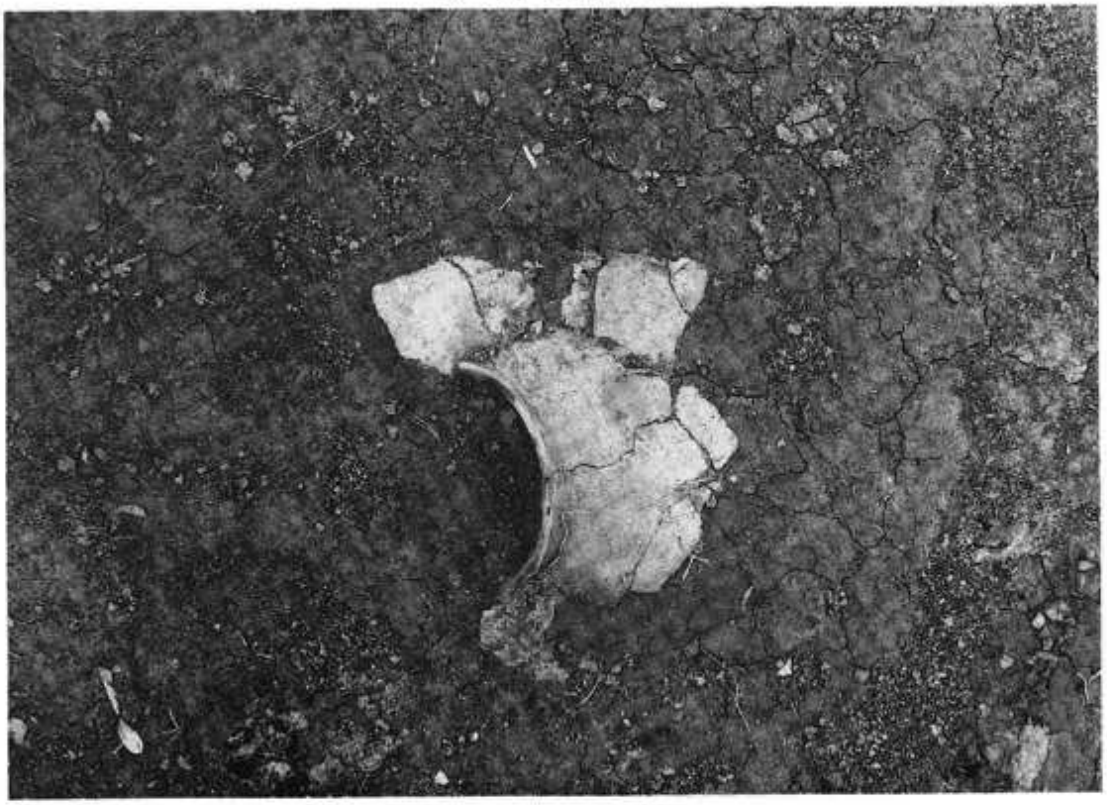


SI－01（南より）

SI－01 遺物出土状況（4図－4）

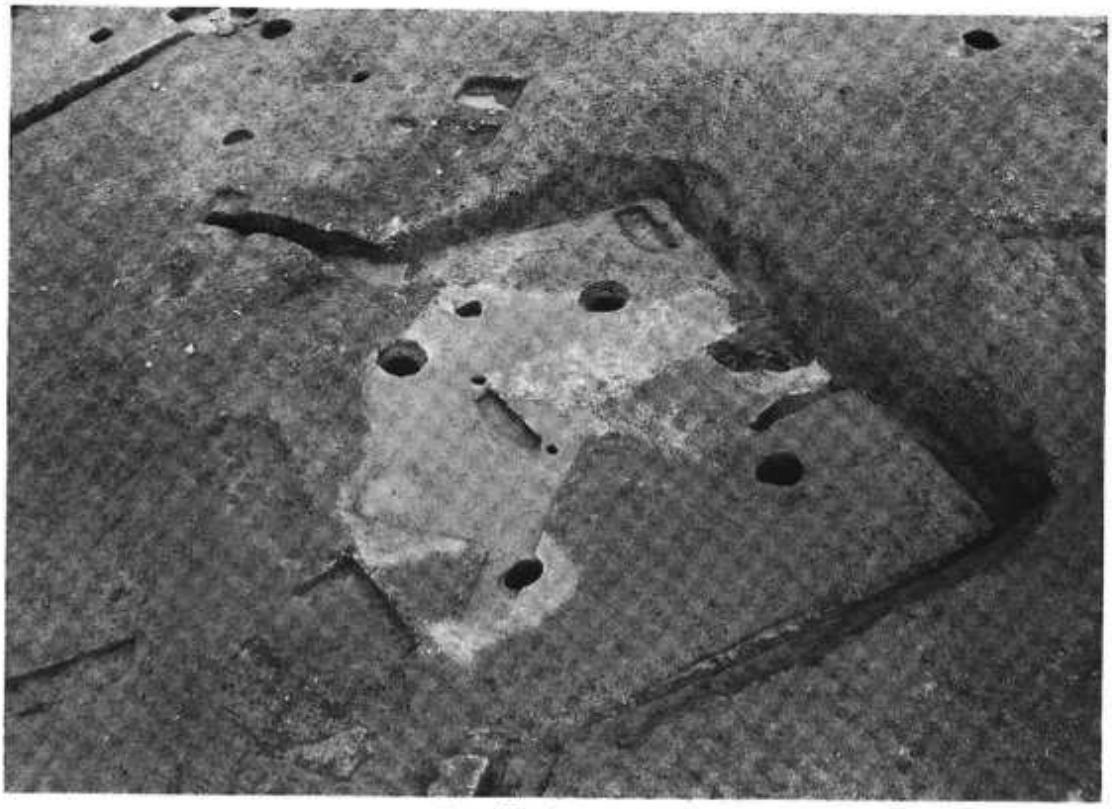


SI－02（北西より）

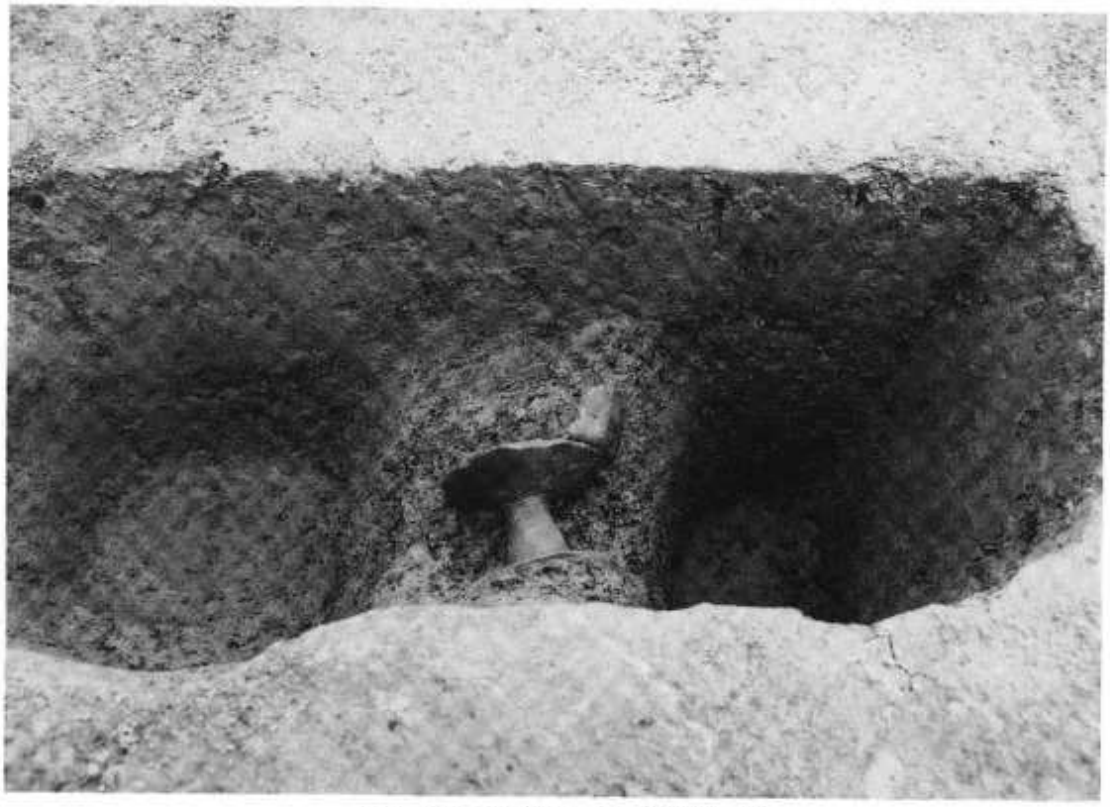


SI－02 遺物出土状況（8図－46）

図版 4

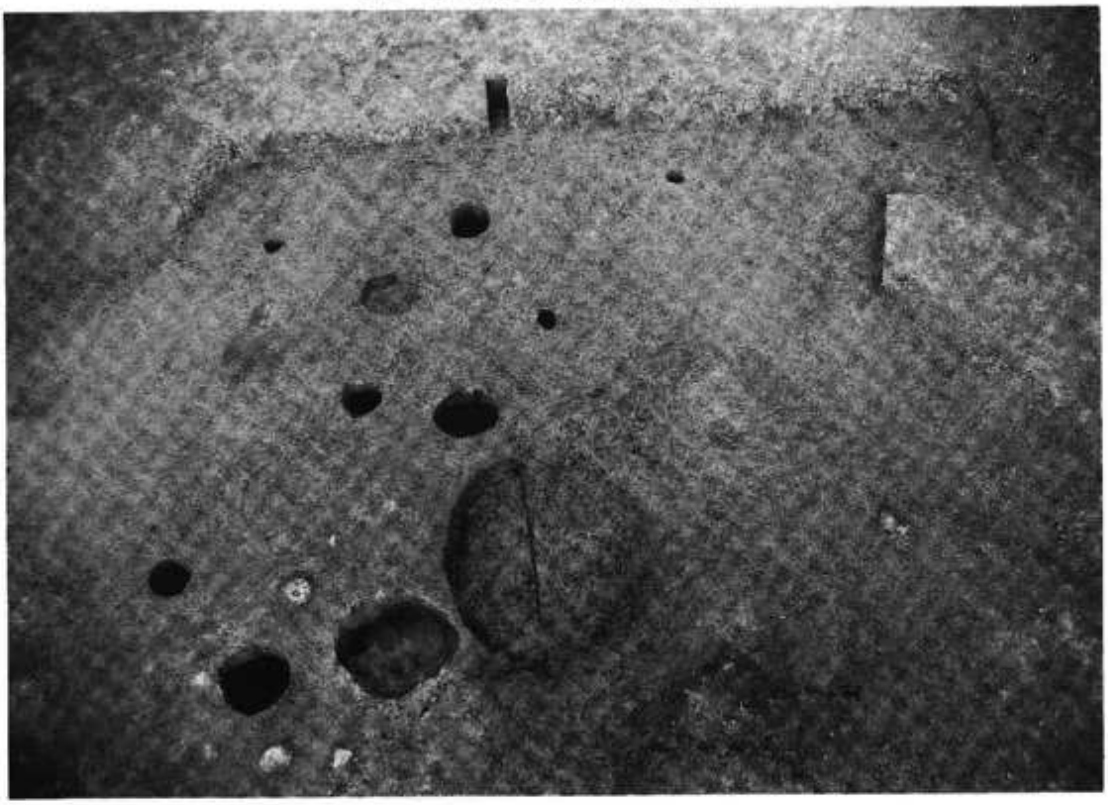


SI－03（南西より）



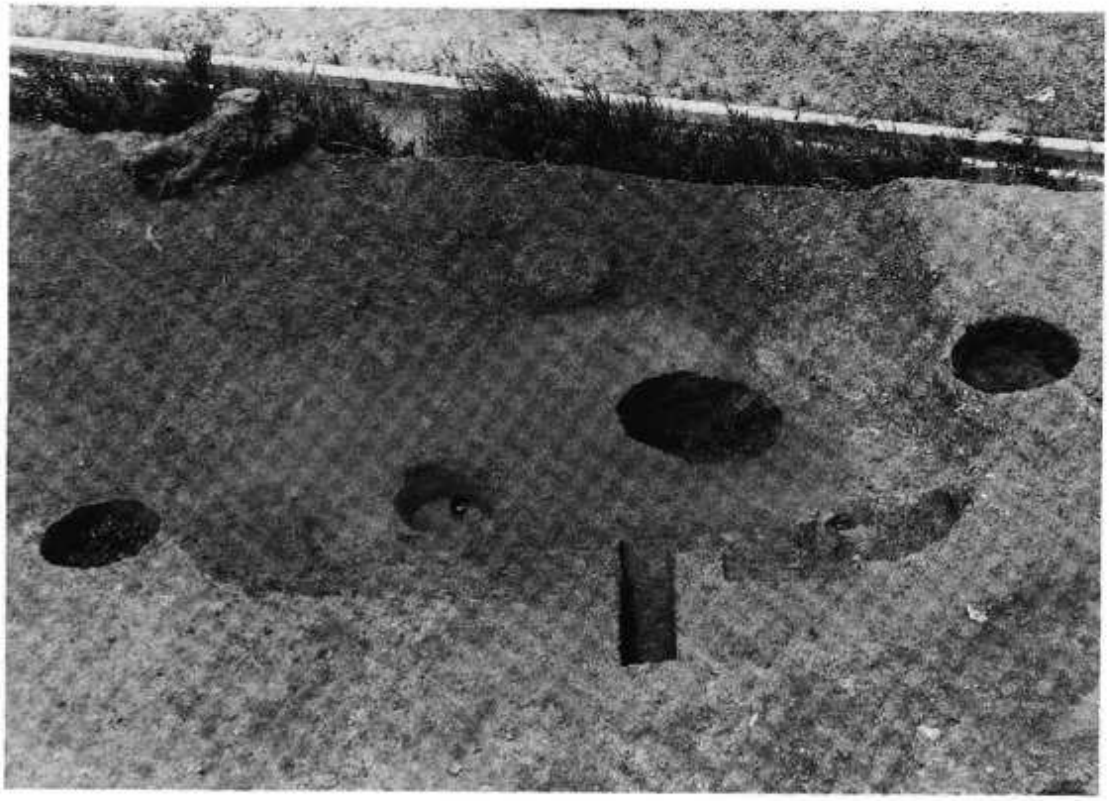
SI－03 遺物出土状況（10図－5）

SI－03 黒褐色土層遺物出土状況

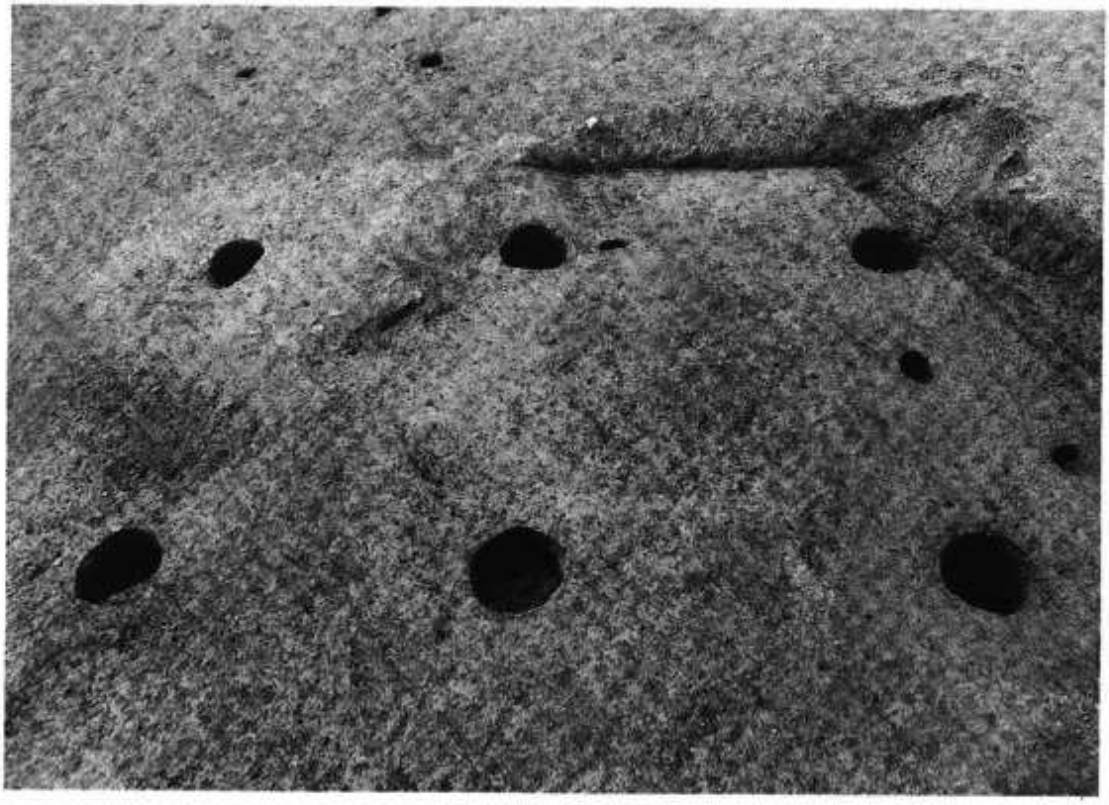


SI－04（西より）

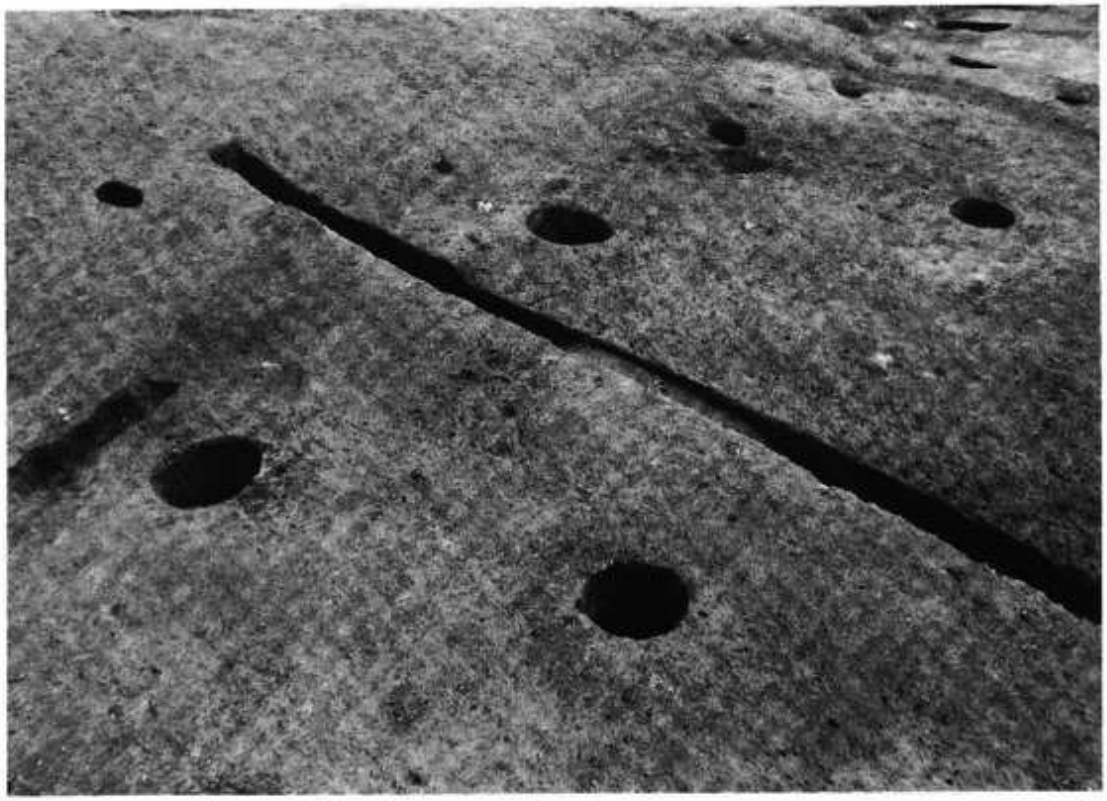
図版 6



SI－05 （東より）



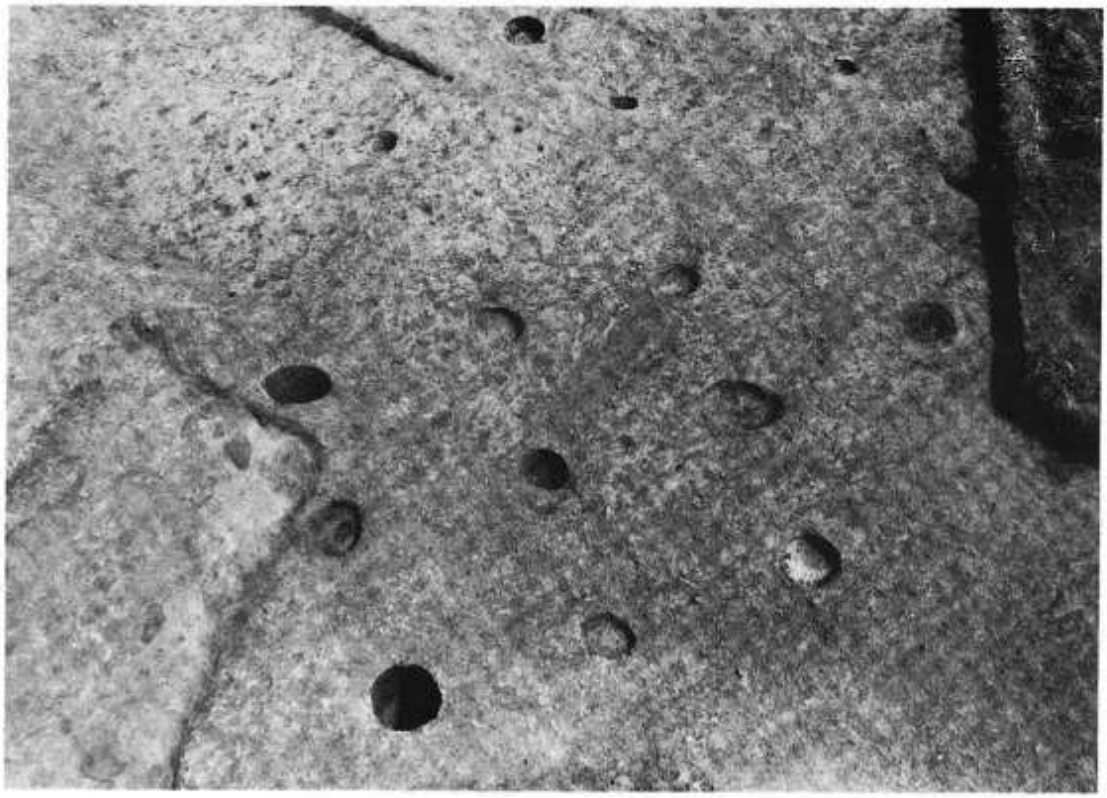
SB－01 （南より）



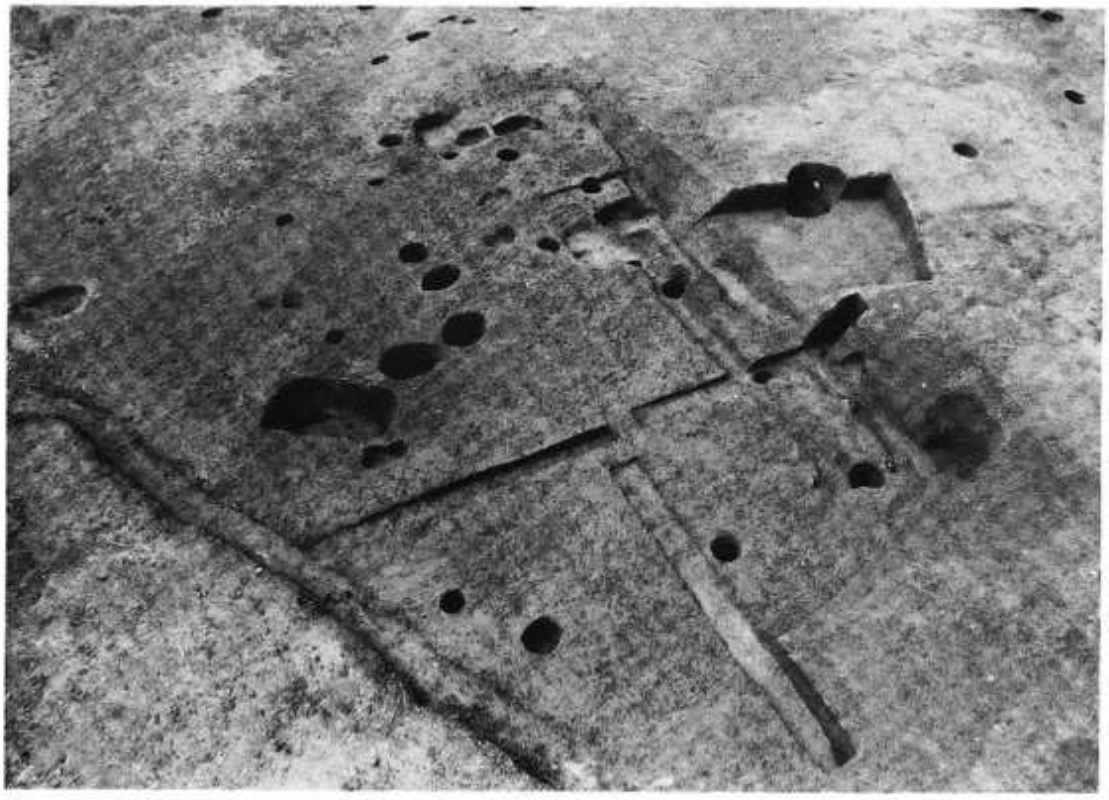
SB－02（北西より）

SB－03・SB－04（北東より）

図版 8

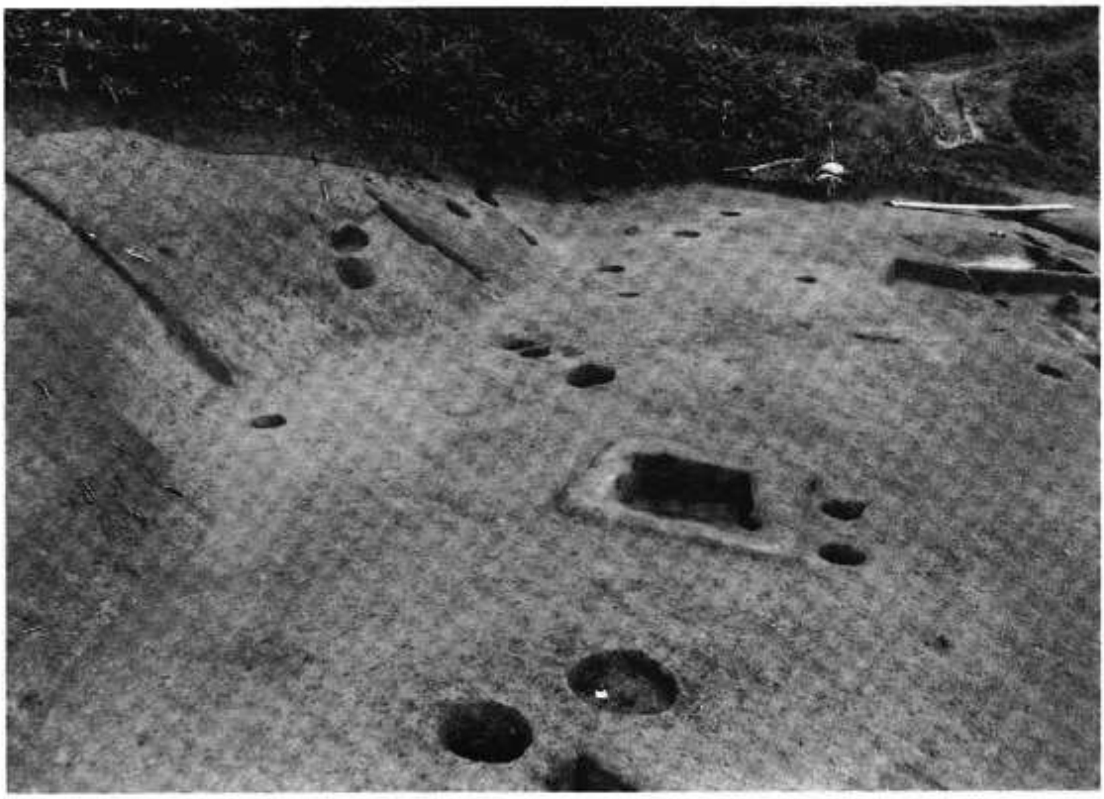


SB－05（北より）



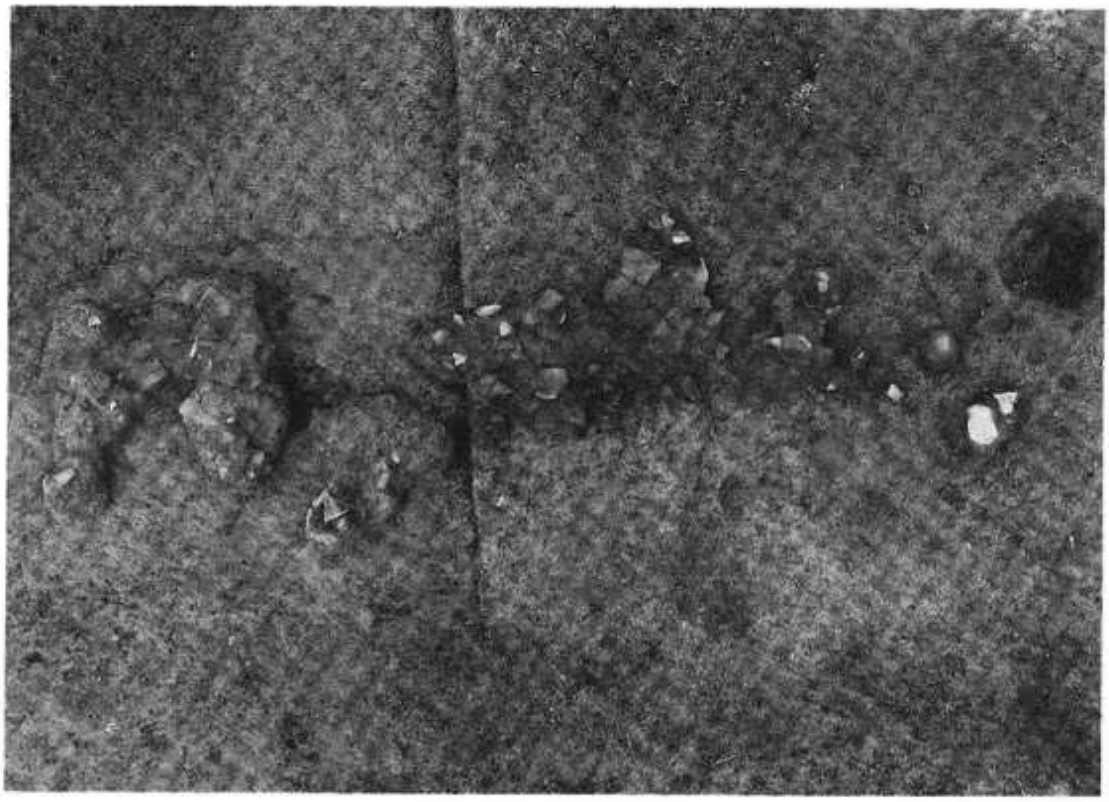
SB－06（南東より）

加 工 段（南より）

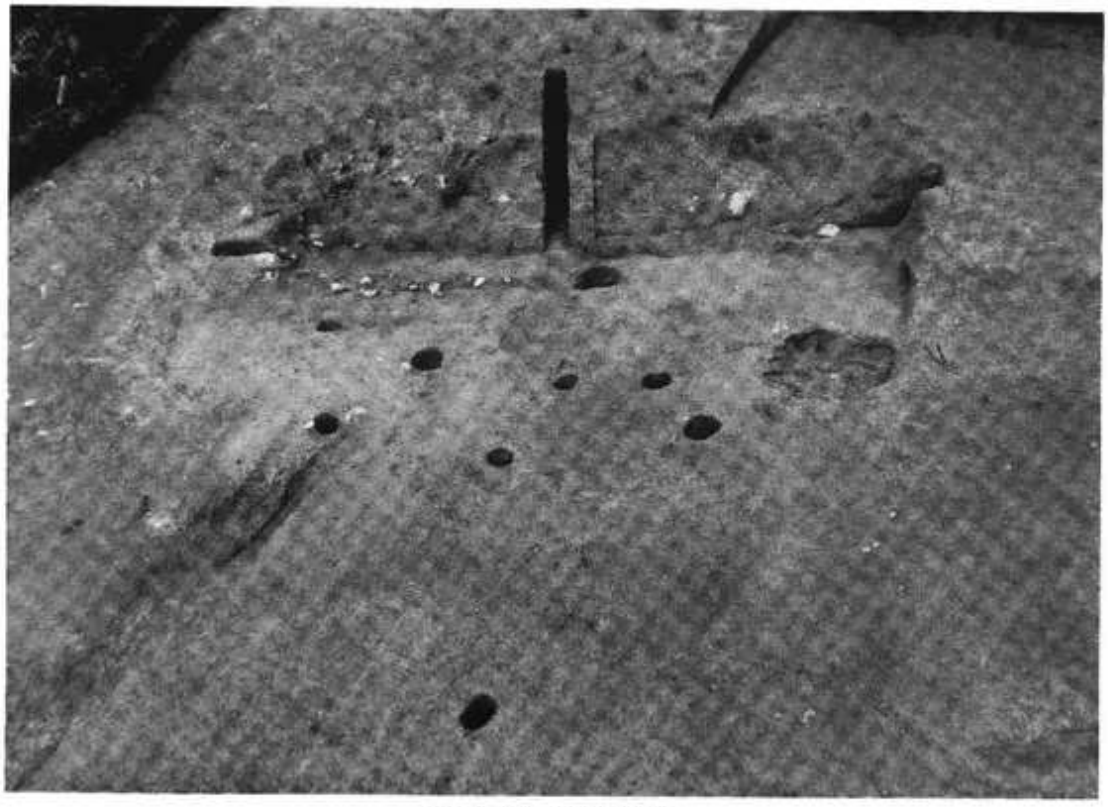


SX－01（北西より）

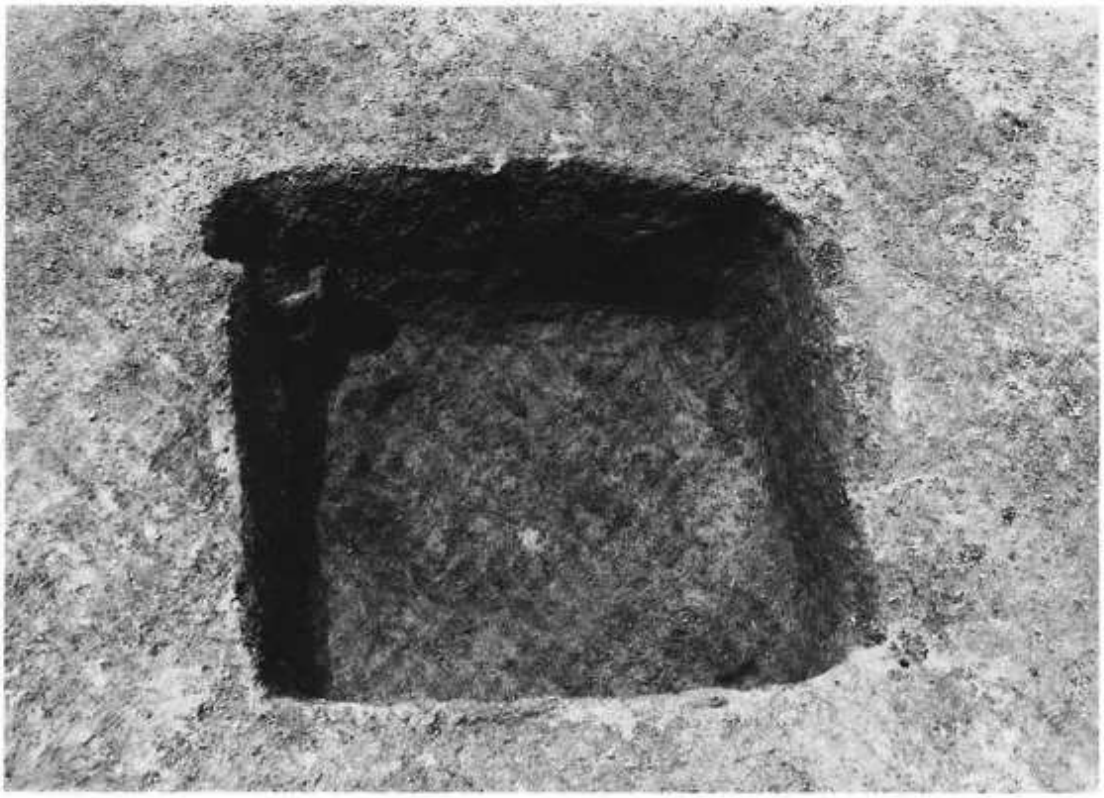
図版 10



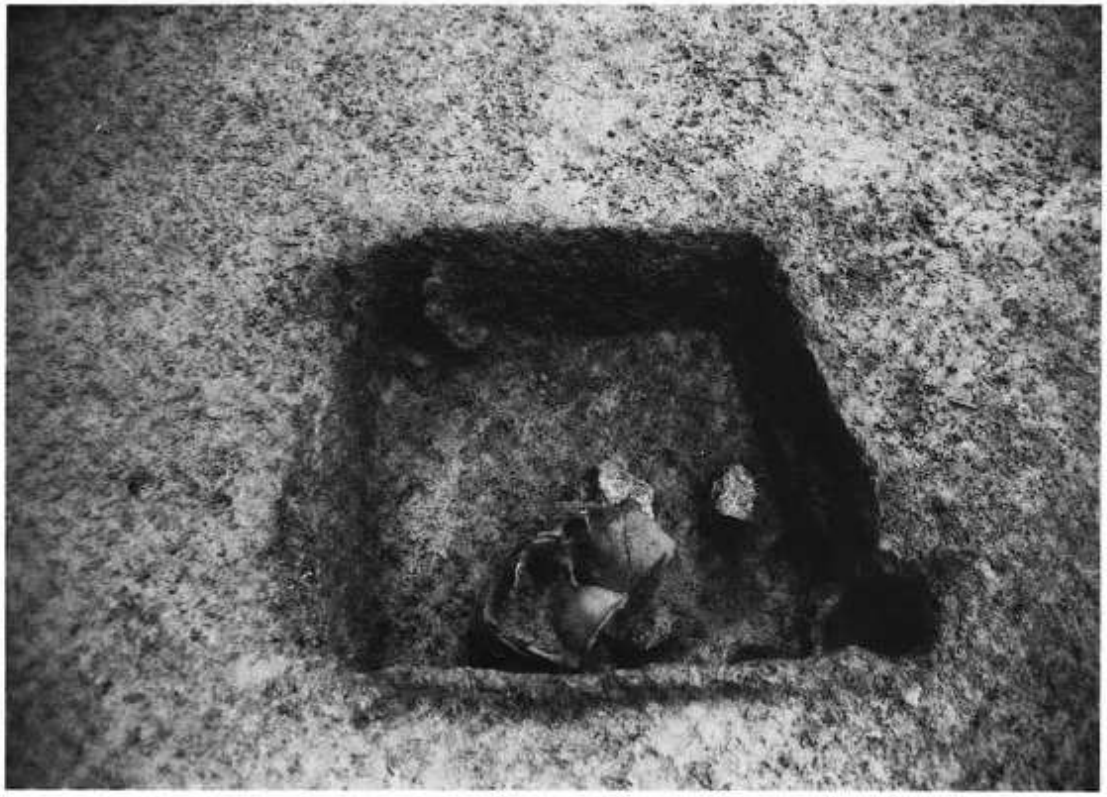
SX－01 遺物出土状況



SX－02（南西より）



SK－01（南東より）



SK－01 遺物出土状況（33図－1）